

学内六報

2015.4.23

no. 1467



おめでとうございます

五神真 第30代総長 所信表明&インタビュー
平成27年度役員等の紹介
平成26年度卒業式・学位記授与式
平成27年度入学式・大学院入学式
東大ハチ公物語クイズ

五神真 第30代総長、就任。



2015年4月1日、五神真先生が東京大学の第30代総長に就任しました。ここでは、五神新総長の所信を紹介するとともに、3月18日に広報課が行ったインタビューの内容を全文掲載します。今後6年間、先頭に立って東京大学を牽引する五神総長のメッセージを熟読してください。

五神真 (昭和32年7月26日生)
 専門：量子物理学
 昭和55年3月 本学理学部卒業
 昭和57年3月 本学大学院理学系研究科修士課程修了
 昭和58年6月 本学大学院理学系研究科博士課程退学
 昭和58年6月 本学理学部助手
 昭和63年12月 本学工学部講師
 平成2年11月 本学工学部助教授
 平成7年4月 本学大学院工学系研究科助教授
 平成10年8月 本学大学院工学系研究科教授
 平成17年4月 本学総長特任補佐
 平成22年4月 本学大学院工学系研究科附属量子科学研究センター教授
 平成22年10月 本学大学院理学系研究科教授
 平成24年4月 本学副学長
 平成26年4月 本学大学院理学系研究科長・理学部長

ミナールをはじめとした少人数教育、国際化教育、体験活動プログラム、推薦入試等、既に着手した学部教育改革についてその定着をはかります。学部から大学院を通じた教養教育の提供、学生支援ネットワークの更なる強化を図ります。

三つの基礎力を涵養し、他者理解と自己相対化の力を育む

主体的な学びの中で、学生達の「自ら原理に立ち戻って考える力」、「考え続ける忍耐力」、「自ら新しいアイデアや発想を生む力」の三つの基礎力を鍛えると共に、それらを育み、活かすために、多様性を尊重する精神と他者への理解を通じて自らを相対化できる広い視野を獲得し、多くの人々と協働しつつ行動できる力を養います。

五神総長 所信

世界的な視野で「多様性を活力とする協働」を牽引する

グローバル化が加速する中で、資源の枯渇、環境破壊、エネルギー安全保障、世界金融不安、貧困、少子高齢化、感染症に関するパンデミックなど、人類全体で取り組むべき課題が顕在化しています。これらの地球規模の課題に対処するためには、様々な壁を越えて、人々が多様な知恵を出し合い、それらを活用し、連携協力して行動をおこすこと、すなわち「多様性を活力とする協働」が不可欠となっています。

東京大学は、創立以来、東洋の伝統に根を張りながら、西洋の学術文化を旺盛に取り込み、東西文化融合の独自の学術を世界に発信し、人類の知を多様なものとすることに貢献してきまし

た。この伝統をしっかりと引き継ぎ、新たな知の創造とその活用の道を拓くとともに、世界を舞台として行動する人材を育てることで人類社会に貢献するための不断の挑戦を続けていきます。

この目指すべき目標を明確化し、広く共有するため「東京大学ビジョン2020」を策定します。

学生の主体性を刺激する世界最高の学びの場を創る

グローバル化が一層進む中で、世界の舞台で活躍する力を効果的に涵養するための教育環境を整備します。各分野での卓越した研究力を活かし、学生が研究の最前線で知の興奮と喜びを体験し、それらを糧として自ら意欲をもって自己を大きく成長させる主体的な学びを促します。4学期制、初年次ゼ

「国際卓越大学院教育プログラム」を創設し、「知のプロフェッショナル」を育成する

大学院教育に関しては、世界トップレベルの研究を推進し分野を牽引する研究所やセンターとともに、卓越性、国際性、文理融合の三つをキーワードとした国際卓越大学院を創設します。具体的には、本学が世界をリードできる学問分野や新しい融合領域において、

世界水準の教育研究環境を有する修士・博士一貫の学位プログラム制大学院を開設します。この大学院において、自ら考え、新しい知を生み出し、人類社会のための知の活用を目指して行動する意欲満ち溢れた人材（「知のプロフェッショナル」）を育成します。ここに世界中から優秀な人材を惹き付けるとともに、本学が有する産学官のネットワークを活かしつつ、日本社会の活力の回復に向けた卒業生等の社会人のパワーアップの場ともなるよう、仕組みを整備します。このプログラムは、次に述べる知の協創の世界拠点の中核ともなります。

知の協創の 世界拠点となる

東京大学が世界における知の協創の中心地となることを目指します。国境、文化、世代、産学官の壁を越えて様々な人々を惹きつけることで価値創造に参加する層を広げるとともに、知の探求を知の活用へとつなげる環境を備えた「知の協創の世界拠点」を創ってきます。具体的には、文系理系といった既存の領域を超えた新しい学術を展開する先行的な試みをいち早く推進します。また、本学から生まれた知の社会への展開を効果的に進めるための共同研究やベンチャー創出、知財管理の仕組みの高度化と改革を進めます。

現場との緊密な対話、 責任と権限の明確化等 を基軸とした 運営改革を行う

飛躍の機会や課題解決のヒントは価値創造の舞台となる現場にあります。それゆえ、「現場との対話」を運営の基軸とします。また、東京大学のスケールメリットを活かすため、構成員の各層内及び層間の自由かつ緊密な意思

疎通ができる環境をつくります。組織運営においては、本部と部局の責任と権限を明確化した上で緊密な意思疎通をはかるとともに、情報の共有と意思決定の透明化を一層進めます。

社会との関係では、その負託に対し、より高いレベルで応えるため、経営協議会等を窓口とした密度の高い実質的な対話を行う仕組みをつくります。また、構成員間でより高度な研究倫理と規範意識を共有し、科学と学術に対する社会からの信頼を高めます。

社会からの信頼を前提として、東京大学の挑戦を可能とする財務基盤を確立するため、総長のリーダーシップのもとで、資源の拡大に努めます。

多様性を広げつつ、 東大の総合力を 発揮する

女性と若手の登用を促進するため、それを阻んでいる障害やその解決策に関して建設的で効果的な議論を進め、その結果を実行に移します。また、世界中から優秀な教員、研究者、学生を惹きつけ、存分に活躍できる場を提供することができるように、より柔軟な就労体制や充実した支援体制を整備します。さらに、東京大学に関係する全世代の総合力を結集するため、卒業生、退職教員等からなる人的ネットワークを飛躍的に充実させます。以上により、多様性を広げつつ、東京大学の総合力を発揮できるようにします。

卓越した若手研究者 のために、安定性と 流動性を両立させる 人事制度を実現する

若手の教員・研究者の存在は、活力の源泉ですが、その雇用環境が急速に悪化しており、研究に打ち込むことが

難しくなっています。若手にとつての「研究する人生」の魅力を回復し、適材適所の人事配置を可能とすることで、真に新しいこと、未知なるものにしっかりと立ち向かえるようにするため、安定性と流動性を両立させる人事制度を実現し、雇用環境を抜本的に改善します。

知の協創を支援する プロフェッショナルを 育成しつつ、効果的な 教職協働を実現する

教員と密接に連携し知の協創を支援するプロフェッショナルとしての職員を育成します。ニーズに応じた職員の能力開発の機会や複線的なキャリアパスを提供するとともに、多様な職員の連携に支えられた効果的な教職協働を可能とし現場力を高める仕組みを作ります。また、意欲ある若手職員を継続的に確保します。

駒場・本郷・柏の三極間の ネットワークを 強化する

駒場では、学問の魅力と自律的学習の喜びを若者に伝えるための支援を強化します。本郷では、新図書館も活用しつつ文理融合連携を推進する総合的な価値創造の拠点を構築します。柏では、北側土地取得を好機と捉え、全学ビジョンを策定し、魅力あふれる国際学術拠点及び産学協創の場を構築します。以上のようにキャンパスごとに特色ある発展を図った上で、総合力の発揮を可能とし、知的多様性を一層高めていくために、駒場、本郷、柏の三極間を中心とした人的交流や協力関係を強化します。また、キャンパスと一体化し、教育機能の一部を担う寮を建設し、日本人学生と留学生がともに生活し学び合う環境を整備します。

五神新総長インタビュー

7,200字
一挙掲載!

公式の所信には収まりきれない思いや人となりを拾おうと、あまり肝要でないことも含めて広報課員が諸質問をぶつけてみました。教えてください、五神先生!

「身の引き締まる思い」は不変

広報 総長選出直後には「重責に身の引き締まる思い」と述べられました。4ヶ月ほどたったいまのお気持ちはいかがですか?

五神 「身の引き締まる思い」は変わりませぬね。重責であることは間違いないですから。

学校教育法の改正でガバナンス強化や国立大学改革が叫ばれており、社会は国立大学に変わってほしいと思っています。これは社会から大学への期待が大きいのということでもあると実感しています。

東京大学には138年の歴史があります。一教員という立場を越えて歴史を振り返ると、しっかりした活動を長年続けてきたことがわかります。明治初期、日本は西欧に追いつこうと必死でしたが、東大は明治10年から20年ほどですでに世界に通用する独自の研究を生み出していました。独自の学問をたかだか20年でつくり出すのはすごいことです。日本は西洋の生んだ果実を食べてばかりだと思われがちですが、そうではなかったのです。

グローバル化が進むなかで日本が欧米と違う立ち位置で独自の学問を伸ばすのは、東大憲章にうたわれた人類全体への貢献にも合致すること。日本の学術を牽引する責任を担う東大にとってきわめて重要なことです。2年後には創立140年。70年を一単位とすると、第二次大戦終了を境に3つ目の新しい時期に突入することになる。明治期、終戦直後に匹敵するほど大事な節目にあるのが現在だと思います。国や世界をどうつくっていくかを決める重要な時期だからこそ、東大もしっかり歩を進めないといけません。これはやはり重責だ、とあらためて痛感しています。

広報 創立20年で生まれた東大独自の研究というと、どんなものが念頭にありますか?

五神 たとえば、私に身近な物理学でいえば長岡半太郎先生の土星型原子モデルとか、細菌学でいえば北里柴三郎先生とか。天文学でも、文系分野でも、独自の学問が生まれていました。また、組織という観点でいえば、工学部を総合大学に置いたのは東大が世界で

最初です。それまで工学は専門的な学校で行なうものですが、いまでは総合大学に工学部があるのが一般的ですね。なんでも西洋の真似をしていたのではなく、大学という組織についても新しい形を生み出してきたのです。

私は理学部と工学部を行ったり来たりしながら、基礎研究と応用研究はシームレスにつながるものと捉えて研究してきました。いま、価値創造と知の探求をより密接につなぐことが重要だと感じます。産学連携、社会連携を強化することで大学の活動はより効果的になる。社会と大学が助け合う、というよりもつとなじんだ形で、いわばオーバーラップする形で発展する予感を持っています。

大学を変革してほしいという社会の要望の高まりは歴史的な大きな流れを示しています。産業界と大学が牽制し合うのではなく互いに信頼する形でともに何かをつくる。産業界の刺激で大学が変わり、大学からの刺激で産業界も変化します。双方向の変革が進み、この10年で相当世の中は変わるはず。それを日本が、東大が、先導したいと思います。

広報 10年先の姿が見えているようですね。

文化祭前日のようなワクワク感で

五神 いえいえ。ただ、2020年に東京オリンピックがあるのは明るい話ですね。大学というのは、学生を厳しく鍛える場でもありますが、基本的には若者が集まる場所。文化祭の準備をするような雰囲気、明るくワクワクと活動できる環境にしたいんです。そういう意味で、オリンピックという大きなお祭りが控えるのはいいこと。この時期に総長になったのは、ラッキーな部分かなと感じます。厳しい部分もたくさんありますが(笑)。

文化祭の準備だとワクワク感が大きすぎて寝ないでもがんばれますが、実は学問にもそういう面があります。新しいものを発見したり、新現象を誰よりも先に目の当たりにする。これは興奮しますよ。この感動が学問を進める原動力です。学生がそういう感動に接することのできる環境を整えるのが私の仕事です。

私は理系で、主に実験で感動に接するチャ



ンスに恵まれてきましたが、分野が違っても、学問以外でも、感動に接する機会は大学に転がっています。学生には、東大の潜在力を存分に感じてから卒業してほしい。素通りはもったいない。そういう意味で、濱田先生の教育改革によって「初年次ゼミナール」が始まったのは非常によいこと。受験勉強の先にあるものに早い時期で触れられるわけですから。

大学で物事を進めるのは現場の先生です。彼らとビジョンを共有しながら進むということをしきんとやりたい。総長のリーダーシップということでは、構成員の力をきちんと引き出すことが一番大事だと思います。現場の判断や活動のクオリティを上げ、責任感と緊張感をもって現場に楽しく一所懸命やってもらう。これを大学らしく進めるつもりです。

広報 「現場の責任感と緊張感」は五神時代のキーワードですね。では、そのような思いを胸に選ばれた執行部をご紹介ください。

五神 今回、役員顔ぶれを考えるにあたって意識したのは、現場を熟知した部局長経験者の皆さんに入っていただくことでした。現場に責任感と緊張感をもってもらうにはそれが適切だと考えました。

国際担当を古谷研先生にお願いしたのは、国際の仕事が教育と密接にリンクするものであり、大きな教育部局を経験した先生にお願いすべきだと思ったからです。入試担当の南風原朝和先生は、入試改革が高大接続も含め世間の大きな関心事になっているという認識があり、しっかり対応するために教育分野で専門性をお持ちの先生に担ってもらおうと思って。石井洋二郎先生は、大きな教育改革を実行する初年度ということで、駒場の細部まで熟知した先生にきちんと見てもらおうとい

うこと。保立和夫先生は、工学部という大きな組織の長を務められたのと、本部長として産学連携も推進されてきたことから。そして、東大が新しい成長戦略を考えるには柏を抜きには語れないということで、柏キャンパスを牽引してきた大和裕幸先生。戸渡速志理事は唯一の統投ですね。事務組織については前体制から継続してバトンをつないでもらうのが望ましいと考えて、お願いしました。

研究倫理、コンプライアンスについては、現役の弁護士である境田正樹さんを学外からお招きしました。医学部系のコンプライアンス案件でもお世話になった経緯があり、法律の専門家という立場、中立の立場で、研究不正・研究倫理への対応をどう制度化していくかをサポートしていただきたいと思っています。学内の人間だけだと、判断の妥当性に疑問がつく面が残ります。特にこの部門については学外の方に入ってもらおうと考えました。

図書館長のポストに込めた思い

広報 一方、女性や若手はいませんでした。

五神 結果としてはそうです。ただ、副学長として久留島典子先生に入っていただき、同時に総合図書館長もお願いしました。実は、女性の総合図書館長は東大の長い歴史で初めてです。総合図書館長というのは伝統的に総長の次に重いポストだったと認識しています。このポストに久留島先生をお迎えしたのは、一つメッセージを込めたところ。私は理系ですので、学術の文系の部分をしっかり見ていただきたいという思いも込めています。

私の任期は6年間ですが、今回就任された皆さんは全員が6年間務めるというわけではないでしょう。そのなかで、女性登用は適材

適所で考えていきたいと思っています。

若手については、6年後を考えると、私より少なくとも6歳以上若い人がいないと困ると思っています。それくらいの年齢層の人が最終的に運営の中核に入れるような登用を考えたい。6年という任期で考えたらこのくらいの年齢の人がふさわしいと思える人を今後登用していきたいですね。

広報 新執行部をひとことで表すと？

五神 「現場主義を活かすための執行部」でしょうか。東大の構造を熟知して現場で何が起きているかの理解が体に染みついた方々による執行部だと思います。東大にがんばってほしいという社会からの期待をしかと受け止められる執行部、とも言えるかもしれません。

広報 さて、濱田総長時代の「行動シナリオ」のようなものはつくるのでしょうか？

五神 やはりあったほうがいいと思います。6年後どんな姿を目指すのかを構成員の皆さんと共有するツールとして必要です。提示するビジョンに至るために何をやるかは各現場の取組みの集合体であり、本部はそれを補っていく形になると思います。濱田先生が行なったように、部局と議論をしながらつくるやり方も導入したいです。

「行動シナリオ」のような形になるかどうかはわかりませんが、中期目標・中期計画の補完というイメージを持っています。我々が実際に何をやりたいかを記すものであり、文部科学行政からは離れて東大としての自然な気持ちでビジョンとその行程を記すものです。振り返ると、「行動シナリオ」も「アクションプラン」も同様の位置づけでした。

きちんと書こうとすると、これもあれも落としとしてはまずい……となりがちです。網羅的チェックは中期目標・中期計画でできますから、何をしたいかに絞ろうと思います。いわば、ウィッシュリストですね。出発点として何をしたいのかをこのウィッシュリストで確認することが重要です。外的環境はいろいろ変わり得ますが、6年間のなかで常にそこに戻って方向を見失わないためのものですね。

広報 策定期間はいつぐらいになりますか？

五神 平成27年度の早いうちに出したいと思っています。1年かけて出そうとは思いません。1年かけるような立派なものをつくらない、と言ったほうが適切でしょうか。数ページ程度のコンパクトなものをイメージして

います。名前は、「アクションプラン」と「行動シナリオ」のどちらか、ということではなく、第3の名前を考えたいと思っています。

「五神ウィッシュリスト」策定!?

広報 「五神ウィッシュリスト」とか？

五神 近いかもね。「五神ビジョン」とか、ありふれた名になるんじゃないかな*（笑）。

広報 選出以降、「知の共創プラットフォーム」という言葉が何度も出てきていますね。

五神 言葉は「知の協創の世界拠点」に改めました。社会と大学が協働しながら何かをつくるという思いを強めたかったんです。

デジタル化時代の到来により、20年後にはいまの職業の65%はなくなるといわれます。人間にしかできないことをやるのが価値創造の意味で重要です。そこを考えるのが大学の役割。産業界も新しい産業構造がどちらに向かうのかを探っていて、東大の卒業生でも産業界で模索している人は多い。そこに学生も加わって新しい社会をつくっていく。それが「知の協創の世界拠点」のイメージです。

価値を生み出す作業は理系というイメージが強かったと思いますが、価値を生み出す元となる知は、文系分野にもたくさんあります。人文社会科学の人が価値創造に参加しやすい仕組みをつくりたい。東大出身の若い起業家を見ると文系の人もたくさんいます。彼らをして在学中からエンカレッジすれば新しい学問をつくれるだろうし、文系の学問がテクノロジーと融合すればより効果的です。整備が始まっているアカデミック・コモンズにからめてこれを進めたいと思っています。

広報 前図書館長の古田元夫先生が、新図書館計画の船出まではやったので次の総長と館長にその活用を期待する、と述べていました。

五神 アカデミック・コモンズは本郷の重要な整備事業です。次の70年の出発点、新しいシンボルとなる活動の場をつくりたいですね。文理融合の場であり、書物をベースとした人文社会科学がデジタル化とともにどう変わるのか、時代の流れを象徴する場でもあります。ベンチャーも含めて新しい価値創造が出てくる場としてイメージしています。伝統的な学問と新しい価値を融和させるのが一つの東大らしさだと思います。

広報 国立大学学長の学長裁量経費（運営費交付金の一般経費の5%相当額）が話題になりま



した。どのように活用しますか？

「生き金」を増やす工夫こそ必要

五神 これは、年々減っている運営費交付金の内側に線が入って総長の裁量で使えますよ、というだけの話です。使える額が増えたわけではなく、逆に、いままで必要経費として使っていた額が減るということですね。各部署で硬直化してできないことを、総長がリーダーシップを発揮してどのようにやるかということで、総長が何をやるかという話そのものです。だから、自由裁量枠を使ってこれをやろう、というふうには考えていません。

ポイントはお金の使い方の工夫です。同じお金でも有効に使うということ。一例を示すと、若手研究者のポストですが、東大は実はたくさん若手研究者を雇用しています。問題はそれがほぼ短い有期雇用であること。安定性のない雇用のために、若手が不安になって研究者という道の魅力が薄れています。税金を安定した雇用に振り分けて、同じ額でも「生き金」にしなければならぬ。お金をもっとくださいとお願いするのではなく、「生き金」を増やす必要があります。

加えて、社会から信頼されることによって、東大の活動の直接の受益者である産業界がコストに見合う支援をしてくれる仕組みをつくらないといけない。同時に運営改革を進め、ガバナンス強化の手法として導入された自由裁量枠以上に成果を出したいと思います。

広報 研究ひと筋の五神先生ですが、奥様との晩酌時も話題は研究に関することですか？

五神 晩酌の話はよく記事に書かれますが、要するに二人とも晩酌が好きだけです。もちろん研究の話なんてしませんよ。こちらが研究の話をしてもらえないでしょうし、私がどういう研究をしているか聞かれてもよくわからないでしょうね。

広報 研究以外の話も聞きたいです。昔は粘土やアマチュア無線が好きだったそうですね。

五神 子供の頃、近所に彫刻家のアトリエがありました。ちょっとした美術教室ですが、何か教えるというよりは自由にやらせる感じのところ。そこでよく粘土細工をつくりました。子供の作品を先生が気に入ると石膏にとってアトリエに飾ってくれることがあるんですが、私の作品も飾られたことがあって。ものづくりの楽しさはそこで味わいましたね。

先生のように気ままに作品をつくって暮らす人生は楽しそうだな、でもどうやったらできるんだろう……と子供心に思いました。

アマチュア無線は中学から。公立の中学だったので高価な無線機が買えず、自作したり中古品をもらったりしていた。校舎の屋上に竹竿を立ててワイヤーを張っていたんですが、卒業後、雷が落ちて後輩が怒られた、なんてこともありましたね。いま思うと、勉強以外のことにもけっこう時間をかけていました。

広報 では、現在の好物は何ですか？

五神 食べ物？ 和・洋・中、なんでも好きです。しいていえば中華かな。横浜にも住んでいますから中華街に行くのは楽しみの一つです。大学近くに酢豚が非常にうまい店があって好きなのですが、店名は内緒(笑)。

広報 誰かに似ていると言われたことは？

五神 いえ、特にないですね。

広報 風貌以外でも、たとえば研究のやり方が誰かに似ていると言われたことは？

五神 意識したことはありません。初期の頃から自分流でやってきたように思います。

広報 以前、影響を受けた先生として、霜田光一先生のお名前を出されていましたね。

五神 霜田先生は、大学院時代に講義を聞いてインスパイアされた先生です。後にノーベル物理学賞を受賞するテオドール・ヘンシュ先生の、新しい実験法に関する論文を霜田先生が紹介するのを聞いて、研究のアイデアを思いつき、それが私の修士論文・博士論文になりました。私とヘンシュ先生の研究はまったく別の分野ですが、なぜかこのとき私の頭の中ではつながった。さっそく試してみたら1~2ヶ月で非常にうまく行って、しかもその実験は世界初のものだった。それで研究はおもしろいと思ったんですね。

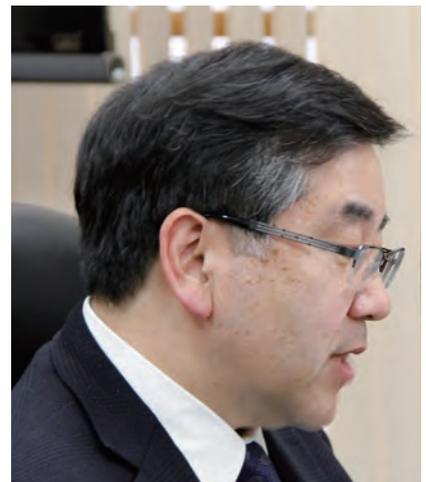
広報 毎年春にご自宅で「春の宴」というパーティー大会を開催しているそうですね。

自宅のBBQの宴で交流の輪!?

五神 はい。ゴールデンウィークの前くらいですね。もう20年以上続いています。横浜の自宅に研究室の学生やプロジェクトのメンバーが集まります。

広報 五神先生が自ら肉を焼くんですか？

五神 いえ。コンロを何台か借りて、幹事の学生が食材を買ってきて食べて飲む形ですね。私はちょっと上等な肉を準備しておいて



差し入れする感じです。

炭火の起こし方やコンロの扱いなどを見ると、個々の特徴が見えてきます。段取りのいい子とそうでない子とか(笑)。そういう様子を見て、この学生にはこういう研究テーマがいいかな、などと考えるヒントにしていた時期もありました。東大生はシステムティックに物事を伝承するのが得意で、いまはもうノウハウが伝わっているようですけどね。

この宴には、研究室の学生に限らず、プロジェクトに関わった社会人、卒業生、外国人の先生やその家族も呼んでいます。毎回、豊かな情報交換の場にもなっていると思います。

広報 これも「知の協創の世界拠点」の一つというわけですね。最後に、新総長の言葉を待っている教職員にメッセージをお願いします。

五神 いま、大学が変わることが求められています。どう変わるかを考えなければいけません。そのモデルがあるわけではないので、我々は発想力をもって新しいものをつくらなければいけません。職員も教員も学生も、みんなでアイデアを出し合って新しいものをつくる必要があります。それはとても楽しいことです。私は研究者ですから、研究の分野でそういうことを続けてきましたが、大学運営の仕事でも工夫をすればよくなるし楽しくもなる。いっしょに知恵を出し合っちゃいましょう。現場と本部、教員と職員の風通しをよくして、みんなで助け合って知恵を出し合っちゃいましょう。

広報 ありがとうございます。「五神ビジョン」をワクワクしながら待っています。

(2015年3月18日、理学系研究科長室にて)

平成27年度役員等の紹介

平成27年度役員等を以下のとおり紹介します。

総長

(任期)平成27年4月1日～平成33年3月31日

五神 真

理事・副学長

大和 裕幸

(担当)財務、総務、渉外

保立 和夫

(担当)研究、産学連携、資産・施設

石井 洋二郎

(担当)教育、評価

古谷 研

(担当)国際、病院

南風原 朝和

(担当)学生支援、入試、環境安全

理事

境田 正樹

(担当)コンプライアンス・研究倫理、監査、運営企画

戸渡 速志

(担当)事務組織、法務、人事労務、広報

監事

杉山 健一

有信 睦弘

副学長

相原 博昭

(担当)環境安全、入試企画、学術戦略、科学研究行動規範、中期目標・中期計画

久留島 典子

(担当)図書館、男女共同参画

小関 敏彦

(担当)卓越大学院、卓越研究員、学術推進支援、財務戦略

武田 展雄

(担当)柏地区整備、社会連携

森山 工

(担当)学部教育

野城 智也

(担当)キャンパス・施設

副理事

紺野 鉄二

(担当)男女共同参画、業務改革、経理・調達

関谷 孝

(担当)教養教育改革

松田 成史

(担当)人事制度改革

山路 一隆

(担当)渉外本部担当

総長室顧問

ステファン ノレーン

山田 興一

総長特別参与

橋本 和仁

(担当)科学技術制度

藤原 帰一

(担当)国際関係

総長特任補佐

相田 仁

(担当)学部教育

伊藤 たかね

(担当)学部教育国際化

岩村 正彦

(担当)若手向け雇用制度改革等

大江 和彦

(担当)病院担当補佐

坂田 一郎

(担当)総務補佐、運営企画補佐

関村 直人

(担当)国際

園田 茂人

(担当)国際

高井 まどか

(担当)男女共同参画

武田 洋幸

(担当)広報企画、学術運営企画

難波 成任

(担当)EMP



新役員等の略歴と就任の挨拶

新理事・副学長、新副学長、新副理事の略歴および就任に当たっての挨拶を以下のとおり掲載します。

世界に貢献するために国立大学法人の実質を確立する

このたび、財務・総務・渉外担当の理事・副学長を拝命いたしました。平成25年度に1年間理事・副学長を仰せつかり、2回目になります。

国立大学法人化後、10年以上経過しました。国立大学は多くの自由を手にしたのですが、折からの財政難で、運営費交付金と定員の削減、施設の老朽化など逆風のなかで苦しい経営をしいられ、法人化の実質が未確立です。大学の中での合理的な合意形成による運営も困難な状況です。世界に貢献するためには、自由な教育研究環境を維持して社会の付託に応える大学システムを確立することが急務です。

まず、大学の行動は総長―役員会―教育研究評議会―経営協議会―科所長会議―一部局教授会等で十分な議論を行い、構成員の総意でなされる

ことが基本で、これら会議の透明性高い運用と情報流通が必須です。

教育研究環境の維持発展、教育研究の新しい試みには長期財務計画が不可欠で、その計画を確実に実行しなくてはなりません。また運営費交付金ばかりでなく、外部資金や寄附など様々な取入構造が必要です。

文化創造、科学技術、政治経済の諸分野で停滞感あるいは人材枯渇の感があります。東大は学問で世界に貢献する大学です。世界の頭脳がここに集まり豊かな環境の中で切磋琢磨する場となり、文系理系ともに傑出した人材を輩出し続けなくてはなりません。

常にこのことを念頭において財務・総務・渉外の仕事をしていく所存です。

就任のご挨拶

この度、理事・副学長を拝命致しました。担当は、研究、産学連携、資産・施設です。よろしくお申しあげます。1979年に、本学電子工学専攻から博士号を授与されて、当時の本学宇宙航空研究所にて教員活動を開始致しました。後の組織改編もあって、工学部附属研究施設、先端研、工学系、新領域、そして再び工学系と、多くの学内組織を経験させて頂きました。この間に専門分野は不変でしたが、それでも所属部局によって、教育、研究、運営でのスタンスが異なることを実感しました。東京大学は規模の大きな総合大学です。ここには、私の経験とは比較にならない程の多様性が満ち溢れています。この多様性こそが東大の強みですから、これを

生かした大学組織の運営が重要です。そのためには、本部と部局間および部局と部局間での情報交換と意思疎通を実質化することが必須です。

東京大学での研究は、オリジナリティに溢れ世界を先導する研究です。研究者の皆様が、豊富な知識を糧に、自由な発想を展開し、そこに研究者の意地も加味して、そして辿り着くのが貴重なオリジナリティの原石です。これを磨き上げて行かれる過程で、研究、産学連携、資産・施設の担当者として、お手伝い出来るように努めさせて頂きたいと思っております。世界中探しても無かったこの原石を磨き上げて、その成果が社会実装できたとき、きっと歩幅の広いイノベーションが生まれるものと信じます。

理事・副学長

大和 裕幸

Hiroyuki Yamato



昭和52年3月 本学工学部船舶工学科卒業
昭和57年3月 本学大学院工学系研究科船舶工学専門課程修了工学博士
昭和57年4月 科学技術庁航空宇宙技術研究所（現JAXA）入所
昭和63年11月 本学工学部助教授
平成9年7月 本学大学院工学系研究科教授
平成11年4月 本学大学院新領域創成科学研究科教授
平成21年4月 本学大学院新領域創成科学研究科研究科長
平成24年4月 本学大学院工学系研究科副研究科長
平成24年4月 本学柏図書館長
平成25年4月 本学理事・副学長
平成26年4月 本学副学長
専門分野：産業環境学、交通システム、知識情報システム
研究内容：1) 大和裕幸・中田圭一編「人工環境学」東大出版会、平成18年(2006) 2) 大和裕幸（共著）、「人間環境学の作る世界」朝倉書店、平成27年(2015)
趣味：目的のない散歩や読書

理事・副学長

保立 和夫

Kazuo Hotate



昭和49年3月 本学工学部電子工学科 卒業
昭和54年3月 本学大学院博士課程 修了（工学博士）
昭和54年4月 本学宇宙航空研究所 専任講師
平成5年6月 本学先端科学技術研究センター 教授
平成9年4月 本学大学院工学系研究科 教授
平成11年4月 本学大学院新領域創成科学研究科 教授
平成13年10月 本学大学院工学系研究科 教授
平成20～21年度 本学大学院工学系研究科長／工学部長
平成23～25年度 本学産学連携本部長
専門分野：電子工学（システムフォトリニクス）
研究内容：1) K. Hotate and Z. He, "Synthesis of optical coherence function and its applications in distributed and multiplexed optical sensing," IEEE J. of Lightwave Technol., Vol.24, No.7, pp.2541-2557, July 2006. <Invited> 2) K. Hotate, "Fiber distributed Brillouin sensing with optical correlation domain techniques," Optical Fiber Technology (Elsevier Inc.), Vol. 19, No. 6, Part B, pp. 700-719, Dec. 2013. <Invited>
趣味：カラオケ



←2015年4月1日（水）、本部棟12階大会議室において、五神新総長、新理事の皆さんの就任式が行われました。

就任のご挨拶

このたび、教育・評価担当の理事・副学長を拜命いたしました。総合文化研究科長・教養学部長に引き続いての身に余る重責ですが、誠心誠意務めさせていただく所存です。

濱田総長時代に進められてきた「学部教育の総合的改革」では、カリキュラムの刷新、学事暦の変更、進学選択方式の改善等、いくつもの重要課題への取組がなされました。五神総長時代には、これらの改革を定着させ実装していくことが重要なテーマの一つになると認識しております。また、今後教育現場で生じるであろうさまざまな課題を検証しつつ、適宜修正や調整をおこなっていくことも必要です。各部局の状況を的確に把握し、全学的な観点から適切な対応をして参りたいと思います。

就任にあたって

2年間の農学生命科学研究科長・農学部長の任の後、4月より理事・副学長を務めさせて頂くことになりました。五神真新総長のビジョンのもとで、主に「国際」と「病院」を担当いたします。あらゆる分野でグローバル化が加速する中において、本学では国際化に向けて様々な取組みがなされています。これらを着実に発展させて非英語圏にあるトップクラスの研究型総合大学としての体制を整備していきます。そもそも学術はボーダレスであり、国際的な研究交流はこれまでも活発に行われてきました。その経験と蓄積を基に、交流相手の大学・研究機関との連携を通じて優れた教員を招聘するとともに若手の交流を促進し、学生の国際的な流動性を高める

就任のご挨拶

このたび、五神総長のもとで、学生支援、入試環境安全を担当する理事・副学長を務めることになりました。どうぞよろしく申し上げます。

学生支援と環境安全については、長谷川前理事からの引継ぎとなります。担当の「学生支援」はこれまで「学生」と呼ばれていましたが、その業務の目的を明確にするために「学生支援」という名称にさせていただきました。入試については、相原前理事から一部引継ぐとともに、かなりの部分、相原先生と協力して進めていくこととなります。

入試は、本学で初めて推薦入試が導入される年度にあたります。また、中教審の答申におい

ては新テストの導入とともに、各大学の個別入試についても新たな提言がなされており、その点からも注目されています。本学で学ぶにふさわしい資質・能力を有する優秀な人材を広く受け入れることができるよう、努めてまいりたいと思います。そして、入試を通して受け入れた学生が、安全な環境のもとで、その能力を存分に伸ばしていけるよう、支援していきたいと思っています。

一方、評価に関しては喫緊の課題として、第3期中期目標・中期計画の策定があります。今後6年間の東京大学の在り方を方向づける重要な計画ですので、各方面の意見を十分に踏まえながら作業を進めて参ります。

東京大学は学問の府としての矜持を忘れることなく、本来あるべき教育・研究の姿を自ら定義し、社会に発信していかなければなりません。その責任を果たすため、及ばずながら微力を尽くしたいと存じますので、どうぞよろしくご指導・ご支援をいただきますよう、お願い申し上げます。

いくことによりキャンパスのグローバル化を進めていきたいと思っています。医学部附属病院は医科研付属病院などの関連部門とともに、医療内容、研究レベル、経営面で名実ともに我が国トップレベルにあります。現在、さらなる医療の質の向上、研究環境の整備、人材育成、運営面の充実に向けた改革が始動しており、関連部局との協力のもとにこれらが円滑に進むように本部機能を活用していきます。これらの担当に関連して「国際高等研究所」および「生命系学術」も担当します。いずれも本学の学術の多様性と卓越性を追求するうえでの要となるものです。その他の担当も含め、慣れない仕事ですが、皆様のご指導、ご助言とご協力をお願いいたします。

ては新テストの導入とともに、各大学の個別入試についても新たな提言がなされており、その点からも注目されています。本学で学ぶにふさわしい資質・能力を有する優秀な人材を広く受け入れることができるよう、努めてまいりたいと思います。そして、入試を通して受け入れた学生が、安全な環境のもとで、その能力を存分に伸ばしていけるよう、支援していきたいと思っています。

本部の職員の皆様、各部局の教職員の皆様、そして学生の皆様のご協力を、よろしく申し上げます。

理事・副学長

石井 洋二郎

Yojiro Ishii



昭和50年3月 本学法学部卒業
昭和53年9月 バリ第4大学修士課程修了
昭和55年3月 本学大学院人文科学研究科仏語仏文学専攻修士課程修了
昭和55年4月 本学教養学部助手
昭和57年10月 京都大学教養部助教授
昭和62年4月 本学教養学部助教授
平成6年4月 本学教養学部教授
平成8年4月 本学大学院総合文化研究科教授
平成21年4月 学術博士（本学）
平成22年4月 本学大学院総合文化研究科副研究科長・教養学部副学部長
平成24年4月 本学副学長
平成25年2月 本学大学院総合文化研究科長・教養学部長
専門分野：フランス文学・フランス思想
研究内容：1) 石井洋二郎『ロートレアモン 越境と創造』筑摩書房、2008年。2) 石井洋二郎『フランスの思考—野生の思考者たちの系譜—』中央公論新社、2010年。
趣味：カラオケ、旅行、ドライブ

理事・副学長

古谷 研

Ken Furuya



昭和50年3月 本学理学部生物学科卒業
昭和56年3月 本学大学院農学系研究科博士課程修了
昭和56年4月 本学海洋研究所助手
昭和63年10月 三重大学生物資源学助教授
平成8年4月 本学大学院農学生命科学研究科助教授
平成11年9月 本学大学院農学生命科学研究科教授
平成25年4月 本学大学院農学生命科学研究科長・農学部部長
専門分野：水圏生物学
研究内容：1) 古谷 研（共編著）『海洋保全生態学』講談社、2012。2) 古谷 研『海洋における植物プランクトンの生理生態と物質循環における役割に関する研究』『海の研究』24（2015）：63-76。
趣味：登山、自然探勝

理事・副学長

南風原 朝和

Tomokazu Haebara



昭和52年3月 本学教育学部卒業
昭和56年12月 アイオワ大学大学院教育学研究科博士課程修了
昭和57年9月 新潟大学教育学部講師
昭和58年10月 新潟大学教育学部助教授
平成5年10月 本学教育学部助教授
平成7年4月 本学総長補佐
平成14年4月 本学大学院教育学研究科教授
平成20年4月 本学教育学部附属中等教育学校長
平成25年4月 本学大学院教育学研究科長・教育学部長
専門分野：心理統計学、心理測定学
研究内容：1) 南風原朝和『統・心理統計学の基礎』有斐閣、2014。2) 南風原朝和『量的研究法』東京大学出版会、2011
趣味：授業、焼酎

就任のご挨拶

この度、東京大学の理事を拝命いたしました。主に担当させて頂く分野は、「研究倫理」と「コンプライアンス」です。これまで、独立行政法人国立がん研究センターや日本フェンシング協会、日本バスケットボール協会等のガバナンス改革に関わらせて頂いた経験がございますが、国立大学法人の運営に関わることは初めての経験となります。いろいろと不慣れな点もあり、ご迷惑をおかけすることもあるかと存じますが、皆様方のお力添えを頂き、精一杯職務を全うしたいと存じます。

また、昨今、研究不正や研究不祥事が大きな社会問題となっていますが、本学におきまして

も、研究ガバナンスの確立は大きな課題であると存じます。

2011年から2012年にかけては、内閣官房医療イノベーション推進室（現内閣官房健康・医療戦略室）におきまして、医学研究を含む医療政策の立案に関わらせて頂く機会を頂き、また2011年からは東北メディカル・メガバンク計画の倫理・法律問題に関わる機会を頂きました。まだまだ経験不足ではございますが、皆様方のお力を頂きながら、本学における研究ガバナンスの確立にも精一杯尽力して参りたいと存じます。

これからの皆様方のご支援ご協力を何卒よろしくお願ひ申し上げます。

副学長就任のご挨拶

2年間の史料編纂所長の後、副学長を拝命しました。図書館および男女共同参画を担当し、あわせて附属図書館長を務めることとなりました。

図書館については、現在全学的プロジェクトとして進んでいる新図書館計画をさらに推進し、東京大学の学術情報基盤をより一層充実させることが使命であると受けとめています。未来を展望した新しい機能を持つと同時に、これまで蓄積してきた知の基盤を、確実に後世に伝えていくこともまた、図書館の重要な役割といえます。本学における学習、教育および研究活動を支えると同時に、学知の収集、保存および発信の拠点としての学術研究基盤という、東京大学図書館憲章に示された基本を踏まえながら、この大事業を進めていきたいと思ひます。今後本

格化するアカデミック・コモズの建設・改修工事が終了し、設備を配置して新図書館として始動にいたるまでには、多くの困難が予想されます。全学の教職員・学生の皆様のご理解ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

一方、男女共同参画の推進も喫緊の課題といえます。東京大学では、ここ十数年にわたって男女共同参画室等を中心に様々な施策を試みていますが、世界の主要な大学と比較した時の学生・教員等の女性比率を見る限り、いまだ低い水準にとどまっています。構成員の多様性の確保という観点からも、なぜ施策が実効性を持たないのか、その原因を丹念に解明し、皆様のご理解ご協力を得ながら、粘り強い取組を続けていく必要があります。この点についても何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

副学長就任のご挨拶

2年間の大学院新領域創成科学研究科長の後、柏地区整備推進・社会連携を担当する副学長を拝命しました。柏地区は本郷、駒場に続く、第三のキャンパスとして15年余をかけ、徐々にですが確実に発展してきました。大学院としての新領域、世界トップクラスの理系研究所である、物性研究所、宇宙線研究所、大気海洋研究所、カブリ数物連携宇宙研究機構、更には空間情報科学研究センター、人工物工学研究センター等のセンター群も揃っています。生産技術研究所千葉実験所大型施設の移転も始まっています。また、最寄り駅のTX柏の葉キャンパス駅は急速に発展してきており、駅近くには本学のフューチャーセンターも完成し、産学官連携、国際連携、社会連携の拠点として活動

し始めています。キャンパス全体としての活動も多く、キャンパスの一体感は益々広がっています。

元来、全学支援を得て設立された大学院である新領域は、本郷、駒場の他研究科・学部との人事交流も多く、4研究所も含め、ウインタープログラム、サマープログラム等を通じた全学的な国際化教育にも、キャンパス全体として推進していきたいと考えます。比較的に面積的な余裕があり、自然にも恵まれた国際キャンパスとして全学に開かれた場としての発展を目指します。

個人的には、長年やってきた日本独自の航空宇宙機用知的複合材料システムの実用化が迫り、研究にも時間が必要ですが、元気に楽しく働きたいと心を新たにしております。

理事

境田 正樹

Masaki Sakaida



平成21年4月 大阪大学臨床工学融合研究教育センター 招へい教授
平成22年4月～平成23年8月 独立行政法人国立がん研究センター 理事長特任補佐
平成23年8月 東北大学大学院医学系研究科・医学部 客員教授
平成27年1月 FIBA（国際バスケットボール連盟）制裁案件に関するジャパン2024タスクフォース委員
専門分野：研究倫理、スポーツガバナンス、企業コンプライアンス
研究内容：1) 境田正樹著「東北メディカル・メガバンク計画における法的・倫理的課題」民事法研究会「Law & Technology 62号」2014年1月号 2) 境田正樹著「スポーツ立国化に向けて〜リーグ・ドローピンク紛争が残した課題」有斐閣「法学教室」2009年5月号
趣味：テニス、おいしい店の食べ歩き

副学長

久留島 典子

Noriko Kurushima



昭和53年3月 本学文学部卒業
昭和55年3月 本学大学院人文科学研究科国史学専門課程修士課程修了
昭和56年3月 本学大学院人文科学研究科国史学専門課程博士課程退学
昭和56年4月 本学史料編さん所助手
平成4年4月 本学史料編さん所助教授
平成11年10月 本学史料編さん所教授
平成25年4月 本学史料編纂所所長
専門分野：日本中世史
研究内容：1) 久留島典子「日本の歴史13 一揆と戦国大名」講談社 2001年 2) 久留島典子「一揆の世界と法」山川出版社、2011年

副学長

武田 展雄

Nobuo Takeda



昭和50年3月 本学工学部航空学科卒業
昭和52年3月 本学工学系研究科航空学専攻修士課程修了
昭和55年8月 米国フロリダ大学大学院工業力学専攻PhD課程修了
昭和57年3月 本学工学系研究科航空学専攻博士課程修了
昭和58年4月 日本原子力研究所高崎研究所研究員
昭和59年3月 九州大学応用力学研究所助教授
昭和63年5月 本学先端科学技術研究センター助教授
平成8年7月 本学国際・産学共同研究センター教授
平成10年4月 本学工学系研究科航空宇宙工学専攻教授
平成11年4月 本学新領域創成科学研究科先端エネルギー工学専攻教授
平成25年4月 本学新領域創成科学研究科研究科長
専門分野：複合材料工学、知的構造材料工学
研究内容：1) N. Takeda et al., "Fiber Bragg Grating Sensors in Aeronautics and Astronautics", Fiber Bragg Grating Sensors: Recent Advancements, Industrial Application and Market Exploitation (E-Book), Bentham Sci. Publ., Ltd., 2011, Chap. 9. 2) 武田展雄, 水口周, "CFRP積層構造のヘルスマニタリング・ライフサイクルモニタリング" CFRP/CFRTPの加工技術と性能評価, サイエンス&テクノロジー社, 2012, 第8巻第2節.

教育改革の着実な実施と検証に向けて

このたび学部教育の担当として副学長を拝命いたしました。

本学では、入学時期の検討に端を発し、学部教育の総合的な改革に向けた議論が重ねられてきました。そもそも本学は、学部教育においてどのような人材を育成し、社会に送り出すべきなのでしょう。わたしはそれは、主体性と能動性を備え、批判的思考力によってみずからの認識を鍛えることのできる人、異なる価値観を理解・尊重し、多様性に開かれた志向性とコミュニケーション能力をもつ人、他者との係わりで自己の位置を測定するような自己相対性を備えつつ、他者に対する社会的・公共的な責任感と使命感をもって行動する人であると考えます。もちろん、本学は従来からもこのような人材

を多く輩出してきました。しかし、過去3年のあいだ、このような教育目標を明確に、また自覚的に設定することで、学部教育に変革すべき点があることも議論されてきました。今年度から始動する4ターム制を取り入れた新学事暦と前期課程における新カリキュラムは、学習過程が学生にとって実のあるものとなること、学習過程において学生の主体性・自主性・能動性を涵養すること、学生の多様な背景や関心、目的意識などに応じた柔軟な学習を促すことなどを念頭に置いて構想されています。

学部教育のこうした改革を着実に実施するとともに、その有効性やさらなる課題を現場において検証してゆくことに、微力ながらつくす所存です。



副学長

森山 工

Takumi Moriyama

昭和59年3月 本学教養学部卒業
平成6年7月 本学総合文化研究科博士課程修了
平成12年4月 本学総合文化研究科助教授
平成19年4月 本学総合文化研究科准教授
平成24年4月 本学総合文化研究科教授
平成24年4月 本学総長補佐
専門分野：文化人類学
研究内容：1) Moriyama, Takumi. "Cultural Resource in Action." Japanese Review of Cultural Anthropology 14 (2013): 31-53. 2) 森山工 (共編著)『マダガスカルを知るための62章』明石書店, 2013年.

副理事就任にあたって

このたび人事制度改革担当の副理事に就任しました松田成史です。

国立大学法人化後11年が経過しましたが、本学では、従来の国家公務員制度の枠組みから様々な面で国立大学法人に相応しい制度への転換を行ってきました。人事制度についても、職員の独自採用試験の導入や短時間勤務職員からの採用の実施、課長登用試験による幹部職員への登用制度への開始、また、教員についても「教授(特例)ポスト」制度や「クロス・アポイントメント」制度などの新たな人事制度を導入して、教育研究活動の活性化や柔軟化、優秀な若手教員のポスト確保などの取り組みを実施してきているところです。

平成25年11月に示された国立大学改革プラン

でも大学の機能強化を実現するための方策の一つとして人事・給与システムの弾力化が掲げられていますが、運営費交付金が毎年削減されている中、貴重な人件費を有効に活用して、本学の教育研究活動をさらに活性化させていくためには、既成の枠にとらわれない新たな発想による柔軟な人事制度の検討、展開が不可欠です。

五神新総長も、取り組むべき喫緊の課題の一つとして若手研究者の登用を謳われ、研究者にとって重要な流動性と同時に雇用の安定性が実現できる新しいシステムの創成を目指されており、微力ではありますが、五神総長の下で新たな人事制度の確立に尽力してまいりたいと考えております。

ご指導、ご鞭撻の程をよろしく願っています。



副理事

松田 成史

Shigefumi Matsuda

昭和60年3月 岡山大学法学部卒業
昭和60年4月 岡山大学採用
昭和62年10月 文部省大臣官房人事課
平成17年4月 本学人事課人事課長
平成19年4月 文部科学省大臣官房人事課給与班主査
平成21年7月 文部科学省大臣官房人事課任用班主査
平成24年4月 文化庁長官官房政策課独立行政法人支援室長
平成26年4月 本学人事部長
平成26年10月 本学副理事(兼)人事部長

シナリオ性の高い寄附活動に向けて

東京大学の渉外活動も十年の経験を積み、累計320億円強の寄附実績を踏まえた活動領域再設定の時期を迎えました。

東京大学基金の実績分析からは、概ね寄附金額上位1%の寄附者が寄附金額全体の90%を占めており、多数の人の支持を得られている事と同時に、高額寄附者の支援・賛同を得ているかが累計寄附金額を左右することが分かります。

一方、世界を見てみますと、隣の中国では100億円規模の寄附プログラムが複数立ち上がる情勢になってきています。清華大学の例では300億円の基金を立ち上げ、米・中の学生計200人を寝食共に学ばせ、これを50年間続けるプログラムと

なっています。大学の国際戦略上からは、超大型寄附プロジェクトが必要な時代となりました。

今後の方向性は卒業生、教職員の皆様への地道な寄附活動と同時に、富裕層を対象とした寄附活動強化及び大型寄附プロジェクトの立ち上げを行っていくことが重要となってきます。

寄附活動の基本は「寄附をしてみたいくなる大学の魅力を、潜在寄附者にキチッと伝え」、「寄附を受けた後は、寄附者に納得感のある活動を展開していくこと」にあります。

基金のさらなる充実に向けて、大学の方針と密着した、シナリオ性の高い寄附活動を展開いたしたく、皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。



副理事

山路 一隆

Kazutaka Yamaji

昭和44年5月 本学工学部化学工学科卒業
昭和44年6月 出光興産株式会社入社
平成12年6月 出光石油化学株式会社 取締役
平成16年7月 メモリーテック株式会社取締役
平成22年4月 本学卒業生室 副室長
平成26年4月 本学渉外本部 本部長

退任の挨拶

このたび退任された総長、理事・副学長、副学長、副理事の退任に当たっての挨拶を以下のとおり掲載します。

この6年で東大の森は動き始めました

いま、総長としての責務を果たし終えたという感慨をもって任期を全うできたことを、これまで支えて下さった教員、職員、学生、そして卒業生の皆さんに心より感謝したいと思います。それぞれ重い任務を遂行してくれた理事や副学長、幹部職員の皆さんにもとても恵まれた6年でした。「森を動かす」という言葉は、私が就任に際して発したメッセージでしたが、部分部分の改善では社会の変化のスピードに間に合わない、社会からの期待に応えられないという危機感を背景に述べた言葉でした。いま、「森は動いた」、少なくとも「動き始めた」という実感が持てる状況に至ったことを、嬉しく思います。

6年前というのは振り返ると、すいぶん以前のような、同時にほんの少し前のような気がします。それでも思い返すと、リーマンショックの後で社会が揺れ動いていたこと、政治の世界でも政権交代があったこと、また任期の2年目の終わりに東日本大震災が起きたことなど、この間に社会にすいぶん大きな変化があったと改めて思います。また、グローバル化といった課題も、取り組みを始めた頃には、まださほど社会全体の意識になっていなかったと思いますが、ここまで来て、ごく当たり前のような事柄になりました。

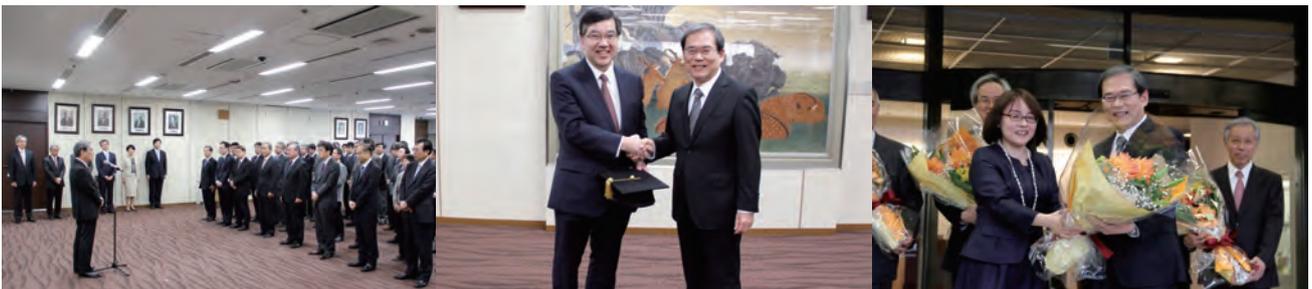
私が大学運営の柱としてきたのは『東京大学の行動シナリオ』です。最終的に10本の柱を軸にしながら、数値目標も含めて多くの課題への取り組みを着実に進めることができたのは、効果的であったと思います。とくに教育改革については、秋入学の論議が始まって、4ターム制の工夫や教育の質の高度化、推薦入試の導入など大きな動きとなりましたが、それに限らず、東日本大震災への対応や卒業生とのネットワークの強化なども含めて、それぞれの柱で目に見える進捗が見られました。6年という期間があったからこそ、手堅く、かつかなりの規模の改革を行うことが出来たということは、間違いなく言えるように思います。

といっても、改革はあくまで大学の活動の一部です。日常的教育研究や社会連携、あるいは診療などの活動がいかにきちんと行われているかということこそ、大学の根源的な力が見えてきます。改革の過程であれ、そうした日常の場面であれ、私が強く印象づけられたことは、当たり前なのですが、東京大学の強さの源泉は人にある、ということでした。総長というのは、全学にわたって、さらには卒業生を含めて、さまざまな分野の非常に多くの人に会い、話をする立場

前総長 濱田 純一

です。教員、職員、学生などを問わず、ひとり一人がそれぞれに魅力的であり、東京大学がこれだけ多くの人々の日々の活動によって生きている有機体であるということを実感し、感動できたこと、またそれによって励まされたことは、総長という立場の「特権」かもしれません。

時代の変化はまだまだ激しいものがあります。最近では、グローバル化にくわえて、ガバナンスや高大接続、さらには運営財源の問題など、大学をめぐる外部の動きも大きくなっています。こうした中で東京大学にとって何より大切なことは、大学としてイニシアティブをとりながら自らの将来の姿を定めていくことにあります。また、そのことを通じて全国の大学をリードして進んでいく責任が東京大学にはあります。総長を務めていて感じたのは、東京大学にはまだまだ大きな潜在力があるということです。歴代の総長は、その潜在力の部分をさらに伸ばそうと力を注いできたように思います。私の場合は、その大きな一つが学部教育でした。五神新総長もまた、東京大学の教育力研究力をさらに伸ばしていく新たな取り組みにチャレンジなさるはずで、心よりのエールとともに責務を五神総長に引き継ぎたいと思います。



“いわれる前に”

濱田総長が就任当初から言われた「タフでグローバル」、これは学生のみならず東大が目指す姿です。“先頭に立つ勇氣”が必要です。4年前、東日本大震災が起きました。内藤廣元副学長のもと土地の所有や利用にまで踏み込んだ復興プランを当時の政府に提言しましたが、反応はありませんでした。非常に残念なことです。秋入学は、大学が前に一歩出るという姿を見せることで復興を象徴しようとされた総長と清水孝雄元理事の思いもあったのではないのでしょうか。

ロジスティクス担当としては、著しく傷ついていたキャンパス全体の価値を再構築するために関係者の努力で“要綱”、“大綱”を提

前理事・副学長 前田 正史

案し、国際宿舍整備や柏の整備、修繕準備積立制度も進めることができました。教員の人事制度におけるクロスアポイントメントやスプリットアポイントメント、教授（特例）ポストの制度構築も世の中より“前に”できたと思っています。震災対応の給与削減や経常的な交付金削減はあるものの、予算を部局が使いやすいかたちでもきました。皆さんには、世界の中で、アジアに位置することを意識しつつ、世界のトップ10へ、そして5へと向かっていただきたいと思います。確かに容易なことではないかもしれませんが、皆さんならできます。健闘を祈ります。

退任のご挨拶

濱田総長の下で主に研究担当理事として6年間働かせて頂きました。無事に退任できますのも、皆様のお陰と厚く御礼申し上げます。研究型総合大学として世界と切磋琢磨する基盤を構築し、研究者が気持ちよく研究できる場を構築することに注力して来ました。行動シナリオに「学術の多様性の確保と卓越性の追求」とあるように、総合大学が卓越性を追求するには、先ず多様性を確保すべきで、基礎研究が多様に行われていてこそ卓越性は担保できるということです。また、多くの競争相手と切磋琢磨出来る環境の構築が重要です。熾烈な競争の前段階の基盤的分野は、複数の組織で行った方が効率的

前理事・副学長 松本 洋一郎

で、その中で真の卓越性を追求することが重要です。その意味で有力な研究大学の連合体であるRU11の活動を積極的に行って来ました。一方で、東大は論文の数は多いものの、引用される頻度は多くないと評価されています。研究者がもっと世界の研究コミュニティで活躍することが肝要で、特に若手の研究者が滞在型の共同研究が出来る環境を作るべきだと思います。世界基準での研究者雇用を実践するカブリIPMUでは、待遇を含め人事制度など大きな改革を行い、世界でも最高水準の研究所に育ちました。様々な改革は道半ばですが、今後の益々の東大の発展を祈念して、退任の挨拶とします。

退任のご挨拶

濱田総長の任期最後の2年間、理事・副学長を務めさせていただきました。1年目は、学生・評価・環境安全を、また2年目は学生・環境安全・広報を担当しました。学生支援という学生に最も身近なポジションで本部業務に関わることができたのは、非常に幸運なことでした。神宮球場はじめ日本各地で行われた運動部の競技の応援に出掛けたこと、総長賞の選考で素晴らしい学生諸君と巡り会えたこと、一緒に被災地に向き復興支援にささやかな貢献ができたことなどは楽しい思い出です。環境安全の職務では、教育や研究が不断の安全管理業務の上に支えられていることが実感できました。安全・

前理事・副学長 長谷川 壽一

安心は直接目に見えにくいところですが、それなくして大学の活動は成り立ちません。広報では、研究不正に関する記者会見のような緊張を伴うこともありましたが、東大ハチ公像の序幕式や新英文HPの公開など広報本来の業務にも多々立ちあえました。最後に、濱田総長の最大の業績である総合的教育改革については、通称基本検の座長代理として、総長の理念を形にすることができ、生涯の誇りと感じています。2年間、支えて下さった教職員諸氏、学生諸君に厚く御礼申し上げます。



←↑2015年3月31日（火）、本部棟12階大会議室において濱田総長と理事の皆さんの退任式が行われました。式の後、多くの教職員が集まった本部棟前でねぎらいの花束を贈られた皆さんは、万来の拍手のなか、お一人ずつ迎えの公用車に乗って本部棟を後にしました。

同窓という学外者

2009年から6年間、国際、社会連携、広報、産学連携、男女共同参画などを担当しました。日本の組織で働いた経験のなかった私は、学外者のような存在だったでしょうし、同窓でありながら自らもそのように感じておりました。改革を進めるには、個人として、国内外のビジネス界、ハーバード大学・一橋大学での体験をもとに思い切ったことを言うしかない、とその役に徹する覚悟を決めました。

6年間に多くの方々の努力が実り、全学交換留学制度、サマースクールなどが充実し、学部学生の半数近くが、4年間に一度は東大の支援や自助努力で海外へ行くようになりました。そのうち約2割は東大の支援によるものです。2011年7月に発足した社会連携部は今で

前理事 江川 雅子

は総勢42名となり、渉外本部・卒業生室の活動も質量ともに充実しました。広報では、UTokyo Research、ブランド戦略、英文HPの改修などに取り組みました。

初の女性理事として、女子学生を増やし、女性教職員の活躍を後押ししたいと努力しましたが、力及ばず大きく進展しなかったのが残念です。外国人教員も殆ど増えていません。多様性は東大憲章にも謳われていますが、学内の危機感は希薄です。

皆様のおかげで6年の任期を全うすることができました。母校の東大で皆様と仕事できたのは大変光栄なことでした。どうもありがとうございました。

理事退任のご挨拶

3月末で理事を退任いたしました。東京大学には、職員として採用されてから通算10年10月勤務させていただきました。

昨年4月からはコンプライアンス担当理事として、新たなコンプライアンス体制の下、1年間、種々の事案の調査、検討、審議、調整に携わってまいりました。職場改善に向けた教職員アンケート調査も、数部局をお願いをして、本年度初めて実施させていただきました。各部局長を始め、各部局の方々にはご協力いただき、誠にありがとうございました。何とか勤めあげることができたのも、教職員の皆

前理事 苜米地 令

様方のお陰であると感謝いたしております。

人事制度企画担当としては、クロス・アポイントメント制度、スプリット・アポイントメント制度など、教員の新たな人事制度について、それぞれの仕組みが更に活用しやすくなるよう制度の柔軟化を図りました。これによって、東京大学の教育・研究活動が益々充実、発展することを願っております。

最後に、改めまして、ご指導、ご協力いただいた全ての方々に御礼を申し上げ、退任の挨拶とさせていただきます。



退任挨拶：夢を見続けて

平成25年度から、教養教育と進学振分け改革を担当する副学長として、専ら「学部教育の総合的改革」に係ってきました。任期を終えた今の心境は、*Indiana Jones and the Last Crusade* のラストシーンで "And what did you find, Dad?" と尋ねられた老教授の一言には到

前副学長 永田 敬

底及びませんが、この2年間、東京大学の教育改革という大きな夢を見続けることができました。そのなかで多くの時間と苦楽を共にしてくださった方々に心から感謝し、この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

大学における教育研究と言語

私たちの多くは、日本語を用いて人間と世界と宇宙を論じ、理解しています。日本語による高度で総合的な知の体系は、多様性が重視される現代世界における貴重な財産です。一方、世界の多くの学術分野では英語が共通語となり、研究者には英語の運用能力が必須です。また、社会人となった卒業生の多くは、英語を用いた国際的な交渉や商談の場に臨むことになるでしょう。このような状況を鑑みたと、本学の大学院と学部におけるカリキュラムの内容と教育言語はいかにあるべきでしょう。この問いに対する答えは、学術の

前副学長 羽田 正

分野と教育の段階によって様々ですが、大学として調和のとれた一定の指針が必要です。総合的教育改革が進む中で、各部局、さらには大学全体でこの重要な問題について十分な議論がなされ、非英語圏に位置する研究型総合大学のモデルとなるような斬新で魅力的な教育研究の内容と仕組みが生まれることを願っています。

副学長・国際本部長として、多くのすぐれた教職員とともに東京大学の未来を創造する仕事の一端に携わったこの3年間は、辛い中でも充実した幸せな日々でした。本当にありがとうございました。

退任のご挨拶

副学長を退任いたしました。1年間でしたが、ご指導まことにありがとうございました。

産学連携本部長として、先ず、産学連携本部の皆様の努力に感謝します。次に、出資事業については、懇談会発足に始まり、総長、理事をはじめとする多くの皆様のご指導のもと、昨年12月26日に特定研究成果活用支援事業の認定申請書を文部科学大臣に提出し、2月10日に国立大学法人評価委員会官民イノベーション部会の審査があり、文部科学省の審査は終了したことを感謝します。今後は、経済産業省の審査を受け、了承が得られれば、文部科学大臣・経済産業

前副学長 原田 昇

大臣からの認定となります。これまでの懇談会や科所長会議の議論の蓄積を踏まえ、東京大学の産学連携活動の強化に帰結することを期待します。

科学行動規範委員会委員長としては、理事、委員会委員、事務局をはじめとする多くの皆様のご尽力により、前任者から引き継いだ案件について、昨年12月26日に、調査報告（最終）の記者会見を実施できたことを感謝します。今後、科学行動規範が、不正行為未然防止の徹底とともに、順守されることを期待します。

退任のご挨拶

平成27年3月31日をもちまして、入試改革担当の副学長を退任いたしました。この間、推薦入試のあらましを決めることができましたのは、ひとえに、濱田純一総長、佐藤慎一、相原博昭両理事・副学長、各部局の教員、入試課職員の皆様の献身的な努力によるものであると、深く感謝いたします。

各部局の担当者や推薦入試の議論を進める中で、東京大学の懐の深さを知ったことは、私にとって大変よい勉強となりました。また、推薦入試は、高等学校教師などの教育関係者や生徒にとって魅力あるものであってもらう必要があります。このために、様々な機会を

前副学長 福田 裕穂

とらえて、推薦入試を東京大学の教育改革の一貫として位置づけつつ、社会に説明をしてきました。こうした中で、教育関係者が、有為な若い人々を育てたいという意気に燃えていることを知ったことも、大いなる喜びでした。

これからは、今年11月からの推薦入試の実施を遺漏無く行うためのより緻密な設計が必要になってきます。これを担当するにまさに相応しい先生にバトンタッチすることができましたことを、心より感謝しながら、今後は理学系での仕事に精を出したいと思っています。

副学長退任のご挨拶

平成27年3月31日をもちまして4年半務めさせていただいた副学長を退任しました。在任中は、教育企画室長としての活動が最大の柱でした。この間、教育企画室では、東京大学は学生への教育責任と社会への説明責任を高度に果たす大学になるべきとの認識から、教育におけるヨコの横断化、タテの連続化、教育の国際化の3つを柱に改革案を策定してまいりました。4年半に及ぶ活動で、「ヨコの横断化」では、①時間割の全学統一、②シラバスの全学的可視化・構造化、③科目ナンバリングによるカリキュラム構造化、④全学共通教育科目の制度化等に取り組みました。「タテの連続化」では、①カリキュラム面での高大連携強化、②大学院科目等履修生制度による学部後期課程と大学院修士課程の接続柔軟化、③FD基本方針策定と

前副学長 吉見 俊哉

若手研究者を対象としたブレFDプログラムの実施等に取り組みました。「教育の国際化」では、①国際的に信頼されるための教育の質保証、②グローバルリーダー育成事業の支援、③サマープログラム実施体制の企画等に取り組みました。これらが一定の成果を挙げるため、濱田総長をはじめ役員の方々、学内諸部長、事務職員の皆様に多大なご支援をいただいたことを深く感謝しております。今日、デジタル化とグローバル化の激流の中で、高等教育は地球規模で激変しています。この激動に立ち遅れることなく、教育の質や価値を向上させていくことこそ本学の大学（University）としての使命であると確信しています。

退任のご挨拶

平成23年4月から副理事（経理・調達担当）に就任し、また、調達本部長として、皆様のご支援をいただき4年間勤めさせていただきました。本当に有り難うございました。

調達本部は、法人化に向けて平成14年に財務分析室がスタートし、その課題として調達改善の取組が開始され、平成17年に財務分析室から独立して設置されました。

設置当初から、事務用品・機器、試薬等12の区分を設定し、中期計画に掲げる「調達方法を改善し、資金のより一層の有効利用を推進する」を具現化するべく活動を行ってきました。具体的には、電子購買等のシステム化、契約の包括化・複数年度化、契約の集中化

前副理事 中塚 数夫

により、経費節減や契約等業務の効率化を図ってきました。

しかし、旅費業務の外部委託について、チケット手配による経費節減に課題がありこの改善に向けて利用説明会や大学向け独自運賃の適用及びオンラインチケット手配等を導入してきましたが、教職員の方々からはシステムの利便性等多くのご意見、ご批判をいただき、現在も、鋭意検討しているところです。

システム利用による経費節減と調達改善は全学の教職員が一丸となった利用と協力が必要でありますので、皆様のご支援を切に期待いたしております。



平成26年度卒業式



平成26年度卒業式が、3月25日（水）に、3年ぶりに安田講堂において挙行されました。

式は、第一部（理学学部）が9時15分、第二部（文系学部）が11時30分に開式し、約2,800名の卒業生（卒業生数3,160名）が出席しました。

開式に先立ち、音楽部管弦楽団によるバッハ作曲の「管弦楽組曲3番BWV1068より序曲」の演奏があった後、総長をはじめ、理事・副学長、理事、各学部の学部長及びご来賓（各学部の同窓会等代表者）の方々がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、ご来賓の紹介があった後、開式となりました。

はじめに、濱田総長から、各学部卒業生代表に、順次、学

位記が授与されました。続いて、濱田総長から卒業生に向けた告辞が述べられた後、卒業生総代（第一部 理学部 豊田良順さん、第二部 文学部 村重陵さん）から答辞が述べられました。その後、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了しました。

なお、本式典では、壇上において手話通訳を行い、御殿下記念館（ご家族会場）ではスクリーンに安田講堂内の式典模様（手話通訳の映像と字幕も表示）の放映を行い、ご家族など約3,300名が出席しました。

平成26年度卒業式 総長告辞

東日本大震災と安田講堂改修の両方を経験した皆さんへ

晴れて卒業の日を迎えられた皆さん、おめでとうございます。東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。このたび学部を卒業する学生数は、3,160名になります。このうち留学生は65名です。本日は、多くのご家族の皆さまにもご来校いただいております。お祝いと感謝を申し上げたいと思います。ここ2年の卒業式の式典は、この安田講堂-正式の名称は「大講堂」ですが-の耐震改修のための工事が大規模に行われていたために、学外で実施されていました。このたびの卒業式からまた安田講堂に戻って挙行されることになりました。

耐震改修と言いましたが、その工事のきっかけとなったのは、東日本大震災です。今日のこの場には、4年前に東京大学に入学して卒業の日を迎えている皆さんも数多くいると思いますが、それらの皆さんの入学は、まさにこの東日本大震災の発生直後でした。その年の入学式は中止こそしなかったものの、被災の惨禍への哀悼の思いと余震のリスクへの考慮から、小柴ホールで代表の皆さんだけが出席するごく小規模な式典としました。そのことを思い出すと、ちょうど耐震改修工事が終わり新装なったこの安田講堂から多くの皆さんを送り出せることを、まことに嬉しく思います。

この安田講堂の改修にあたっては、構造部分や天井などの耐震強化と併せて設備の近代



東京大学総長

濱田 純一

化が行われ、さらに、講堂創建当初のオリジナルな計画案に近い形に戻すことも図られました。のみならず、竣工時には未整備な状態にあった1階、2階部分についても今回計画的な整備が行われたことによって、このたびの工事で安田講堂が本当の意味で初めて完成をみたと言ってよいかもしれません。昨日挙行された大学院の学位記授与式、そして本日のこの卒業式の式典は、いわばそのこけら落

としてもあります。

時代の重みと歴史の重み 課題の重みと学問の重み

東日本大震災の発生、そして安田講堂の大規模な改修と、学部における学生生活の始まりと終わりにこうした二つの偶然に出合った皆さんには、その偶然の出来事の持つ重みを感じ取って、これからの人生の糧としてもらいたいと願っています。それは、すでに在学中に東日本大震災に伴う異例の学事日程を経験して本日卒業の日を迎えている皆さんにも期待したいことですが、その一つは時代の重みであり、もう一つは歴史の重みです。すなわち、一つは、東日本大震災の発生をきっかけに社会や学問に投げかけられた課題の重みであり、もう一つは、この安田講堂の歴史に凝縮されてきた学問の重みです。

大震災の惨禍を経験して、その重みを受け止めるということは、「忘れない」という言葉に象徴されます。その「忘れない」ということの核心は、いまだ途上にある被災地の復興や被災された方々の生活再建を、引き続き見守り支援していこうとすることにあるのは言うまでもありません。この3月11日に、東京大学大気海洋研究所附属の国際沿岸海洋研究センターのある岩手県大槌町での慰霊祭に私も参列してきましたが、津波で市街地が壊滅した大槌ではやっと土地の高上げのための土盛りが始まった段階で、街が形をなしていくにはまだまだ長い時間がかかります。そうした息の長い取り組みを支え続けるために、私たちが「忘れない」ということは大切なことです。

それと同時に、学問にかかわる者、かかわってきた者として、「忘れない」ということにはまた特別の意味があります。それは、大震災、そしてそれに伴って起きた原子力発電所の事故に際して、科学や技術に対して社会から不安や不信の念が向けられたことを「忘れない」ということです。この震災直後の5月に、東京大学の大学院工学系研究科は、『震災後の工学は何をめざすのか』という小冊子をまとめました。この冊子は翌年一冊の本としてまとめられましたが、その序にあたる箇所、当時の北森武彦工学系研究科長は、次のように記しています。

少し長くなりますが、その時期に、私たち大学に生きる者が共有していた緊張感を思い起こしていただくために引用します。

「この度の震災では、自然の猛威と破壊力の凄まじさを目の当たりにし、複数の原子力発電施設の同時事故、火力発電所の停止と、それらにつづく電力供給危機、また、通信網の機能不足やサプライチェーンの断絶による製造業の機能不全など、我が国を支えている科学技術に対して、多くの人々が不安に思い、また、長年築かれてきた研究開発への信頼が損なわれるのではないかと懸念された。私たち工学者にも、営々と築いてきた科学技術と自身の工学者としてのあり方に自問する人々や、また、密接に関係してきたはずの社会や人々との連携にもその複雑さの迷霧に阻喪する人々も少なくない。学生諸君も工学という学問に対する期待感の喪失や自身の将来や進路への迷いが生じているかもしれない。」という文章です。いまここにいる皆さんの中にも、当時、こうした時代の雰囲気や、具体的にどれほど漠然とあれ、感じた人が少なからずいることと思います。

しかし、そうした迷いの前で立ち止まってしまうのは、学問にかかわる者、学問を修めた者の責任を放棄することです。たしかに学問、科学の認識には限界があります。しかし、その限界を乗り越えようと絶えず必死の努力を続けることで人々の叡智をさらに広げ、さらに深め、人類により豊かな幸せをもたらしてきたのが学問の歴史です。工学系研究科も、そうした覚悟に立って、震災後の工学の目指す方向として、基礎基盤工学と総合工学との連携を強化するとともに技術と社会とのかわりを一層密にするといった課題を強く意識しながら取り組みをすすめてきました。大震災の直後に入学した、あるいは在学中に大震災を経験したという偶然に出合った皆さんに「忘れない」でもらいたいのは、このように学問、科学への不信や迷い、限界へのもどか

しさに直面する経験をしたという記憶です。そして、それと同時に、それでも乗り越えようと課題に全力で向き合っていかなければいけないという責任感と緊張感の記憶です。学問にかかわった者にとって「忘れない」というのは、決して立ち止まることでは無く、前へ進むということです。

学問の過去・現在・未来へと 想像力をふくらませる好機に

最後にもう一つ、皆さんに「忘れない」でもらいたいのは、この大震災の直後に、私たちの社会の仕組みや価値、私たちの生き方が、さらには、生きるということの意味そのものも問われたという事実です。私たちが当たり前のように過ごしてきた日常が本当にそれでよかったのか、エネルギー問題をはじめとして問い直されたのが、大震災後の時代でした。こうした問いかけには、自然科学系の学問のみならず、人文系、社会系の学問も含めて、私たちが培ってきた学問がそれぞれの立場から向き合うことを迫られました。たとえばサステナビリティ（持続可能性）という概念をめぐる議論もその一つであり、ここでは、環境科学や技術だけでなく、経済はもちろん文明やこころの問題なども取り上げられています。このわずか4年間のうちにも、さまざまな出来事が日々起こり、社会変化のスピードも速い中で、震災直後のような根本的な問い直しの姿勢を持つゆとりが無くなってしまっているようにも感じます。ただ、大震災直後の緊張の中で学問をするという大きな偶然に出合った皆さんだからこそ、そうした時代が提起したことの重みを受け止め、その重みを感じ続けてもらいたいと思います。そのことが、皆さんをこれからさらに成長させると同時に、人々へのより大きな貢献を生み出していくための駆動力となるはずで

これまで東日本大震災の経験を軸に時代の重みということをお話してきましたが、歴史の重みということにも触れておきたいと思いま





す。私たちの学問、そして知的な世界は、言うまでもなく人類の長い歴史の上に成立しています。とはいえ、私たちが日頃感じる歴史というのはしばしば抽象的・概念的なものであり、あるいは断片的・部分的なものです。そこから何を読み取り感じ取っていくかは、個々人の知識・経験や想像力によるところが大きいのです。それでも、すでに4年間あるいはそれ以上の期間にわたって学問に慣れ親しむ経験を経た皆さんには、いまこの安田講堂という卓越した知がシンボル化されている場にいることが、東京大学における学問の歴史を肌身で体感し、学問の過去・現在・未来への想像力をふくらませる、またとない機会になると思います。

この大講堂が建設されたのは関東大震災を扶んだ時期でした。建設途上で大地震に見舞われましたが大きな損傷は無く建築が継続され、大正14年(1925年)に竣工しました。今日まで長年にわたる利用の過程でそのオリジナルな姿が損なわれたところもありますが、建物のデザイン面だけから見ても、この大講堂を設けるにあたって込められていた、当時の大学人の学問に対する大きな夢を感じ取ることが出来ます。建物の外観は、本郷キャンパスの多くの建物の特徴付けているいわゆる内田ゴシック様式で、後に総長となった工学部の内田祥三教授が設計したものです。同時に、内部は柔らかなロマネスク風に造作され、

また、この舞台近くの天井を見上げるとそれがよく分かりますが、アール・デコの様式も一部に取り入れられています。学問のシンボルに相応しく、時代の多様な感覚がふんだんに盛り込まれた建物です。

さらに、このたびの改修にあたっては、往時の面影を安全面にも配慮して現代に蘇らせるために、屋根の構造部分では創建当初からの鉄骨に新しい鉄骨を組み合わせ耐震性を強化し、窓枠の部分でも従来のスチールと新しいアルミとの組み合わせがなされ、またガラス繊維で補強された石膏のような新しい素材の活用なども試みられています。その意味で、いま皆さんがいる安田講堂は、過去と現在が融合した建物です。歴史というものの本質はまさにそのようなものであり、そこには、先人の成果を絶えず更新しながら自らを進化させてきた東京大学の学問の姿と相重なるものがあります。

東大の歴史の一部になる気概を

また、言うまでもなくこの大講堂は、この中で数多くの出来事や学術の催しを通じて、時代のさまざまな空気を刻み込んできました。第二次世界大戦に際して学徒動員で出征する学生たちの壮行会がここで行われたのは1943年11月のことでした。あるいは、大学紛争の際にここで学生と機動隊が対峙したのは、1969年1月のことでした。この場ではこうした卒業式のような式典のほか、学術の最先端を世に

問う講演会やシンポジウムなども数多く開催されてきたのは、多くの皆さんが知っていることと思います。それぞれの時代を特徴づける思想や理論、アイデアや発見が熱っぽく報告され議論される場となってきました。市民への公開講座もこの大講堂で長年にわたって実施され、東京大学の知を多くの人々と共有する場でもありました。こうしたすべての意味で、この大講堂の空間には、長い時の流れの中で、この床を踏みその椅子に座ったであろう無数の人々の知への熱く真摯な思いが凝縮されています。それが、歴史の重みです。

皆さんの頭上にはシャンデリアが架かっています。その真上にあたる小屋組の中心部には、いまま創建以来の大きな木製の棟札が取り付けられています。棟札というのは、建物の建築の趣旨や建築主などを記したのですが、そこに記されている言葉は、「天長地久」「国土安穩」、そして「学運隆昌」です。そうした先人の強い思いが、この建物に込められています。ぜひ、この安田講堂という空間の空気を胸一杯に吸い込むことによって、東京大学の豊かな学問の歴史と社会の発展に尽くしてきた歴史を感じ取ってください。そして、皆さんがこれから、大学での学びを生かして活躍し、学問の未来や社会の未来に大きな貢献をすることによって、皆さん自身もまた、この安田講堂に象徴される東京大学の歴史の一部になるのだ、という気概を持って、新たな門出に臨んでいただきたいと思います。

タフに、そしてグローバルに、皆さんのこれからの大いなる健闘をお祈りします。

平成27年(2015年)3月25日

答辞

(第一部)

理学部
豊田良順さん



本日は、ご多忙の中、教職員ならびにご来賓の方々をはじめ、多くの皆様のご臨席を賜り、このように盛大な式典を催していただきましたことに、卒業生一同心より御礼申し上げます。無事卒業の日を迎えることができ、大変

嬉しく思います。また只今、総長の濱田純一先生よりありがたい告辞のお言葉を賜りましたこと、重ねて御礼申し上げます。

卒業にあたり、大学生活を振り返りますと、第一線で活躍の先生方や優秀な学友に囲まれ、恵まれた環境で学問と向き合う傍ら、思い思いの課外活動を楽しむこともできた、充実した年月でした。駒場で過ごした前期課程では幅広い知識を習得する多くの機会をいただきました。後期課程では専門に

分かれ、各自の分野を深めました。

私の場合は、最先端の化学の世界に身を置くことのできる理学部化学科に進学し、研究室の皆様のおかげで、毎日研究に専念させていただきました。化学では物理現象や生命活動の根源となる分子を扱います。目に見えない世界で分子を自在に創製することは生やさしいことではありませんが、大変興味深く、やりがいを感じています。卒業研究では、金属錯体を基盤とした機能性ナノ材料の開発に取り組み、

光機能性ナノ細線などの創製に励みました。4月からは東京大学大学院に進学しますが、自分の携わる研究で少しでも科学の発展と人類の持続的繁栄に貢献できるよう尽力していきたいと考えています。

今後、卒業生は一人ひとり異なる道を歩むこととなります。世界中で様々な問題が深刻化している昨今、それぞれが東京大学で培った知識と経験とともに、これらの課題に立ち向かい、グローバルリーダーシップと協調性を

発揮しながら、輝かしい未来の構築に努めてまいります。

答辞

(第二部)

文学部
村重陵さん



本日、東京大学を卒業する私たちのために、このような祝賀の場を設けてくださったこと、さまざまな方のご臨席を賜ったこと、そして、祝福と激励の言葉を手向けてくださったことに対して、私たちは心から感謝申し上げます。

私たちが東京大学で学んだことは多岐にわたりますが、その中でも、皆が共通して学んだことのひとつとして、「言葉」に対する真摯な態度を挙げることができるでしょう。

最後に、これまで熱心にご指導くださいました諸先生方、お世話になりました

私たちは、自分の言葉にせよ、他者の言葉にせよ、一字一句にいたるまでゆるがせにはなりません。たとえ、誤解やすれ違いが避けたいものであるとしても、その可能性をどこまでも低くするべく、私たちは慎重に、辛抱強く言葉を交わしあっていかなければなりません。

私たちはまた、いかなる言葉にも、それを発する人の名前が刻まれているということ、強く自覚する必要があります。祝賀の言葉や感謝の言葉、裁きの言葉や和解の言葉、さらには、誹謗やたわ言にいたるまで、言葉には名前が刻まれています。匿名という名目のうちにもおそらく、名前の痕跡はいくらか残らざるをえません。さらに、東京大学を卒業する私たちは、東京大

した皆様に改めて御礼申し上げるとともに、私たちの成長を温かく見守って

学という名前をも、いくらか背負わなければなりません。私たちは、しかし、そのような逃れがたい名前の刻印を前にして、沈黙や自粛に陥るべきではないでしょう。私たちは、名前の重圧に屈することなく、語り出さなければなりません。

私たちが語り出さなければならない時——それはしばしば、何らかの危機に直面している時でしょう。しかし、そこで必要とされる言葉は、必ずしも、その危機に間に合うとは限りません。だからこそ、目下の危機のみならず、過ぎ去った危機、あるいは来るべき危機に関しても、私たちは語り続けなければなりません。そして、そのためにも私たちは、いま必要とされている言葉、時局に合った言葉——それは有

くれた家族に感謝します。

用な言葉、役に立つ言葉とも言えるでしょうが、そのような言葉だけを追い求めるのではなく、いまは必要でない言葉、いまは無用な言葉が、さまざまに語り出されるゆとりを確保し、それを言祝がなければなりません。

本日、この式典によって祝福されつつ卒業していく私たちは、自分に固有の名前のみならず、東京大学という名前をも、あるいは明白に、あるいは痕跡として負いながら、それぞれの語るべき言葉を模索していきます。

最後に、しかし最小でなく、これまで私たちを支え、導いてくださったすべての方々に、深く感謝を申し上げて、答辞といたします。

平成26年度学位記授与式



平成26年度学位記授与式が、3月24日(火)に、3年ぶりに安田講堂において挙行されました。

式は、第一部(文系研究科)が9時15分、第二部(理系研究科)が11時30分に開式し、約2,900名の修了生(修了者数4,320名(修士課程2,848名、博士課程1,135名、専門職学位課程337名))が出席しました。

開式に先立ち、音楽部管弦楽団によるバッハ作曲の「管弦楽組曲第3番BWV1068より序曲」の演奏があった後、総長をはじめ、理事・副学長、理事、各研究科長及び各研究所長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となりました。

はじめに、濱田総長から各研究科・課程の修了生代表に、順

次、学位記が授与されました。続いて、濱田総長から修了生に向けた告辞が述べられた後、修了生総代(第一部 学際情報学府 安藤元博さん、第二部 情報理工学系研究科 秋葉拓哉さん)から答辞が述べられました。その後、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終りました。

なお、本式典では、壇上において手話通訳を行い、御殿下記念館(ご家族会場)ではスクリーンに安田講堂内の式典模様(手話通訳の映像と字幕も表示)の放映を行い、ご家族など約2,900名が出席しました。

平成26年度学位記授与式 総長告辞

本日ここに学位記を授与される皆さん、おめでとうございます。晴れてこの日をお迎えになった皆さんに、東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。このたび大学院を修了する学生の数は、修士課程2,848名、博士課程1,135名、専門職学位課程337名です。合計で4,320名となります。留学生の皆さんはこのうち720名で16%ほどの割合を占めており、母国を離れて生活する大変さの中で見事に学位を取得してくれたことを嬉しく思います。また、これまで長い期間にわたり、皆さんの勉学を支え続けて下さったご家族の皆さまにも、感謝とお祝いを申し上げます。と思います。

皆さんがこうして学位を取得するまでには、学ぶこと、研究をすることの厳しさ、苦しさに直面し、挫けそうになったこともあるだろうと思います。それは、おそらく、真剣に学びの道を志した誰しもが経験することです。第二次世界大戦が終わって間もなくの時期に、東京大学の総長に就任して大学の再建に心血を注いだ南原繁先生は、アララギ派の歌人としても知られていますが、その句の一つに次のようなものがあります。「愚かしくひとつのことに思ひこり学びつづつつ吾が生は経むか」というものですが、卓抜した政治学者であっても、研究の途上でこのような感懐を持つこともあったのです。「愚かしく」というのはなかなか強い表現であり、また、句集の中でこの句が取められている節には『業苦』という題名が付されているのですが、私自身の研究生生活を思い起こしても、そうした感覚にとらわれた経験がたしかにあります。ただ、そうした経験や思いも乗り越えて晴れて学位を得た皆さんには、次のような句もぜひ紹介しておきたいと思います。

これは、やはり南原先生が、旧制の第一高等学校に長く勤務していた友人の死を悼んで詠んだ句の一つですが、「学者君が一生の業やもろつ人の心に染みて永久にのこらむ」というものです。皆さんが身を削るような勉学や研究の上に生み出してきた成果は、まさしくこの句にあるように、時代や場所を超えたものとして多くの人々に共有されていく可能性を持っています。今日この安田講堂に集っ

ている皆さんは、そうした価値ある仕事に携わってきたことを誇りに出来る人たちです。

さて、この大講堂-安田講堂ですが、かなり大規模な耐震改修工事が行われてきましたので、ここ2年の学位記授与の式典は学外で実施されてきました。つい先日やつと工事が終わり、このたびの式典からまたこちらに戻って挙行されることになりました。この工事にあたっては、構造部分や天井などの耐震性の強化と併せて、設備を現代的な水準にあわせるための整備も行われ、使い勝手が大変よくなりました。また、講堂創建時のオリジナルな意匠の復元にも力が注がれました。のみならず、かつての竣工時にはまだ完全な整備がなされていなかった1階、2階部分についてもこのたび計画的な部屋割りが行われて、この学位記授与の式典が、安田講堂のいわば本当の意味での完成のこけら落としの機会となります。大学院で知の頂点を究めるべく学び続けてきた皆さんを、長い歴史を越え先人の思いを受け継いで知のシンボルとなったこの安田講堂から、今日送り出せることを、まことに嬉しく思います。

知識基盤社会である一方で「知性」の地位は低下している

もっとも、いま知のシンボルという言葉を使いましたが、その「知」をめぐる現代の状況はどのようなもののでしょうか。それは、歴史の中で敬意を払われてきた知と同じような地位を今も保っているのでしょうか。知識が持つ大切さは、たとえば「知識基盤社会」といった言葉が用いられることにも見られるように、決して色あせているわけではありません。少し以前のものになりますが、平成17年に出了れた「我が国の高等教育の将来像」と題する中央教育審議会の答申では、21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の



東京大学総長

濱田 純一

基盤として飛躍的に重要性を増すと述べられていました。これが「知識基盤社会」であるというわけです。

このように知識の重要性を誰しも疑うことはありませんが、他方で、「知性」ということになる、この言葉をポジティブな意味合いで聞くことが最近では少なくなってきた気がします。むしろ、「知性の限界」ということが語られたり、あるいは「反知性主義」が時代の一つの空気として話題になったりすることもあります。また、知性と類縁関係にあるであろう理性という用語についても、その登場場面が減ってきているような印象を受けます。むしろ、理性の限界、理性のゆらぎ、理性の不安といった言葉もしばしば耳にします。さらには、知的なものが、短期的・直接的な課題への対応のための、いわば道具として期待される傾向が強まっているように見えることも気になります。そして、物事への取り組みにあたって、多角的に丁寧な議論を重ねるよりも、感覚的な判断や期待・願望・雰囲気に応えることがしばしば優先される時代になりつつあるような気がします。そのような、いわば知性の地位低下の理由として何があるのかは真剣に考えてみなければなりません。たとえば、科学的な言説や学問的な認識の限界に対する失望があるかもしれませんし、現代の情報化社会でさまざまな知識が断片化し、知識とたんなる情報との境界が崩れてきているような状況も関係しているかもしれません。さらには、知識がしばしば権威や権力と結びつく場合があることへの批判の感情もあるように感じます。



知性というのは本質的に長い時間軸の中で形成されるもの

知性がこうした状況にあることは、どのような影響をもたらすのでしょうか。知識がさまざまな具体的課題の解決やイノベーションに役立つことはたしかです。ただ、知性という観念が薄れていくことは、知識の役割が短期的な道具的用途に向けられがち傾向を強めていくような気がします。知性なり理性というものは、本質的に長い時間軸の中で形成され、かつ長い時間軸の中で効用を生み出していくものであるはずだというのが私の理解です。

「知性」という言葉について、これまであえて定義を与えることなく話をしてきました。知性を表す言葉は、当然に国によってさまざまな言語表現があり、またギリシャの昔から数限りない人々によって論じられてきたものであって、一つの定義で事足りるということはありません。ただ、少なくとも、知性というのは、アリストテレスの時代以来、感覚的なものとは区別されるものと捉えられ、抽象化や概念化、理解や推論、多様な経験や観察による思考の総合化や相対化を踏まえた認識をなす資質と理解してよいだろうと思います。また同時に、こうした資質の涵養は、人格の形成そのものと重なるものとも捉えられてきたように思います。こういうと難しい話のようですが、実はそれは、皆さんが学部で真剣に学び、そして大学院で研究を突き詰めてきたプロセスと重なっています。皆さんは、学びや研究の中で、意識的にせよ無意識的にせよ、十分な時間をかけた、絶えずリフレクティブな過程を経て学術の成果をまとめ上げてきたはず。そして、おそらくその過程の中で、自分自身の成長ということも実感しているはず。それが、知性というものを身に付けてきた、ということです。意識すべきなのは、その知性を存分に発揮できる場を見出す、あるいは作り出すということ、そしてその知性をさらに磨き続ける、ということです。

いま知性というものが置かれている時代環境を考えさせる事例として、私が最近関わってきた学外での活動に触れておきたいと思います。それは、経済界、労働界、学識者の有志で組織するグループの勉強会で、新しい日本の創造を目指して公共を担う人材の支援や日本の政策形成の人的・知的ネットワークの立て直しを図るべく、2030年を想定して日本の自画像を描いてみようという議論を重ねてきました。その詳細をここで話する余裕はありませんが、そうした未来の日本の姿を描こうとする時には、当然、いま現在、何が課題なのかを意識的に俎上にあげることが必要となります。そこで未来に向けた取り組みを妨げるものとして批判的に取り上げられているのが、社会における「余剰幻想」というものであり、また「短期的思考・志向の広がり」という現象です。「余剰幻想」というのは過去の成長の遺産に寄りかかり、過去の考え方や生き方、働き方のままに将来を描き続けようという体質を指しています。日本の場合は、戦後の高度経済成長の余剰幻想から抜け切れないで、財政危機や少子高齢化などの課題に対して抜本的な対策をとれないでいることの問題が指摘されているわけですが、こうした余剰幻想は、社会の諸々の変化のスピードの速さに追われて生じている面もある「短期的思考・志向の広がり」と必然的に連動しているはず。すなわち、これまでの社会のわたちがこれからも基本的にそのまま続けていこうという感覚を持ち続ける限り、短期的な視野でものを考えていればよく、長い目で将来を見通すような議論は必ずしも必要ではないということになってしまいます。

いまお話ししたような時代状況が、どうやら、さきほど話してきたような、知性が置かれている現代の環境と関連しているように思います。すなわち、これまでの社会的な枠組みや価値観の延長上で考える「余剰幻想」がある限りは、長い時間軸に立った思考や見通しを提供する知性、また長い時間軸がなけれ

ば十分に機能を発揮することが出来ない知性の役割は限られてきます。ただ、逆に、こうした「余剰幻想」の支配する時代状況を突破していくことができるのも、知性に他なりません。さきほどの研究グループのレポートは、富のように「見えるもの」だけでなく、社会の中で育まれてきた美や感性や倫理といった価値、培ってきた技術力や社会構想力の可能性といった、「見えないもの」の大切さということにも言及しています。そうした「見えないもの」をじっくりと育み、認識し、また支え続けていくのも、やはり知性以外の何物でもありません。日本の社会が、あるいは世界の多くの国々がさまざまな困難な課題を抱えていることは事実です。そして、そうした課題の少なからずが、現状の延長上の思考や枠組みだけでは解決できないことも事実です。それだけに、いまここに大学院という厳しい知的な修練の場を経て明日の時代を担うべく旅立っていくとする皆さんに、社会における知性の再興、知性の再活性化という課題を託したいと思います。

時代と場所を超越して躍動する知的な世界へ

今日の話の冒頭で、この安田講堂の改修ということに触れましたが、皆さんの目の前の舞台上に描かれた壁画にちょっと目をやっていたきたいと思います。これは安田講堂の創建時に、小杉未醒^{みせい}という洋画家によって描かれたもので、このたびの改修にあたって東京藝術大学の研究室の手を借りて修復されました。くすみがとれて、かつてより絵がすいぶん鮮明になったように見えます。舞台正面に向かって左が「湧泉」、右が「採果」と題されており、「知恵が泉のように湧き出し、大きな成果となって実を結ぶ」というテーマを寓意的に描いたものであると、伝えられています。この講堂が90年にわたって見つめ続けてきたであろう東京大学の教育研究の歴史は、実際、そのようなものでした。この絵に描かれている人々からは不思議な印象を受けます。あるいは天平風のようにも、あるいはギリシャ・ローマ風でもあります。はっきりしません。当時の記録を読むと、大学側から絵のモチーフを「時代と場所を超越」したものにしてほしいという希望があったということが、小杉画伯の言葉として出てきます。



まさしく知性というものは、かくあるべきだと思います。皆さんがこれから社会の現場に出て行くのであれ、あるいは、大学など研究機関で研究を続けていくのであれ、限られた時間や特定の場でしか通用しない知識だけでなく、「時代と場所を超越」して躍動する知的な世界

を保ち、かつ磨き続けていただきたいと思います。知性というのは、完結したものではなく過程であって、つねにリフレクティブに自らを成長させ続けているという状態が、その本質です。そのダイナミズムを意識的に維持し続けることが皆さんの人生をさらに豊かなものとし、また、さまざまな形での社会への貢献を確実に生み出

していきはすです。

タフに、そしてグローバルに、皆さんのこれからのご健闘をお祈りします。

平成27年（2015年）3月24日

答辞

（第一部）

学際情報学府
安藤元博さん



本日は、濱田総長をはじめ、諸先生方のご臨席を賜り、このように盛大な学位記授与式を催していただき、ありがとうございます。修了生を代表して、厚く御礼申し上げます。また、ただいま、濱田総長よりご告辞と激励のお言葉を賜りましたこと、感謝申し上げます。

本日、この場に集った修了生は、東京大学大学院に入学し、修士課程、博士課程または専門学位課程で日々研究に励んでまいりました。

私の場合は社会情報学を専門分野とし、「市場社会において、私益の追求と公益はいかに両立しうのか」という18世紀のアダム・スミス以来の経

済思想のテーマに対して、社会の高度情報化がその問題を解く鍵になる可能性について研究してまいりました。その研究の動機は、これまでの人生経験によっています。私は現在に至るまで長く広告会社に所属し、市場社会の只中で仕事をしてきました。広告やマーケティングを通じて消費者に対して「私益の追求」を促してきましたが、そうした仕事に携わっているうちに、それが社会全体にとってどのような意義をもっているのかという、内なる問いを抱くようになりました。その問題を解くために市場社会のルーツにまで遡り、その理論と、ICTにより変革されつつある現在の市場との関係を解き明かすことを試みたのであります。

以上は社会人と学生とを兼ねている私固有の経験です。もとより、修了生一人一人の研究の内容、およびその動機は、様々に異なっていることでしょう。

次々に壁が立はだかる苦勞と挫折の連続であったと思います。

しかし、指導教員をはじめとする諸先生方にご指導ご鞭撻を賜るに連れ、こういった過程こそが、人類が確固たる「知」を創造し獲得する重要な営みなのだ強く感じるようになりました。先人の積み重ねた発見に基づいて活動を行うことは、しばしば「巨人の肩の上に立つ」と例えられます。一度自身の研究に熟中し成果を急ぎすぎると、まるで巨人が自分の前に立ちただけ、成果の新規性を削ぎ疑問を投げかけ足を引っ張るかのように感じられてしまいます。ところが、私達は巨人に立ち向かっているわけではなく、巨人をより大きくするために努力しているはずで、私達が現在様々な技術に支えら

れ豊かな暮らしができ、そしてこうやって新たな知を創造するに至っているのも、計り知れない先人たちの努力による知の積み重ねによるものです。その尊さを理解するにつれ、巨人が決して崩れてしまうことのないよう着実な過程を経ることに納得がいき、そして自らの成果が認められ巨人の一部となっていくことの喜びをより一層感じることができるようになりました。

現実とは、いかなる分野のものであれ、現実と理論との対話です。私たちが果たすべき知的創造とは、抽象と経験の間を行き来する循環運動そのものにあります。

日本および世界の現実には、医療、食糧、財政や雇用、貧困、平等、民族の共生、環境とエネルギーなど、さまざまな課題が山積しています。私たち東京大学大学院の修了生は、こうした困難な問題を克服するために現実に対する洞察とそれにたちむかう意思を持ち、あらたな知識をうみ、知識をもってさらなる現実にあたり、問題への認識を深め、知識をより高度化する、そうした持続的なループ運動の力を信じ、実践していくものです。

本日、学位を授与された後も、私たちの人生は続きます。あるものは学術の世界に残り、あるものは社会の現場に身を置くことになるでしょう。しかし私たちはみな、それぞれの持ち場におけるこうした往還運動の持続によってこそ人類の困難な課題を乗り越えられることを確信し、明日からの毎日をあらたな決意をもって過ごしてまいりたいと思います。

最後になりましたが、今日を迎えることができたのは、これまで私たちをご指導くださいました諸先生方、職員の皆様、切磋琢磨してきた友人たち、そして暖かく見守ってくださったご家族の皆様の支えがあったからこそこのことです。私たちの日々の現実を支え続けてくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

東京大学の更なるご発展を祈念いたしまして、答辞とさせていただきます。

答辞

（第二部）

情報理工学系
研究科
秋葉拓哉さん



本日は、先生方並びにご来賓の皆様のご臨席を賜り、このように盛大な式典を催して頂きまして誠にありがとうございます。また、只今濱田総長より心からの励ましのお言葉を賜りましたこと、修了生一同、心より厚く御礼申し上げます。

私たちは、数年前に本学の門を叩いて以来、日々研究に励み、本日こうして念願の日を迎えています。これまでの研究生活は決して順風満帆なものではありませんでした。考えぬいてやっとなんかしたことの大半は上手くいきませんでした。また、ついに発表に値する発見だと思えるものがあっても、既に別の誰かによって発表されていることを知り落胆することが少なくありませんでした。そして、どうにか論文の形にすることができても、厳しいピア・レビューによりなかなか成果と認められないこともありました。

れ豊かな暮らしができ、そしてこうやって新たな知を創造するに至っているのも、計り知れない先人たちの努力による知の積み重ねによるものです。その尊さを理解するにつれ、巨人が決して崩れてしまうことのないよう着実な過程を経ることに納得がいき、そして自らの成果が認められ巨人の一部となっていくことの喜びをより一層感じることができるようになりました。

さて、私達修了生一同は本日をもって社会へと巣立っていきます。東京大学にて最先端の科学技術と研究に取り組む姿勢を身につけた私達には、日本のリーダーとして活躍し、日本を、そして人類をより良い未来へと導くという、非常に大きな責務が課されていると認識しております。例えば、私が専

門とする情報理工学では、コンピュータシステムの高速度と高度化を続けることにより、遠からずコンピュータの知能が人類を大きく超える「技術的特異点」を迎え、そのインパクトは産業革命を超えるとも言われています。そういった大きな課題に、将来の仲間たちと協力して取り組み、次の時代をより良いものとして創造するべく尽力する覚悟であります。

最後になりますが、今日まで研究、研鑽の大切さをご指導下さった恩師の先生方と、日々の研究活動を支えて下さった家族や友人に修了生一同、心より感謝を申し上げます。東京大学の更なるご発展を祈念いたしまして、答辞とさせていただきます。



記
授
与
式

平成27年度入学式・大学院入学式



平成27年度学部入学式及び大学院入学式が4月13日(月)に、日本武道館において挙行されました。

午前の学部入学式には約3,000名の新入生と、そのご家族など約6,400名、合わせて約9,400名が、午後の大学院入学式には、約2,900名の新入生と、そのご家族など約3,400名、合わせて約6,300名が出席しました。

午前9時45分、運動会応援部による演舞があり、音楽部管弦楽団によるサンサーンス作曲の「サムソンとデリラより"バッカナール"」及びワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、五神真総長はじめ理事・副学長、理事、学部長、研究科長、研究所長並びに来賓の荻谷剛彦オックスフォード大学教授が登壇し、10時40分開式となりました。

式では、はじめに音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、小川桂一郎教養学部長が式辞を述べました。式辞の後、荻谷剛彦オックスフォード大学教授から祝辞をいただきました。その後、入学生総代高宮日南子さん(理科I類)による宣誓が行われました。

最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、11時40分に式を終えました。

大学院入学式においては、13時25分から運動会応援部による演舞、音楽部管弦楽団によるサンサーンス作曲の「サムソンとデリラより"バッカナール"」及びワーグナー作曲の「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、五神真総長はじめ理事・副学長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓の佐藤勝彦大学共同利用機関法人自然科学研究機構長が登壇し、14時20分開式となりました。

式では、音楽部管弦楽団、音楽部合唱団コールアカデミー、音楽部女声合唱団コーロ・レティツィアによる、東京大学の歌「大空と」の奏楽、合唱の後、総長が式辞を述べ、続いて、坂井修一情報理工学系研究科長が式辞を述べました。式辞の後、佐藤勝彦大学共同利用機関法人自然科学研究機構長から祝辞をいただきました。その後、入学生総代田中涼介さん(総合文化研究科)による宣誓が行われました。最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、15時30分に式を終えました。

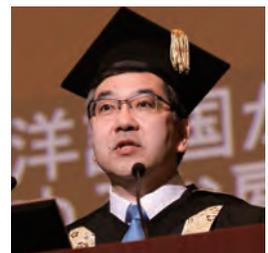
平成27年度入学式 総長式辞

本日ここに東京大学に入学された新入生の皆さんに、東京大学の教職員を代表して、心からお祝いと歓迎の意を表します。皆さんを新たな仲間として東京大学にお迎えすることは、私たち教職員にとっても大変喜ばしいことです。

目標としてきた東大入試を突破し、念願が

叶ったという喜びと、大学での新しい生活への期待に胸を膨らませていることと思います。東京大学の恵まれた教育環境を思う存分に活用して、大きく成長してください。

ご列席のご家族の方々にも、心からお喜び申し上げます。皆さんが大切に育ててくれたお子さんが、東京大学でその能力をさらに



東京大学総長

五神 真

大きく伸ばすことができるよう、私たち教職員も全力を尽くしたいと思います。

本日入学された皆様は3,144名です。うち、女子学生は580名、外国人留学生は38名です。あとで詳しくお話するように、東京大学は、多様性を大切にしたいと考えています。それは、優れた人材が育つためには、多様な人材が集まって切磋琢磨する環境が不可欠だからです。東京大学には、全ての都道府県の出身者が在籍しています。その点では多様に富む大学と言えます。しかし、女子学生と外国人留学生の比率については、残念ながら私たちの期待する水準には至っていません。私は、東京大学の学生の多様性をさらに豊かなものにしていかねばならないと考えています。

新入生の中には、東日本大震災で大きな被害を受けた地域から進学された方々も含まれています。中学生のときに大震災に遭い、復旧復興が進む中で高校時代を過ごし、困難な環境の中で勉学に励まれ、そして今日この日を迎えられました。ハンディキャップを乗り越えたご努力に、心より敬意を表します。大震災発生から4年の歳月が流れました。しかし、復興はいまだ道半ばです。東京大学はこの間、濱田前総長の下で、多くの教職員や学生が様々な復興支援の活動を行ってまいりました。これからも、復興にむけた貢献を続けていく決意しております。新入生の皆さんも、復興支援のボランティアの輪にぜひ積極的に加わってください。

東大が創立10年で試みた世界初のアイデアとは？

さて、東京大学は1877年（明治10年）4月12日に創立されました。昨日が東京大学の138回目の誕生日です。皆さんが3年生に進学するときに、東京大学は創立140周年を迎えることになります。

東京大学の前身である蕃書調所は1857年、種痘所は1858年の幕末期に設立されました。明治期に入り、文明開化の時代になると、西洋諸国の近代化の成果を一気に導入することが必要になりました。その中核的役割を担うために東京大学が設立されました。そこで教育の中心的役割を担ったのは、西洋諸国から招聘した外国人教師、いわゆるお雇い外国人で、講義はほとんど外国語で行われていま



た。設立当初の東京大学は、今よりもはるかに国際化していたのです。

東京大学は、1886年（明治19年）に公布された帝国大学令によって帝国大学に改組され、総合大学としての原型が整いました。その際に、工部省が所管していた工部大学校が帝国大学に統合されました。これは実は、世界史的に見て画期的な試みだったのです。中世ヨーロッパに起源を持つ西洋諸国では、大学は、医学、理学、法学、文学などの古典的な学問を教育研究する組織であり、工学のような実用技術は大学では取り扱わないとする考えが支配的だったのです。東京大学は、工学を学問として、他の古典的な学問と同格で総合大学の構成要素と位置付けたわけです。これは世界で初めてだったのです。現在では、欧米の大学に工学部が設置されているのは普通のことになりましたが、東京大学のこの試みは、先駆的なアイデアだったのです。

この頃既に、東京大学から優れた人材が育ちはじめていました。アドレナリンの結晶抽出に成功した高峰謙吉、緯度変化のZ項を発見した木村栄、土星型原子模型を提唱した長岡半太郎など、教科書に紹介されているような著名な研究者は、いずれも東京大学の創設期の卒業生です。彼らは、単に西洋の先進的な学問を学んだだけでなく、それぞれの領域で従来の学問の常識を超える、世界最先端の学術成果をあげた人物たちです。

高峰たちのように、知識を武器として活動し、既存の常識を超える新たな発明や発見をし、そのことを通じて世界を舞台に、人類社会に貢献するような人物を、私は「知のプロフェッショナル」と呼びたいと思います。高峰たちは傑出した「知のプロフェッショナル」ではありますが、彼らは決して例外ではありません。私は、東京大学総長として、東京大学で学ぶ全ての学生諸君が「知のプロフェッショナル」になって欲しいと願っています。またそれは可能なことであると確信しています。

それでは、どうしたら皆さんは「知のプロ

フェッショナル」になることができるのでしょうか。

「知のプロフェッショナル」になるには3つの基礎力が必要

「知のプロフェッショナル」になるためには、当然のことながら、それぞれの専門領域で最先端の知識を身に付けなくてはなりません。皆さんがこれから身に付けなければならない専門知識はきわめて高度なものですが、東大入試に合格した皆さんなら、よほど怠けない限り、十分に咀嚼可能でしょう。しかし、いかに高度であっても、単に既存の知識を吸収するだけでは、不十分なのです。皆さんが、既存の知識の限界を突破する「知のプロフェッショナル」になるためには、最先端の知識を身に付けることに加えて、3つの基礎力を身につけることが不可欠だと私は考えています。

第1の基礎力、それは、「自ら新しいアイデアや発想を生み出す力」です。

高等学校では、身につけるべき知識はあらかじめ定められていました。その知識を学び取ることが即ち学習でした。東京大学の入学試験においても、高等学校の学習指導要領の範囲を超えた問題を出題しないことを原則にしています。ですから、皆さんがこれまで励んでこられた受験勉強は、いわば有限の枠内における勉強だったのです。それに対して、東京大学におけるこれからの学びは、自由であり、かつ無限です。そもそも大学には指導要領など存在しません。東京大学では世界最先端の知の探求を目指し、日々研究がすすまられています。大学教育はその最先端の知の担い手を育成することを目指しています。世界の最先端には、先人によるお手本はありません。これまでのように先生が授業で教えてくれたことに満足するだけでは、既存の知の限界を突破することは永遠にできません。そこで求められるのは、「自ら新しいアイデアや発想を生み出す力」なのです。

第2の基礎力は、「考え続ける忍耐力」です。

東京大学の入学試験では、受験生が持っている知識の多さよりも、持っている知識を組み合わせて解を導く力、すなわち「考える力」を重視しています。ですから、東京大学の入学試験に合格した皆さんは、優れた「考える力」を持っていると言えます。しかし、東京大学の学びで求められる「考える力」は、それよりもはるかに高い水準のものなのです。というのも、入学試験では解答時間が決まっています。問題を解くために考える時間は、せいぜい2時間か3時間です。そして、試験問題には基本的に正解が存在します。それに対して、最先端の知を追求する大学の学びでは、どうすれば正解に辿り着けるのか誰にも分かりません。そもそも正解があるのかも分からないのです。そこで求められるのは、単なる「考える力」ではなく、「考え続ける力」なのです。考え続ける期間は、何日も、何週間も、時には何ヶ月にも及ぶかもしれません。ですから、それは「考え続ける忍耐力」と呼ぶべき力なのです。天才の一瞬の閃きによって生み出されたとされる歴史的な発見であっても、実は、殆どの場合、「考え続ける忍耐力」の産物なのです。

第3の基礎力は、「自ら原理に立ち戻って考える力」です。

大学での学びを通じて、皆さんはそれぞれの専攻する専門分野を選び、やがてそれぞれの専門分野におけるエキスパートとして活躍することになるでしょう。学問は、高度化すればするほど専門化し、細分化される傾向があります。細分化が進む中で、袋小路に迷い込んだ経験を持たない幸運な研究者は、むしろ稀です。袋小路に迷い込んだ時、研究者を救うのは、「自ら原理に立ち戻って考える力」なのです。原理に立ち戻ること、自分が今どこに立っているのかを確認し、進むべき方向を見いだすのです。

これまでお話ししたことから、東京大学における学びが、高校時代の学習や受験勉強とは質的に大きく異なるものであることはご理解頂けたと思います。皆さんは、東京大学に合格して、受験勉強から解放されました。そしてそれは、「自ら新しいアイデアや発想を出す力」、「考え続ける忍耐力」、「自ら原理に立ち戻って考える力」という3つの基礎力を身につけるための、新たな学びへのスタートに他ならないのです。

新たな学びを始めるために 受験勉強からのギアチェンジを

受験勉強からこの新たな学びへの転換には、ギアチェンジが必要になります。東京大学は、濱田前総長のもとで「学部教育の総合的改革」と呼ばれる大規模な教育改革に取り組んできました。それは、みなさんがこのギアチェンジをスムーズに行えるようにするためのものです。新入生が最初の1年間、大学を休学し、自ら作った計画に基づいて様々な体験活動に取り組む初年次長期自主活動プログラム(FLYプログラム)、自らが選択して多様な活動を経験する体験活動プログラムなどがあります。また、皆さんの学年から始まる、初年次ゼミナールでは、様々な分野の第一線で活躍する教員が、少人数のクラスで、自らの研究体験を踏まえながら、大学での学びについて語り、皆さんの知的好奇心に火を付けたいと思っています。ここではこれらのプログラムの詳細な説明は省きますが、皆さんの新たな学びへの挑戦を応援しています。どうか存分に活用してください。

さて、大学の学びの中で3つの基礎力を身に付けた皆さんは、「知のプロフェッショナル」に向けて次第に歩んでいくこととなります。そこで、皆さんがこれから「知のプロフェッショナル」になる上で欠かせないのが、「何のために」という問いに答えることなのです。

この問いに対する答えを見つけるのは皆さん

自身です。私たち教員は答えを教えることはできません。しかし、皆さんに対して、それぞれの専門を生かして、人類の抱える諸問題を解決することに貢献していただきたいと願うことは、許されると思います。

20世紀は「科学技術の世紀」と呼ばれ、科学技術の多くの分野で目覚ましい革新が生み出されました。21世紀に入って、変革の速度はますます増しています。科学技術の発展は、かつて人類が抱えていた多くの問題を解決しましたが、同時に新たな問題を発生させました。例えば資源の枯渇、環境破壊、世界金融不安、地域間の格差拡大等です。これらは地球規模の深刻な問題であり、人類の存続を脅かしています。私たちは、人類の未来のために、学問の力を通じてこれらの諸問題の解決に貢献する責任があります。皆さんは是非、それぞれの専門を生かして、これらの諸問題を解決することに挑戦し、貢献してください。

これらの課題は、いずれも難問です。こうした難問を解決するのに必要なものは何か。私は、「多様性すなわちダイバーシティ(diversity)の尊重」そして「自己を相対化する視野」の二つが絶対に必要であると考えています。

「多様性の尊重」が必要なのは、これらの正解の分からない難問を解くためには、多様な観点から様々な知恵を出し合うことが不可欠だからです。その前提として、多様性が尊重されなくてはなりません。多様性の尊重とは、人々の国籍、性別、年齢、言語、文化、宗教などの違いを大切に、互いの個性を尊重することです。現在急速に進行しつつあるグローバル化は、人々の生活をフラット化する、すなわち画一化する方向に導く傾向があります。しかし、個性を塗りつぶして、皆が同じような生活をする社会は人類の進むべき方向ではないはずです。

私は、グローバル化の中で顕在化してきている問題を解決するためには、むしろ画一化の対極にある多様性の尊重が不可欠だと考えています。多様性が尊重される社会において、人々が異なる視座からの知恵を出しあい、地域や国境を越えて共に行動し、協力して社会をよりよい状態に導くのです。すなわち「多様性を活力とする協働」が地球規模で行われ



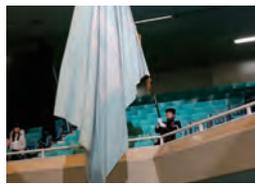
ることこそ、真のグローバル化の姿でなくてはなりません。

「自己を相対化する視野」を得るための絶好の条件が駒場にある

「多様性を活力とする協働」とは、自らと異なるものを理解し、互いの違いを尊重しながら協力することです。そのために求められるのが、私のいう「自己を相対化する視野」なのです。皆さんがこれから学ぶ駒場の教養学部は、「自己を相対化する視野」を獲得するための絶好の条件が整っています。東京大学に入学した全ての新生が入る教養学部には、全国、そして海外から多様な学生が集まっています。皆さんは、クラスだけではなく、課外活動や学生寮での生活などを通して、自分とは異なるバックグラウンドを持つ友人を見つけ、意識して交流してください。

私自身も、教養学部時代のサークル活動で培った、文系理系を越えた交流は、生涯の貴重な財産になっています。

皆さんは、これから教養学部で学ぶ中で、自ら進むべき専門分野を見極め、選ぶことになります。しかし、私は皆さんに対して、あって、自らの選ぶ専門分野の対極にあるよう



な学問に触れ、自らの専門についてもそれを相対化する視野を教養学部時代に身に付けることを、強く勧めたいのです。文系の皆さんは、自然科学の最先端の学問に是非触れてみてください。理系の皆さんは、文化や社会の在り方に関する人類の叡智に是非触れてみてください。せっかくの機会を素通りして卒業してしまつてはもったいないのです。

このように自らと異なるものとの交流を体験することを通じて、皆さんは「自己を相対化する視野」を獲得することができるでしょう。そしてそれは、「知のプロフェッショナル」として活動するはずの皆さんの可能性を大きく広げるはずです。

私は、この4月1日に東京大学総長に就任したばかりです。皆さんと同じ1年生です。東京大学の教育研究の水準をさらに高度なものとするに努め、皆さんが東京大学を卒

業するとき、「東京大学で学んでよかった」と心から思えるような大学にしたいと考えています。伝統は守るだけのものではなく、創り出すものです。皆さん、是非一緒に東京大学の新しい伝統を創っていきましょう。

最後になりますが、何事を成し遂げるにも健康が第一です。その為には規則正しい生活をするのがなによりです。規則正しい生活をする秘訣をお教えしましょう。まず、朝、きちんと起きて朝食をしっかり食べること、そして授業に出席することです。

「知のプロフェッショナル」を目指して大きく成長してください。皆さんのご健闘を祈ります。

平成27年（2015年）4月13日

教養学部長式辞

新生のみなさん、入学おめでとうございます。難関をくぐり抜けて念願の東京大学入学を果たされたことを心よりお祝い申し上げます。また、ご両親をはじめとするご家族の皆様にも、お祝い申し上げます。

東京大学に入学した学生は、全員が、まず、教養学部在籍して、少なくとも2年間を駒場キャンパスで過ごします。その2年間は、東京大学では前期課程と呼んでいますが、そこでリベラルアーツ、すなわち、教養教育の基本的な理念に基づく幅広い一般基礎教育を受け、その間にさまざまな可能性を模索しながら、自分の専門を決めて、後期課程の学科に進学していきます。

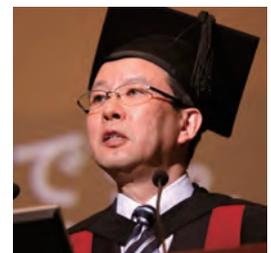
この教養学部の2年間は、それをどのように過ごすかによって、その先の長い人生が変わるといっても過言でないほど、大切な期間です。その間にみなさんは、月並みな言い方ではありますが、よく学び、よく遊んでください。そして、その学びと遊びを通して、

良き師と良き友を得てください。教養学部は、そのための最高の環境です。みなさんは、それを最大限活用してください。今、教養学部長として申し上げたいことは、この当たり前のことに尽きるのですが、それについて思うことを、少しばかり付け加えたいと思います。

専門基礎としての学びと見識をつけるための学び

まず、学びについてですが、それは2つに分けられます。一つは、将来の仕事に必要な知識や技能を習得することを目的とした専門基礎としての学び、もう一つは、仕事には直接的には必要とされないものの、人間として、偏りのない幅広い見識と教養を身につけるために必要な学びです。教養学部は、その両方についてバランスのとれた教育を行っています。

専門基礎としての学びは、職業人として自立していくためのものですので、自分の将来



東京大学教養学部長

小川 桂一郎

の進路が決まれば、誰でも一生懸命取り組みます。東大入試合格という明確な目標に向けて努力し、それを達成されたみなさんですので、専門基礎の勉強については、何の心配もしていません。

しかし、大学に入学したばかりの時点で、将来の進路を決めている人はむしろ少数で、大部分の人はまだ決まっていません。そもそも、自分が本当は何が好きで、何をやりたいのかもわからないという人も少なくないと思います。しかし、それは、まったく心配する

ことではありません。それどころか、むしろ当然のことです。なぜなら、みなさんのこれまでの人生経験も、学んできたことも、ごく限られたものに過ぎないからです。日本の近代教育の根底を築いた偉大な教育者の言葉に、「専門学科と職業の選定は遅いほど良い」とあるくらいです。

教養学部に入られたみなさんは、誰もが、まずこのことを意識したうえで、自分の世界を広げる努力をしてください。それは、できるだけ広い学問分野に触れ、その中に入り込み、迷いを重ねることです。この努力は、すでに進路を決めたつもりの人にとっても必要です。自分の世界が広がると、それまで当然のこととして決めていた自分の進路を見直すことになる可能性もあるからです。教養学部は、みなさんのその努力を、さまざまな形で強力に後押しします。それが、教養学部における教養教育です。

授業では内容とともに教員とのコミュニケーションが大切

教養学部で開講される授業の範囲は非常に広く、その内容はきわめて多彩です。講義の数は毎年2000以上に上ります。それには、物理や化学といったなじみのある科目名とともに、タイトルすら見たことのないようなものもあるでしょう。初めて見るタイトルの科目の内容がみなさんにとって非常に新鮮であることはもちろんですが、よく知っているつもり目の科目の授業も、その内容は、高校までとは驚くほど異なることでしょう。ぜひ、その知的興奮を味わってください。

授業に出るにあたっては、その内容を理解することはもちろんですが、教員とのコミュニケーションも、劣らず大切です。東京大学での授業の多くは、その分野の第一線の研究者、すなわちその分野の学問の構築に参画している教員によって行われます。授業のなかで、そのような教員の学問に対する情熱を感じ、その考え方や生きる姿勢を学び取ってほしいと思います。それは教科書を読むだけで

は得ることのできない、とても大切なことです。それが、生涯の師との出会いとなり、あるいは、将来の進路を決定する機会となるかもしれません。そのような機会は、もちろん、待っているだけでは決して訪れません。気に入った授業には十分な準備をして出席し、積極的に対話に参加してみてください。同学を志す友人との間に深い友情を育むきっかけともなるでしょう。一つでもそのような授業に出会えることを願っています。

みなさんが教養学部で受ける授業の多くは、教養を身につけるための科目ですが、同じ科目でも、人によってその位置づけは変わります。いずれにせよ、みなさんが教養学部で学ぶ多くの科目は、将来の職業に直結しないという点においては一種の「遊び」のように思われるかも知れませんが、しかし、その遊びこそが、人間として偏りのない幅広い見識と教養の源となるのです。

これまで学業のことばかりお話ししてきましたが、教養学部の学生生活のもう一つの柱は課外活動です。課外活動は学業ではないので、これは純粋な遊びといえますが、今申し上げた観点に立つと、とても大切な営みであり、教養学部としても重視しています。実際、さまざまなスポーツや文化芸術活動がさかんに行われており、その中には、驚くほど高いレベルに達しているものもあります。親から見ると、子供は勉強するために東大に入ったはずなのに、課外活動にばかりうつつを抜かしていると思われるかもしれませんが、それも教養学部における広い意味での教育の一環です。ご心配は無用です。

好きなことに没頭する際の 高揚感生きる喜びそのもの

課外活動を重視するのは、好きなことに没頭するときに得られる高揚感を体験し、それが生きる喜びそのものといえることを知ってほしいからです。また、好きなことに徹底的に取り組み、努力していけば、やがてそれは、自分だけではなく、他の人にも喜びをもたら

せるようになることもわかるでしょう。たとえば、スポーツや音楽演奏は、最初のうちはなかなかうまくできません。それでも、困難を一つ一つ克服してゆくのはとても楽しいものです。努力を重ねてある程度上手にできるようになってくると、自分だけでなく、それを見たり聴いたりしてくれる人にも楽しんでもらえるようになります。これは、他の人との間で深いレベルのコミュニケーションが成立し、それによって喜びが生まれることを意味しています。音楽の演奏であれば、自分が奏でている音楽がこんなにも美しいものなのだという思いが聴き手に伝わり、それが感動を呼び起こすのだといえるでしょう。

自分の思いが深いレベルで他者と共有される喜びは、創造を伴うあらゆる営みに共通します。自然科学や人文科学の研究の喜びも、自分の発見したことの面白さを伝え、それを共有してもらえることにあります。したがって、課外活動としてよく遊ぶことも、よく学ぶことに劣らず大切なことです。

しかも、課外活動を通して得られる友人との間には、共通の趣味を介しているだけに、とても強固な結びつきが生まれます。生涯を通しての友人も得られるでしょう。指導者に師事すれば、その先生とも強い結びつきが得られます。

みなさんが、教養学部における学びと遊びを通して、良き師と良き友に巡り会うとともに、自分が本当に喜びをもって深めてゆけるものを見出して、その道に進むに十分な基礎を養われることを心から願って、私の式辞といたします。

東京大学の歌

「ただ一つ」

作詞・大森幸男 作曲・山口琢磨

ただ一つ 旗かげ高し
いまかがやける 深空の光
天龍を 負える子ら 友よ 友
ここなる丘に 東大の旗立てり
伝統の旗 東大の光
たたえ たたえん たたえ たたえん

ただ一つ 歌ごえ高し
いまなりわたる 疾風の力
双眼の 澄める子ら 友よ 友
ここなる杜に 東大の歌湧けり
伝統の歌 東大の力
たたえ たたえん たたえ たたえん



祝辞

皆さん、入学おめでとう。入学試験というハードルを越え、東京大学での教育を受ける権利を得たこと、それは誰にでも得られるものではない、とても恵まれた権利です。それを今後皆さんがどのように生かしていくか。それは皆さん自身の決意と行動にかかっています。

私事になりますが、ちょうど40年前、私も皆さんの側におりました。この大きな会場のどこかの席で、今の皆さんと同じように、少し緊張した面持ちで、入学式に参加しました。

その頃は、海外留学も限られた一握りの人のものでした。英語の苦手だった私にとっては、その後、自分がアメリカの大学で社会学の博士号を取得し、論文を英語で発表するようになるなど、想像もできませんでした。ましてや、その後、東大の教員となり、さらには50代でオックスフォード大学で教えるようになるうとは、40年前の私には、夢として思い描くことさえできないほどの大きな変化でした。

それらを可能としたのは、自分自身の努力も多少はあったでしょうが、おそらくそれ以上に、この40年間に急速に進んだグローバル化が後押ししてくれたのだと思っています。そして、おそらく皆さんは、それ以上に想像を超えた大きな変化を今後体験していくことでしょう。具体的な予測は難しいでしょうが、地球的な規模で生じる、人類にとって困難で複雑な課題に直面し、その解決を目指して、知的な格闘を続けていかなければならない、それだけはたしかです。そのための準備の時間と場を皆さんは与えられた。東京大学で学ぶ権利を得たということは、そういうことだと思います。

東大生になったことだけで 慢心するのは多大な知的損失

今の皆さんは、日本で最難関の入試に合格し、東大生になれたことを喜んでいることでしょう。たしかにそれは祝福に値することです。しかし、皆さんがそこで慢心してしまったら、それは私たちにとって多大な知的損失以外のなにものでもありません。東大で18年間教え、2008年からはオックスフォー

ドで教えている私の経験からみると、世界のトップレベルの大学の学生たちは、学ぶ量も学び方も、今の東大生に比べ何倍も厳しい学生生活を送っているからです。

オックスフォードを例に挙げれば、チュートリアルと呼ばれる仕組みが学生たちの学習に磨きをかけます。標準的なチュートリアルは、週1時間、先生一人に学生2、3人のきわめて少人数で行われます。毎回大量の文献の講読が課され、それらを読みこなした上で、自分で考え、それを毎週レポートとしてまとめて提出する(A4で10枚くらい)ことが求められます。そして、それらをもとに少人数で議論する。そこで繰り返される学習の量と質、いずれをとっても、東大で皆さんが課される学習の数倍に及びます。

オックスフォードでは、週5日毎日8時間の学習をすることを「フルタイムの学生」と呼びます。実際には、それでも足りないほどの学習が課されます。文字通り、アルバイトなどをする余裕はありません。

チュートリアルとは形式は異なるものの、ハーバードやプリンストンといった大学でも、相当量の学習を課することが当たり前に行われています。それというも、これらワールドクラスの大学では、知的に優秀な人たちにさらに磨きをかけて、私たち人類が直面している困難な課題を解決するための能力をいっそう高めたいと考えているからです。解決すべき問題が困難であると認識していればいほど、学生たちに遊ばせている余裕などないのです。

しかも、英語という国際語でこれらこなすのです。つまり、そこでの学習の成果は、そのままグローバルに通用する知識や能力に転換できます。そういう大学に、世界中から優秀な学生と教員とお金が集まり、世界の問題、人類が抱える問題の解決に貢献できる、知の伝達と創造を繰り返しているの



オックスフォード大学教授

荻谷 剛彦 さん

です。ワールドクラスであるとは、自分たちこそが世界が直面する問題の解決に知的に関われるという、自信と自負をもっているということです。

それに比べると、残念ながら東大生の知的な鍛錬は不十分だといわざるを得ません。日本の中でトップであることに甘んじているからでしょう。世界が抱える問題に果敢に挑んでいく。そのために、知的な能力にいっそう磨きをかける。そういう学生に課された学習という面で、他のワールドクラスの大学とは大きな差がつけられているのです。

世界とのギャップは日本の 大学の強みとなり得る

このように見ると、日本の大学が大変不利な状態に置かれていることがわかります。とくに人文社会系の学問では、世界とのギャップは大きいといわざるを得ません。ところが、このギャップは見方を変えれば、日本の大学の強みとなり得ます。

西欧の言語を母国語とする人びとにとって日本語は、もっとも習得困難な言語の一つです。アルファベットとは異なる、漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字という4つの文字体系をもち、しかも文法上も全く異なる特徴を持っています。

外から見れば、こうした習得の難しい言語を使って、日本人はこれまでに膨大な知識を創造し、蓄積してきました。たとえば、東京大学の総合図書館の書庫に入ってみてくだ



さい。そこに収蔵された、日本人が作り上げてきた膨大な知識の多くは、日本語で書かれています。

非西欧圏で最初に近代化に成功した日本は、西欧諸国とは異なる独自の経験をたどって現代に至りました。豊かで平和な今日の日本社会ができるまで、無理な近代化がもたらす悲惨な出来事もたくさん経験しました。戦争を始め、原爆も原発事故もその他の環境破壊も、戦時下での人権の抑圧も、植民地支配も。こうした経験を、それぞれの時代の優れた頭脳が日本語で書き残し、日本ならではの知識の創造と蓄積を行ってきたのです。体験自体が世界史的にユニークであるばかりか、この膨大な知に母国語でアクセスできる私たちは、人類の知の創造にとって一つのアドバンテージを得ているとあってよいでしょう。

このように振り返ると、私たちが私たちに世界に貢献できる道が見えてきます。グローバルな視野をもち、私たちが作り上げて

きた知識を上手に使いこなしながら、さらなる知の創造に参加する。さらには、外国語を使って、日本語のできない人びととの知の共有化を進めていく。広い視野をもって知識の創造と共有化に皆さんが参加していくことは、欧米の大学とは別の形での、人類への貢献となるでしょう。そういう日本の大学にしかできない貢献を少しでも多くするために、皆さんには入学後の学習や研究に磨きをかけてほしいのです。

日本の大学にしかできない 人類への貢献を少しでも多く

おちおちはしてられません。好むと好まざるとにかかわらず、私たちは、これまで以上に、急速に、大規模に進むグローバル化の影響にさらされていくでしょう。温暖化の問題、紛争やテロ、貧困や格差、差別や人権の抑圧、あるいは感染症の拡大など、人類が直面している課題と困難は大きく、しかも地球的な規模で、複雑に関係し合っています。ま

だ見ぬ問題も出てくることでしょう。それに対し、これまでに蓄積された知識も、これから作り出す知識も総動員して、私たちは問題の解決を図っていく。それしかないのです。日本の経験と日本語で作られた知識も十分その一端を担うはずです。

皆さんにとって、この大学で学ぶ権利を得たことと、それに伴う義務との関係がおわかりいただけたことでしょう。

入学おめでとうございます。皆さんが知の創造と蓄積とその活用に関わる、大学という学問共同体の一員となられたことを、心より祝福いたします。

入学生総代宣誓

理科 I 類
高宮日南子さん



草木の緑が萌え出した今日のよき日に、平成27年度東京大学入学式に出席できますことを、私達は大変嬉しく思っております。本日は、このような盛大なる入学式を、私達新入生のために催していただき、誠にありがとうございます。新入生を代表し、心より感謝の意を申し上げます。

私達は、長く厳しい試練を乗り越え、念願の東京大学入学を果たしました。東京大学の学生として恥じることはないよう、特に学外では、自らは東京大学の顔であるという自覚を持って、

日々の活動を行っていきたくと考えております。また、大学において日々勉学に励み、物事に関して様々な視点をも身につけるのはもちろんのこと、大学生活を通じて、知性に関してだけでなく一人の人間として尊敬されよう成長して行きたいと考えております。

様々な分野で研究が進み、日常生活においても日々変化が感じられる今日ですが、そのような時代では、主体的に物事を考え、自ら変化を作り世界を動かしていけるような人物が求められます。前期教養課程で幅広い学問に触れ、また世界中から集まった様々な考えや志を持った人々と交流していく中で、目まぐるしく変わってゆく現代において求められるような、主体性のある人間になつ

ていきたいと考えております。

今日の私達があるのは、私達自身の努力だけではなく、今まで支えてくれた父母をはじめ多くの方々のおかげだと思います。このことに感謝しつつ、これから益々自分にみがきをかけて、よりよい日本社会の一員となるための基礎を身につけるべく、精一杯努力していくことを誓います。



東京大学の歌

「大空と」

作詞・北原白秋 作曲・山田耕筰

大空と 澄みわたる淡青
巖たり我が旗 高く開かん
仰げよ梢を 銀杏のこの道
蘊奥の窮理 応じて更に
人格の陶冶 ここに薫る
栄光の学府 巍々たり赤門
我が赤門 高く開かん

大空と 新しい淡青
冴えたり我が旗 風と光らん
楽しい季節を 思慮あれこの道
文明の證 自由と常に
甚深の調和 ここに明る
精神の学府 満ちたり赤門
我が赤門 風と光らん

大空と 揺り動く淡青
生きたり我が旗 雲と興らん
羽ばたけ搏力 どよめよこの道
青春の笑い 爆けてすでに
健腕の誇り ここに躍る
堂々の学府 鏗たり赤門
我が赤門 雲と興らん

平成 27 年度大学院入学式 総長式辞

本日ここに東京大学大学院に入学された皆さんに、東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。また、ご家族の皆様にも、心からお慶び申し上げます。

本年4月に東京大学大学院へ入学したのは、修士課程が2,914名、博士課程が1,221名、専門職学位課程が348名、合計4,483名です。皆さんは、これからの東京大学大学院における研究と新たな学びへの期待に胸を膨らませていることと思います。大学院は日本の教育体系の中で最高位に位置し、中でも東京大学大学院は、規模の点でも水準の点でも世界有数の大学院です。この恵まれた環境を存分に活用して、学問に賭ける夢を育み、叶えてください。私たち東京大学の教職員は、皆さんの夢の実現を全力でサポートしたいと思っています。

私は、本日の午前中に行われた学部入学式で、新入生の皆さんに対して、大学で成長するために「学び」の姿勢のギアチェンジをしてほしいと述べました。高等学校までは、与えられた知識を身につけるという受け身の学びでしたが、大学では、能動的で主体的な学びが求められます。新入生に求められるギアチェンジとは、受け身の学びから能動的で主体的な学びへ切り替えることにほかなりません。

その為に、学部の段階で3つの基礎力を身に付けて欲しいと述べました。3つの基礎力とは、「自ら新しいアイデアや発想を出す力」、あきらめず「考え続ける忍耐力」、そして「自ら原理に立ち戻って考える力」です。さらに、この3つの基礎力をもとに、知の創造とそこから価値を生み出すための行動を起こすこと、そのためには、「多様性を尊重する精神」と自分の立ち位置を見据える「自らを相対化できる広い視野」を持つことが必要であると、学部新入生の皆さんにお話ししました。

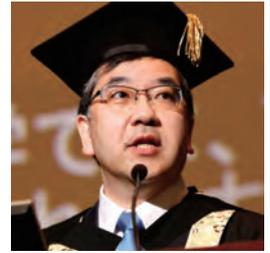
学部を卒業して今や大学院生となった皆さんには、こうした学部段階で身に付けた力を発揮して、新しい知を創り出し、その知から新たな価値を生み出す「知のプロフェッショナル」となることが期待されています。如何にしたら「知のプロフェッショナル」になるこ

とができるのでしょうか？ それを実践的に学ぶ場が、この大学院です。大学院に入学することは、新しい知の創造者となるための挑戦の始まりです。まさにこれからが本番なのです。自信をもってひるまず前に進んで下さい。

“小さくなった地球”で人類はどんな社会を目指すべきか

東京大学は、2003年3月に、東京大学の憲法ともいべき東京大学憲章を定めました。東京大学憲章は、学術の基本目標として、「学問の自由に基づき、真理の探究と知の創造を求め、世界最高水準の教育・研究を維持・発展させることを目標とする。」と掲げています。その上で、研究教育を通じて「人類の発展に貢献することに努める」と述べています。これは東京大学の学術活動を支える、揺らぐことのない基本理念です。自由な発想に基づく、真理の探究と知の創造、それは我々人間にしか出来ない、根源的で崇高な活動です。この人類の知の活動は、様々な技術を生み、それを多くの人々が活用する中で成果が共有され、新しい価値となり、社会に広く浸透していくのです。

20世紀を振り返ってみましょう。20世紀は自然科学のあらゆる分野で飛躍的な発展が見られ、科学技術の世紀となりました。例えば、物理学の分野では、20世紀の初頭に相対論と量子論が生まれ、物質とは何か、時間空間、さらには宇宙とは何か、という自然についての認識が一変したのです。そしてそのサイエンスから、半導体エレクトロニクスが生まれ、そこからコンピューターの急速な発展が生じたのです。このような科学技術の進歩によって、人類は大きな力を得て、その活動範囲は桁違いに拡大しました。高速鉄道やジェット機などの新しい交通手段や通信技術の革新によって、国境を越えた交流が可能と



東京大学総長

五神 真

なりました。特に近年のインターネットやIT技術の革新はめざましいものがあります。今や私たちは、世界中の情報を瞬時に手にすることが出来ますし、ネット上に流通する情報は、日々爆発的に増え続けています。

さて、このように科学技術が進歩する一方で、資源の枯渇、環境破壊、世界金融不安、高齢化、地域間の格差など、地球規模の課題が深刻さを一層増しています。これらの課題が人類の生活を不安定にしているのです。それは、最近世界で起きている紛争や様々な事件からも感じ取ることができます。

私が子供の頃は、「母なる大地」とか「水平線の彼方」といった表現でイメージされるように、地球はともかく、無条件に大きな存在でした。その地球が有限であるということが際だってきたのです。このような“小さくなった地球”の中で人類はどのような社会を目指すべきなのでしょう？ これからの時代を担う皆さんが、どのような社会を作っていくとするのか、それが今まさに問われているのです。

小さくなった狭い地球で、皆が同じ様に暮らす均質な社会に向かうべきなのでしょう？ 20年ほど前に、国境を越えた活動が活発化する中で、「グローバル化」という言葉が使われ始めました。そこでは、世界中がフラットになる、すなわち均質になるという方向性が、ポジティブに語られていたと記憶しています。先進諸国における、良い暮らし、高い生活の質を地球上のすべての人々が享受



する社会です。しかし、程なく、それは求める方向ではないことが強く意識されるようになりました。「個性を塗りつぶして均質をもとめる先に、人類全体の幸福、すなわち人類社会の発展はあるのか？」という疑問です。地球上には様々な歴史・文化をもった人々が暮らしています。性別、年齢、国籍を問わず、様々な立場の人々が、互いの違いや個性を受け入れ、それを尊重しあう社会を創らねばならないのです。その多様性を尊重し合うことを活力として、社会をより良くするために人々が協力するという姿、それこそが求めるべき「グローバル化」の姿であるべきでしょう。すなわち、「多様性を活力とした協働」が活発に行われる社会を、私たちは目指すべきなのです。

「論理的思考」を磨くとともに「挑戦の精神」を持つこと

皆さんには「知のプロフェッショナル」として、知の力をもって活躍し、人類社会に貢献してもらいたいです。その「知のプロフェッショナル」となるために、これからスタートする大学院をどのように活用したらよいか、そのヒントを二つお話ししたいと思います。いずれも、私自身の経験に基づくことです。

第一は、科学的論理性を一層磨くことです。

学術研究は、自由な発想を起点とし、自分自身の論理的な思考の積み重ねによって、普遍的な真理に迫る知の営みです。新しい知の創造には「論理的思考」が不可欠です。知識が論理によって裏打ちされているからこそ、個人の発見した知識を多くの人々が共有することができるのです。大学院での生活の中で、この論理的思考力をより高度に鍛える努力をしてください。そのために私が推奨したいことは、皆さんがそれぞれ取り組む研究領域において、論理的に書かれている論文、とりわけ研究の出発点とされる原論文をたどり、自分が納得できるところまでじっくり時間をかけて徹底的に読み込むことです。原典とよばれる文献はかならずしも読みやすいものではありません。それはその論文が書かれた時にはその周囲の学問体系が整っていないため、理解を進める為の道標となるものが論文の中に示されていない場合が多いからです。

私自身の大学院生時代を振り返ってみると、このような文献と格闘することが多くありました。幸い、周囲には、同じ問題意識を共有できる優れた先輩や後輩がいました。それらの人々を巻き込んで徹底的に議論をする中で、一人では読破できない難解な文献を理解することが出来たということは何度も経験しています。このような仲間との濃密な議論は、実験データの解析や解釈、あるいは共同で論文を書く場面など、大学院生の研究活動のあらゆる場面で、皆さんの研究の科学的論理性を支えるものとなるでしょう。このような大学院での学びは、間違いなくその後の人生の財産となるものです。

皆さんの中には、大学院を出て、アカデミア以外の分野で活躍する人も多いと思います。この科学的論理性を追究する中で鍛えた力は、皆さんがどのような分野で活躍しようと、皆さんを強く支えるはずで、問題について自らその原因を辿り、それに従って予断なく合理的に判断し、次のアクションを的確に提示するという、問題解決力の源泉となるからです。

第二点として皆さんに伝えたいことは、大きな野心と夢をもって未踏の領域に進む、「挑戦の精神」です。

学術研究は、基礎に立ち返り、論理的な思考によって足場を踏み固めながら進み、新たな知識のピースを追加していくという、地道な作業の積み重ねです。しかし、時として手にした新たな知によって、それまでの学問体系の全体像がまるで違った形に見えるような瞬間に出くわすことがあります。この瞬間の興奮と感動こそが学問に向かう原動力なのです。新たに追加された知のピースによって、それまで常識として定着していた学理体系の矛盾や欠陥が露わになり、大きな音を立てて崩れ去ることすら起こるのです。そして、そこから新しい枠組みが再構築されます。これがいわゆるパラダイムシフトです。皆さんには、是非このようなパラダイムシフトにつな

がる研究に向かって挑戦してほしいのです。このようなパラダイムシフトは、偶然やってくるものではありません。みずから引き寄せるものだと私は考えます。引き寄せるためには、先ほど述べたように、先人が築いた学問を基礎に立ち返って理解すること。その上でそれに安住するのではなく、それを疑い、その先を求める野心と夢をもつことです。青色発光ダイオードの研究で、昨年度のノーベル物理学賞を受賞された名古屋大学の天野浩教授の例のように、大学院時代にそのような研究のきっかけをつかむことは多いのです。

パラダイムシフトはみずから引き寄せるもの

東京大学においても、そのような例は枚挙にいとまがありません。ひとつの例を紹介しましょう。皆さんは「ヒッグス粒子」をご存じでしょうか？ 宇宙創世の秘密を解き明かす「神の粒子」とよばれるものです。2013年のノーベル物理学賞は、1960年代にこの「ヒッグス粒子」の存在を提唱したエディンバラ大のピーター・ヒッグス名誉教授とブリュッセル自由大のフランソワ・アンゲール名誉教授へ授与されました。ところで、質量の起源を与えるというヒッグス粒子のアイデアの源泉は、2008年にノーベル物理学賞を受賞された、本学出身の南部陽一郎教授が提案された、「自発的対称性の破れ」という考え方にありました。2013年に「ヒッグス粒子」がノーベル賞の対象となったのは、スイスの欧州合同原子核研究機関（CERN）の行った実験で、ヒッグス粒子の実在が証明されたことによります。その実験は、CERNにおいて、世界中から集まった3,000人を超える研究者集団によって行われました。そこで中心的な役割を演じたのが、本学大学院理学系研究科の浅井祥仁教授と本学素粒子物理国際研究センターの小林富雄教授が率いた、東京大学の大学院生を含む若い研究者グループなのです。ヒッグス粒子の発見は、真空というものは、何もなければの空間ではな





く、いまだ良くわかっていない不思議なもので詰まっっていて、それが相転移し、進化することでこの宇宙が生まれたことを示唆しているのです。まさに、我々の世界観に大きなパラダイムシフトをもたらすものです。皆さんにも、このような感動と興奮をつかむチャンスが、すぐそばにあるのです。

これまで、知の創造のための「論理的思考」と「挑戦の精神」を強調してきました。このような力を鍛える場として、東京大学は長い歴史を持っています。東京大学は1877年(明治10年)に創立され、2015年の今年に創立から139年目に当たります。今年は第二次世界大戦終戦から70年目ですから、東京大学の歴史は、第二次世界大戦の終戦を真ん中に挟んで、前後約70年ずつに分かれるわけです。そして、皆さんの「知のプロフェッショナル」としての人生は、まさに次の70年を担うこととなります。そこで、東京大学の発足時の話を少し、紹介しておきたいと思います。

東京大学創立の頃は、長い鎖国のあとで、西洋文明を急いで導入し近代化を進めるため、各方面の外国人教師を招いていました。皆さんは、東京大学の創設時から医学を教え、日本医学の恩人とされるドイツ人のベルツ博士をご存じでしょうか。ベルツ博士は詳細な日記を残しており、ベルツ博士の日記は明治期の日本の様子を伝える貴重な記録として知られています。その日記に、1901年(明治34年)11月に小石川の植物園で行われた自身の在職25年祝賀会のことが記されています。祝

賀会でベルツ博士は、次のようなことを述べています。

「日本人は科学というもの、たやすく運んで来てそこで仕事をさせることのできる機械であると誤解している。科学は有機体でありその成長には一定の気候・大気が必要である。外国人教師は、科学の樹が、日本の土壌から自力で育つように種をまく庭師としての使命感に燃えていた。それなのに日本人は彼らを果実を切り売りする人として扱った」

創立からまだ四半世紀という段階ですが、効率よく知識や技術を移入するだけでなく、本当の学問を日本に根付かせてほしいという願いを込めた苦言です。ベルツ博士は日本人がもっと自分たちの歴史や文化を誇りにし、大切にすべきだということも他の箇所でも述べています。長年、日本の若者に愛情を注いできたベルツ博士の思いを感じることができません。

東西両洋に根ざす東大の学術がグローバル社会構築の鍵になる

ではベルツ博士の願いは実現したのでしょうか。20世紀初頭の東京大学の学術を見ると、ベルツ博士の願いが実現しつつあったことが分ります。ベルツ博士が教鞭をとった医学部を卒業した北里柴三郎が、ドイツで血清療法を発見したのは1890年です。化学では、高峰謙吉がアドレナリンの結晶抽出に成功したのが1900年です。物理学では長岡半太郎による土星型原子模型の発表は1903年です。人文科学では、東西文化融合の先駆者である

岡倉天心の英文著作「東洋の理想」の出版が同じく1903年です。西洋のまねにとどまるのではなく、自然の普遍的な仕組みを探る研究や、日本の伝統的な考え方や文化を取り込みながら、東西文化融合の新しい学術に挑戦し、独自の学術を世界に発信し始めていることが分ります。ベルツ博士の精神はこのようにしっかり根付きはじめていたのです。

世界の不安定化を感じる事が多くなって今日において、人類の多様性を活力として、より良い社会を創るために、我々は知恵を出し合い、協力して行動しなければなりません。この東京大学が培ってきた、東西両洋に根ざした学術の伝統は、まさに、人類の知の多様性の表れであり、これこそが真の「グローバル社会」構築の鍵となるはずで。その中心に集う皆さんには、人類に貢献するという責任感と気概、そして野心と夢をもって挑戦して頂きたいのです。

これから大学院での生活が始まりますが、皆さんが安心して最高の学びと研究に打ち込めるように、私は東京大学総長として、さまざまなレベルで大学院の教育研究環境を充実させていきたいと思っています。また、皆さんが「研究する人生」に魅力を感じることができるよう、研究者の雇用環境の改善に向けて働きかけをしていきます。

大学で学び、研究する私たちの果たすべき役割は、学問を深め、新たな価値を創造することです。私は21世紀を担う皆さんと共にその現場に立てることを、幸運だと思っています。共に夢を持って挑戦し、新たな伝統や学問を一緒に創っていきましょう。

皆さんが元気に活躍されることを期待しています。

平成27年(2015年)4月13日

研究科長式辞

このたび、東京大学大学院に入学ならびに進学された皆さん、本日は本当におめでとうございます。また、皆さんを物心両面で支えてこられたご家族・関係者の方々におかれましても、このよき日をお迎えになったことを心よりお祝い申し上げます。

これから皆さんは、知の専門家として、さ

らなる一歩を踏み出すこととなります。これまで学部や修士課程で得た学術的知識、培ってきた洞察力や新しい思考法などをさらに高度なものとし、やがて独自の知的生産を行っていくことになるわけです。

皆さんは今、希望に燃えているとともに、「はたして自分に何がどこまでできるのだろ



情報理工学系研究科長

坂井 修一

うか」という不安をかかえているのではないのでしょうか。また、「将来希望する職業につけるだろうか」、「指導教員や研究室の人達とうまくやっていけるのだろうか」、「学生生活を長く続けることで家族や恋人に迷惑をかけるのではないか」、といった悩みをお持ちかもしれません。

私自身もそうでした。

大学院入学時の不安や悩みが消えなかったことこそが重要

私は、大多数の皆さんの2倍以上の年月を、すでに生きております。本学理学部を卒業し、修士課程・博士課程を工学系研究科で過ごし、学位を得てから29年、教育研究を職業として、どうにかやってきました。その私が大学院に入学するときに抱いていた不安や悩みのいくつかは、その後、大きく深くなりこそすれ、解消することはありませんでした。意外に思われるかもしれませんが、それこそが私自身が一番大切なことだったと思うのです。

私自身の専門は、情報システムの構成法とその応用です。と聞くと、皆さんは私のことを、時代の最先端のコンピュータやインターネットをやっているばりばりの理系人と思われるでしょう。職業人としての私は、まさにそういう立場で生きてきました。

一方で、私は、「人間社会は時代とともに進歩するものだ」という考えかたを言葉そのままには受け入れられない、理系では珍しいタイプの人間でもありました。

15000年前のラスコーの洞窟壁画を超えるものを、現代アートの画家達は描いているのか。我々が使う最新のITデバイスは、はたして縄文時代の火焔土器を凌駕するものなのか。精密さや利便性ではイエスであり、そのことの価値は否定しませんが、精神性や芸術性においてはどうか。私の場合、そういう疑問が、何をするときでもやみがたく湧き上がってきたのです。

同じことは、1300年前の『万葉集』の詩歌と今の小説、ベートーヴェンと昨今の作曲

家など、さまざまな場面で問われることでしょう。私は、いつもそういう問いを抱きながら、情報理工学の研究を、そして教育をしてきました。

ここで私は、私見にもとづいて、文明批評や文明批判を申し上げたいというわけではありません。そうではなく、もし皆さんが、同様のことや、もっと別のことで悩み、自分のやっていることに疑問を感じておられるとしたら、その悩みや疑問のうちでもっとも重いものは、たぶん一生皆さんをとらえて離さないだろう、ということ、自分の来し方を振り返って申し上げたいのです。

私の場合、コンピュータの研究が一段落するごとに、こうした「悩み」を軸として物事を組み立て直し、次の仕事を考えていくのが、習い性になっております。皆さんぐらいの年齢から10年間ぐらひは、私の研究テーマは、速くて便利なコンピュータを作ることでした。その後、信頼性や安全性が高いコンピュータ、ヒトに優しいコンピュータ、というふうに、テーマをシフトさせてきました。そして今は、ヒトを真に幸せにするコンピュータの研究に取り組もうとしています。そこには、これからの情報理工学が、経済的豊かさだけでなく、精神的・芸術的豊かさにかかに貢献するべきか、という大きな問題が含まれているはずで

す。文科系・理科系を問わず、学問というものは、一般に、これに注力し推し進めることで、すぐにゴールにたどりつくというものではありません。むしろ、その過程で課題はだんだん大きなものにふくらみ、われわれの抱える葛藤はより深くなり、時としてわれわれは、より孤独でより苦しい立場に立たされるのではないのでしょうか。そしてその孤独や苦しみこそが、学問の醍醐味ではないかと、私は思っています。

俗世間とは不即不離の関係で

さて、皆さんの中には、純粹に学問のことだけを考えて毎日を過ごすことのできる恵ま

れた方もいらっしゃるかもしれませんが、大部分の方は、日々生活していくための配慮を、学習や研究の場においてもせざるをえないのではないかと思います。これは、現代の社会システムの中の大学とその構成員の立ち位置を考えれば当然のことです。自分と家族の生活を安定させたい、地位や名誉がほしい、など、大声で言うことではないかもしれませんが、人間として自然な欲求です。

皆さんが実社会においてどのような立場に立っているのか、あるいはこれから立つことになるのかは、たとえばマックス・ウェーバーの『職業としての学問』などを読めば、理解の端緒は得られると思います。

また、ひたすらに勉強し、研究するとしても、世俗的な運不運はつきものです。「人生は芝居のごとし、上手な俳優が貧乏になることもあれば、大根役者が殿様になることもある」という福沢諭吉の言葉もあります。名誉や金銭も大切なものではありませんが、これらにこだわりすぎず、俗世間とは不即不離の関係を上手に築き、バランス良くつきあうことが大切かと思えます。

ここで、さらによく肝に銘じておかなければならないことがあります。人間はもともと肉体的に弱い生き物ですが、精神的にもとても脆いものだという事です。いろいろな事柄についてこれを自覚する必要がありますが、なかでも研究倫理の問題は、繰り返し自戒しなければなりません。剽窃するな、捏造するな、ということは言を俟ちません。こうした規範とともに、規範を破っても楽をして名誉や地位を手に入れたらという間違った考えに陥らないよう、よくよく注意していただきたいと思えます。

「初心忘るべからず」とは室町時代の能楽師世阿弥の言葉です。使い古された言葉ではありますが、皆さんは、本日ここに出席されている気持ちを、「初心」として忘れないようにしてください。倫理にもとる行動は、初心を生き生きと再現できる精神からは決して起こらないものです。いくつになっても初心を忘れない人こそ、真に優れた人であると、私も心から思います。

皆さんは、私などの知らない新しい世界を築く人達です。その皆さんの前には、人類社会のたくさんの方の深刻な問題——人口爆発と食



料やエネルギーの枯渇、先進国の高齢化、地球温暖化と環境破壊、地域間そして世代間の経済格差など——が待ったなしで押し寄せてきています。

皆さんの中には、あるいは、自分は純粋科学の徒であって、こうした社会的課題を現実には解決する人間ではないとお考えの方がいらっしゃるでしょう。たしかに、自然知・人文知の原理を探求する立場からは、世俗的な課題解決は遠いことがらかもしれません。

しかし、世の中にはじっさいに個々の現場で解決する役割もあれば、人類社会のための思想的基盤を構築したり、理学的な真実をつかまえたりすることで解決への糸口を提供する役割もあります。次の時代に、学問と社会の間でどういう因果応報が起こるかは、誰にもわからないことです。両者の関係について日頃から頭に入れておき、新しい時代を築く

ための想像の翼をいつも広げておくことが、どんな立場の人にもたいせつと思われる。

本当に大切なことは深い苦しみや悲しみを経て初めて味わえる

最後に一言だけ。「学問に王道無し」と言いますが、楽をしたり近道したりすることで、かえって本物を手に入れられなくなるものだという事は、人生そのものについても当てはまります。ほんとうにたいせつなことは、苦しみや悲しみを深く経験してはじめて味わえるものだ、といっても良いでしょう。

たとえばレンブラント晩年の自画像に描かれた彼自身の顔は、美醜が複雑に入り交じった表情をしています。こうした高度な芸術は、苦しみ悲しみを自分のものとしてきた人でないと味わえないものなのでしょう。ジャズの名曲「ラッシュ・ライフ」は我々の欲望がも

たらす人生の機微を語ってくれますが、これを理解するには、やはり人間らしい喜怒哀楽の経験が必要です。絵画だけでなく、音楽だけでなく、家族や友人とのささやかな語らいの場でも、苦勞の末にこそ深い幸福感は味わえるものです。単純な世俗的成功よりも、むしろそうした彫りの深さをもつことのほうに、私などはより大きな価値を置きたいと思えますし、こうした思いは、年齢を重ねるとますますはつきりしてきます。

まだまだ語り尽くせないのですが、もう時間になりました。これからの皆さんのご健康とご健闘を心から祈ることで、私の式辞を終わりにしたいと思います。皆さん、深い悩みを抱えることがあっても、広い心で悠々とこれからの学問生活を楽しみ、さらに人生そのものを生き抜き、そして自分らしい彫りの深い幸福を手にしてください。

祝辞

皆さん、この度は東京大学大学院に入学、進学まことにおめでとうございます。ご両親、ご家族の方々にも心からお喜び申し上げます。東京大学は、言うまでもなく、世界的最先端研究を進め、これに基づいた教育を進めている大学です。皆さんは自らの将来について目標、夢をもって入学されたことと思いますが、これからの大学院での勉学・研究に全力を注ぐならば、皆さんの夢の実現に向けて、大きな一歩を踏み出すことができるものと確信しております。

インフレーション理論は当初空理空論と思われていた

さて、私は6年前に定年退職するまで、理学系研究科物理学専攻におきまして、教育研究にたずさわっておりました。振り返って見れば、この時代ほど幸せな時はなかったと申し上げることができます。それは何をにおいても優秀な大学院生と共に、研究することができたことです。私の研究は理論の研究ですので毎日の研究活動は、机に向かって論文を読むか計算をする、また大学院生と議論をすることです。昼食と夕食は大学院の皆さんとともに生協の食堂でとり、研究の進捗状況から始まって、研究の動向、科学論、社会政治問題など議論し、語らったものです。

私の専門は、物質世界の最もミクロの世界を研究する素粒子物理学と、逆に物質世界の最もマクロな極限、宇宙の研究を進める天文学との分野融合的な分野、素粒子的宇宙物理学であります。その中でも、特に力を注いで進めた研究は、私達の住むこの宇宙そのものの創生の研究です。私達の住むこの世界、宇宙がどのように生まれたかということは人類の歴史が始まった頃から宗教や哲学の課題として問いつけられたもので、この人文的課題に物理学で挑もうとする研究です。

現代の科学的宇宙論では、この宇宙は熱い火の玉、つまりビッグバンで始まったと考えられています。しかし、私が研究を始めた1970年代には、宇宙はなぜ火の玉で始まったか、まったくわかっておりませんでした。私は2008年にノーベル賞に輝いた南部陽一郎先生——南部先生は東京帝国大学を卒業された皆様の大先輩ですが——南部先生の素粒子理論とアインシュタインの相対性理論を組み合わせて、素粒子のように小さかった空間が急激に膨張し、こ



自然科学研究機構長

佐藤 勝彦 さん

の急膨張の終わるとき、火の玉宇宙になるという理論を提唱しました。この理論は今日、インフレーション理論とよばれ、宇宙論のパラダイムとなっていますが、提唱当時は、まったく理論物理学の空理空論としか思われませんでした。

天文観測により宇宙は138億年前に誕生したことがわかってきましたが、138億年前の宇宙誕生の瞬間など観測できるはずがないと考えるのが一般的常識でしょう。しかし、30年後の今日、観測技術の飛躍的進歩により、大きく裏付けられるようになってきました。その理由は極めて簡単です。宇宙では遠くを観測すれば、よ



り過去が見えるからです。例えば、一億光年先の宇宙を観測すれば一億年前の宇宙を観測したことになります。20世紀末から21世紀はじめにかけて、アメリカNASAの天文観測衛星は、極限的遠方から来ているマイクロ波電波を観測することにより、この理論を強く裏付けました。さらに、現在、東京大学の研究者も加わった日本のグループ、またヨーロッパやアメリカのグループによってインフレーション理論を実証する専用の人工衛星を打ち上げる計画も進んでおります。その結果が待たれるところです。

つい私の研究の話を長くしてしまいましたが、幸いにも定年までの四半世紀に、研究室から40名余の修士過程修了者、30名余の博士課程修了者を送り出すことができました。多くは東京大学を始めとする大学や研究機関で、また民間企業で活躍しております。

修士では小さな城を持ち 博士では城を拠点に出撃を

私の大学院指導方針は修士課程においては、まず極めて狭い分野であっても指導教員も越えるような分野、小さな城を持つということでした。博士課程における指導方針は、この自分の城を拠点として、より広い分野の研究者とネットワークを作ること、特に国際的ネットワークを作れということでした。その中で自分の新たな研究課題を見つける、つまり問題発見能力を身につけよと言うことでした。グローバリゼーションの時代、国際会議も多く開催されます。国際会議に出席し、自分自身の研究成果を広く伝えることは重要なことですが、それ以上に国際会議出席の意義は、多くの研究者と知り合い、互いにファーストネームで呼び合うようなネットワーク作ることです。また、大学院時代に、1月でもより長期に1年でも、外国の大学、研究機関で研究することも、強くお勧めしたいと思います。私自身も若いころ知り合った同世代の海外研究者は、今も連絡を取り合う一生の友人となっています。若い時代に作られたネットワークは一生の財産であり、以後の研究の推進に大

きく寄与します。

さて大学で進められる学術研究は、知的好奇心に基づき、自然界の真理を探究し、また人間・社会の課題を解決し、さらに新たな課題を発見する研究です。これにより人類社会の持続的発展の基盤を作り、人類の幸福に寄与するものです。皆様がそれぞれ進めようとしている、またすでに進めている研究も、実に多様なものでしょう。この真理の探究から、人間・社会の課題解決に至る多様な研究こそが、私達の国を、誇りある知の国としているのであり、またひいては国力の源となっております。

日本の学術研究は20世紀後半、日本経済の成長とともに飛躍的に発展し、21世紀初頭には、日本発の科学技術の論文の数は世界第2位となりました。また、21世紀になってからのノーベル賞受賞数は日本人11名となり、アメリカに次いで世界2位を誇っております。現在アメリカ国籍となっている南部、中村先生を加えると13名にもなります。

しかし、日本の学術の研究、特に大学における学術研究は、大きな危機に直面しております。我が国は、現在少子高齢化、人口減少などの深刻な問題を抱えております。国の予算のおよそ3分の1以上が借金でまかなわれています。

科学研究費の増加は止まり、また国立大学の運営費交付金は毎年減額されております。さらに、日本発の研究論文の数の増加はほとんど止まり、2010年から2012年までの平均では世界第5位と落ちこんでおります。

日本の学術は分野融合的領域 において遅れをとっている

現在、私は、文部科学省のある審議会*の委員を務めておりますが、この日本の学術研究の危機的状況を克服する方策について、1年を越えて議論し、この1月にはその結果を発表しております。ここはその内容を紹介する場ではありませんが、皆様の研究を進める上で、重要なことが指摘されておりますので、ひとつ、紹介したいと思います。

今日、多くの研究分野で、学際的・分野融合的領域の創出や、新たな研究領域の創成が強く求められております。実際、文部科学省・科学政策研究所の調査によれば、学際的・分野融合的研究領域の数が、2008年あたりから世界で急激に増加しております。しかし、残念ながら日本からの分野融合的領域での論文数の伸びは、少ないままになっております。いま日本の産業再生のために、科学技術イノベーションの重要性が強調されています。イノベーションの源泉となるものが学術研究ですが、日本の学術研究は、分野融合的領域、さらに新たな研究領域の創成において、大きく遅れをとっております。今、新たな研究領域の創成は、日本の大学に求められている喫緊の課題であります。

私は、最初にご紹介いただいたように、大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 機構長として務めております。この法人は個々の大学単独では設置できない大型設備、施設、例えば巨大な天体望遠鏡や高エネルギー加速器などを開発・設置し、また基盤的な研究資料、設備を整備し、大学の研究者に利用していただき、世界最先端の研究を実施していただくための法人です。大学共同利用機関法人は4つ設置されていますが、私どもの自然科学研究機構はその1つで、宇宙の研究をおこなっている国立天文台をはじめ、自然科学系の5つの研究所から構成されています。私は、5年前、大学共同利用機関法人の任務として、従来の常識に縛られず、自由な新鮮な発想ができる若手研究者に、分野融合的研究にチャレンジしていただくために「若手研究者による分野間連携研究プロジェクト」を立ち上げました。

ひとつの研究プロジェクトあたり、年間一千万円足らずではありますが毎年10件程度を採用しております。リスクのある研究で、すべてがうまくいっているわけではありませんが、初年度に採択したひとつのプロジェクトは、いま特許申請の段階まで進みました。このプロジェクトは国立天文台、ハワイのすばる望遠鏡で天文観測を進めている若手研究者と、基礎生物学研究所で植物細胞の研究をしている若手の方が連携し、国立天文台で開発された、空気の揺らぎによる星のイメージのぼやけを、光の波面をそろえることによって無くする補償光学の技術を、植物細胞などマイクロ世界を観測する顕微鏡に応用し、新たなタイプの顕微鏡を開

* 文部科学省 科学技術審議会学術分科会報告「学術研究の総合的な推進方策について」2015年1月



発しようというものです。近い将来、光をゆがめる媒質を通してしか、観測することしかできない生物医学分野で、広く使われる顕微鏡になるものと期待しております。皆さんも、大学院生であっても、若手研究者として、常識に縛られない新鮮な発想や、アイデアを武器として、是非、分野融合の研究にチャレンジしていただきたいと思います。

「意思あるところに道あり」

この場におられる皆さんは、大学院修了後、大学、教育研究機関のみならず、広く民間企業、官公庁、また国際機関等、多様な場で活躍されると思います。その場合、その職場での仕事は直接大学院での研究と関係しない場合が多いかと思いますが、大学院での学術研究の経験は、言うまでもなく、そのような場合も仕事に大きく寄与します。研究を進める過程で身に着

けた問題発見能力、問題解決能力は、分野をこえて皆さんの力となります。私の研究室で宇宙物理学の研究をしていた大学院生には、銀行、保険、シンクタンク会社などで活躍している方もあります。宇宙物理学のような純粋学術研究も、厳しい世界的競争の中で成果を出さなければなりません。その厳しい競争の中で身につけた新しい課題を発見する能力、そして、それを解決するために身につけた数理的な解析能力によって、まったくの異分野でも強力な戦力となって活躍しております。

さて、長くなってしまいましたがこれで私の話

を終えたいと思います。この場におられる皆さんは将来にたいする不安を感じつつも、目標と夢を抱いて東京大学大学院に入学、進学されました。世界最高レベルの教育研究組織である東京大学大学院で、全力で学び、研究に励むなら、将来、必ずや皆さんの夢は実現することでしょう。

「意思あるところに道あり」、皆さん、どうぞ頑張ってください。

本日はおめでとうございます。

入学生総代宣誓

総合文化
研究科
田中涼介さん



本日はこのような素晴らしい入学式を挙行していただき、心より感謝申し上げます。

実は私が入学式という催しに参加するのはかれこれ7年ぶりになります。というのも、私が大学に入学した2011年には東日本大震災の影響で入学式が大幅に縮小されてしまったためです。震災から先月で4年が経ちましたが、未だ多くの課題が山積みのまま残されています。またもう少し昔に目を向けると、今年2015年は色々な災害や事件、あるいは大戦からの節目の年ということも言われております。

さて、今我々はまさに大学院での学術の日々の入り口に立っているわけですが、その我々が避けて通ることができないのが「その学問がどう世の中の役に立つのか」という問いであります。この一見ありふれた問いは、実の所答えることが非常に難しいものです。というのは、我々の社会が現に直面している問題を解決する上でどのような知識が有用か見極めることすら時には難

しいのに、その上この世界には我々を脅かす未知の問題が無数に潜んでいるためです。それはちょうど先ほど触れた災害や事件のように、我々が予想もしていなかった形で唐突に降りかかることもあれば、学問の営み自体が新たな問題を浮き彫りにすることもあります。

このように考えた時、学問、あるいは体系的な学知とはまるで、「未知なる脅威に対する人類の砦」のようだと思われれます。東京大学憲章には「学術によって人類の発展へ貢献する」ということが謳われていますが、私はここでむしろ学術は人類の「存続」のためにある、と位置づけたい。思えば、我々のはるか祖先が初めて言葉を手にし、知識の蓄積が可能になって以来、おそらく一貫して知識は我々の生存を脅かす色々な脅威から我々を守り続けてきました。大学院で研究を行うということはいわばこの、未知の脅威に対する我々の砦の城壁——いつからそこにあるとも知れない岩むした土台の上に築かれた、高い高い壁——に、あらたな築石を積み重ねる作業に擬えられるでしょう。その作業の殆どは学問体系自体の壮麗さやある種の突出した成果の華やかさからは程遠い、地道なものとなるでしょう。しかし、これから我々新入生は、その一つ一つの築石の

重みを信じ、引受け、誇り高く邁進していかねばなりません。

よって私は本学新入生を代表し宣誓します。学を志すものとしての矜持を常に忘れず、先人の積み上げた学知に

敬意を払い、真摯な学究に努めることをここに誓います。

最後に、私自身が虚心坦懐に学び、自らの研鑽を絶やさぬことを改めて誓い、宣誓の言葉の結びと致します。

奏楽曲の変遷

入学式		卒業式	
平成17～24年度	ワーグナー作曲「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」	平成16年度	バッハ作曲「管弦楽組曲第一番」
平成25年度	レナード・バーンスタイン作曲「キャンディード序曲」、[「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」]	平成17年度	バッハ作曲「管弦楽組曲第一番」
平成26年度	ミハイル・グリンカ作曲「ルスランとリュドミラ序曲」、[「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」]	平成18年度	ヘンデル作曲「王宮の花火の音楽」より「序曲」
平成27年度	サンサーンス作曲「サムソンとデリラより」"パッカナル"」、[「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」]	平成19年度	バッハ作曲「管弦楽組曲第一番」
東大の式典を盛り上げる音楽部管弦楽団の奏楽。入学式では「マイスタージンガー」が定番曲で、近年はそれに加えてもう1曲を演奏する形になっています。一方、卒業式では「管弦楽組曲第一番」、「管弦楽組曲第三番」より「ガボット、ブルーレ、ジューク」、「管弦楽組曲第三番BWV1068より序曲」とバッハの曲がこの10回で5回登場。「王宮の花火の音楽」より「序曲」、「水		平成20年度	バッハ作曲「管弦楽組曲第三番」より「ガボット、ブルーレ、ジューク」
		平成21年度	ヘンデル作曲「王宮の花火の音楽」より「序曲」
		平成22年度	ヘンデル作曲「水上の音楽」より「アラホーンパイプ」
		平成23年度	ヘンデル作曲「水上の音楽」より「アラホーンパイプ」
		平成24年度	ワーグナー作曲「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」
平成25年度	ワーグナー作曲「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」	平成24年度	ワーグナー作曲「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」
平成26年度	バッハ作曲「管弦楽組曲第三番BWV1068より序曲」	平成25年度	ワーグナー作曲「ニュルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」

上の音楽」より「アラホーンパイプ」とヘンデルの曲が3回登場しています。さて、来年度はどの曲が演奏されるのでしょうか。

ハチ公と上野英三郎博士像建立記念

東大ハチ公物語

クイズ

教職員なら間違えたくない!

今春、東京大学に新しい名所が誕生しました。ハチ公と上野英三郎博士の像です。ハチの飼い主が東大教授だったことがあまり知られていないという認識のもとに立ち上がった有志たちと、多くの賛同者の支援のおかげで、ついに再会を果たした1人と1匹。物語の一端をクイズ形式でお届けします。

Q.1

像の除幕式が2015年3月8日に行なわれたのはなぜ?

- ① たまたま
- ② 「みつばちの日」だから
- ③ ハチ没後80年の命日だから

Q.2

今回のプロジェクトの言い出しっぺはどの先生?

- ① 正木春彦先生(農学生命科学研究科)
- ② 塩沢昌先生(農学生命科学研究科)
- ③ 一ノ瀬正樹先生(人文社会系研究科)

Q.3

上野博士の死後、ハチは博士と交流のあった小林菊三郎さん宅に預けられました。さて、小林さんの職業は?

- ① 焼き鳥屋
- ② 植木職人
- ③ 大学職員

Q.4

東大ハチ公像にはあって渋谷ハチ公像にはない特徴は?

- ① 左耳が立っている
- ② 首輪をつけている
- ③ パーマをかけている

Q.5

近年の研究で新たに判明したハチの重要な死因とは?

- ① がん
- ② ショック死
- ③ 餓死

Q.6

白っぽい毛色、飼い主が駒場の教員、家が富ヶ谷、育ての親が獣医学科の教員、とハチと共通点が多い有名犬は?

- ① イチ公
- ② 物性犬
- ③ キクマル

Q.8

農業土木学の開拓者である上野博士の主張はいまも日本の〇〇に息づいています。さて、〇〇に入る言葉は?

- ① イヌ
- ② イネ
- ③ 水田

Q.10

上野博士がハチに対して行なっていたのは次のうちどれ?

- ① 放し飼い
- ② 断耳
- ③ 化粧

Q.11

東大の像の建立以前、1983年に上野博士はハチと再会しています。それは?

- ① 渋谷のハチ公像の前に博士の胸像を運んだ
- ② 霊媒師が博士とハチの霊をともに呼んだ
- ③ 博士とハチのそっくりさんを探して対面させた

Q.12

国立科学博物館にあるハチの剥製には、あるものが入れています。それは?

- ① 制作者の名を書いた紙
- ② 秋田犬の人形
- ③ 焼き鳥

Q.13

像を制作した名古屋在住の彫刻家・植田努さんの作品といえば?

- ① アルプスの羊飼い
- ② ケサリアの牛飼い
- ③ 長良川の鶴飼い



2015年3月8日(日)の除幕式には、生憎の雨にも関わらず約5000人の人々が駆けつけ、ハチと上野博士の再会を祝福しました。今後、像周辺環境整備も行う予定。弥生キャンパスに来た際は、農正門に入ってすぐ左手に注目!

Q.7

ハチはある時期、同僚のイヌにいじめられたといます。そのイヌの名は?

- ① エス
- ② エム
- ③ ジョン

Q.9

像の制作にかかった約1000万円の費用はどう工面した?

- ① 総長のポケットマネーで
- ② 大学の埋蔵金から捻出
- ③ 賛同者からの寄附で

A.1/③ ハチの遺体が見つかったのは1935年3月8日のこと。夕方には死を悼む3000人もの人が渋谷駅に集まりました。なお、ハチの好物で有名なのは焼き鳥。
A.2/④ 没後ハチ十年に合わせ何が行なうべきだと考えた一ノ瀬先生が、2010年に当時の佐藤慎一副学長(現・文書館長)に相談したのが発端。その後、一ノ瀬先生と全学委員会で面識のあった正木先生、上野博士が属した研究室の現主任である塩沢先生と賛同の輪が広がり、全学的プロジェクトになりました。
A.3/② 小林さんは上野家に入りしていた植木職人。ハチ公がなつており、渋谷から近い富ヶ谷に家があるということ

で預けられました。小林さんは、子どもにはコロケを食わせてもハチには牛肉を与えたとされるほどハチを大切にしました。
A.4/① 東大の像は若い頃のハチがモデルで、耳がピンと立ち、尻尾は巻き尾。舌を出して博士に抱きつく様子が喜びがふれます。渋谷の像は晩年のハチの座り姿で、野良犬に噛まれてから折れたままになったという左耳が表現されています。
A.5/① 当時の病理解剖でフィリア症(犬糸状虫症)とされましたが、2010年末から行なった臓器のMRI観察で肺と心臓に悪性腫瘍の増殖巣が確認され、がんも重要な死因と判明しました。
A.6/④ 長谷川壽一先生(総

合文化研究科)が(を)飼っているスタンダード・プードル。『東大ハチ公物語』にハチ先輩を慕う名コラムを執筆しています。
A.7/① エスはハチと上野家時代からいっしょでしたが、八重子未亡人と世田谷で暮らした時期、環境変化で性格が悪化しハチをいじめたそうです。なお、ジョンとともに暮らした同僚犬。
A.8/④ 今日、日本の水田は、短辺30m×長辺100m、短辺側に農道と水路があり、反対側の短辺に沿って排水路があるという区画構成が標準。これは上野博士が著書『耕地整理講義』(1905年)に記した内容でした。
A.9/④ すべて賛同者の寄附で賄われたのが大きな特徴。そ

の額は東大基金と「作る会」の口座への寄附を合わせて450件1000万円以上に達しました。
A.10/① 上野家の敷地は200坪と広く、イヌは綱でつながれずのびのびと暮らしていました。部屋にも入れたため、ハチが畳に脱糞することもあったとか。
A.11/① 農学資料館にある上野博士の胸像を渋谷ハチ公像前に運んで対面させるイベントが、ハチ没後50年となる1983年の慰霊祭にて行なわれました。
A.12/① 剥製師の本田晋さんが自分の名などを書いた紙をこっそり取めたそうです。ハチの骨は空襲で焼失しましたが上野博士が眠る青山霊園に「ハチ公の碑」があり事実上の墓とされ

ています。なお、農学資料館にはハチの内臓が展示されています。
A.13/② 第44回日展(2013年)に出品された「ケサリアの牛飼い」は、インドの少年が牛をつれて歩く姿を表現した作品。ハチ公と上野博士像と同様に、動物と人の関係が生き生きと表されています。3月8日の除幕式に出席した植田さんは、便宜上別々につけていたハチ像と博士像を一日の作業を終える際に向かい合わせていた、と制作時の逸話を話してくれました。



「ハチと博士の物語」を詳しく知りたい人は『東大ハチ公物語』(一ノ瀬正樹・正木春彦編/東京大学出版会)を読もう!

ひょうたん島通信

大槌発! 第25回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



漁師さんの船に乗せてもらって思うこと

野畑 重教

大気海洋研究所海洋生命科学部門生理学分野 特任研究員

漁を終えカモメを従えて帰港中、この後水揚げが始まる。

大槌の沿岸センターにはサケ科魚類の研究で震災前から何度か訪問していた。しかし土嚢を持ち上げて椎間板ヘルニアで入院し、しばらくは大槌出張メンバーからは外されてしまった。約1ヶ月寝たきりになり一生歩けないのではないかと考えた。その自分が今では3ヵ月も滞在して実験することになるとは……、よくよく考えるととても不思議である。

大槌滞在中はほぼ毎朝新おつち漁協の定置網漁船に乗せてもらい、サケの行動を調べている。去年は水揚げでかなりこき使われてヘトヘトだったが、この冬は慣れたせいか種々無難にこなしてきた。漁師さんも毎日船に乗って網を引いている研究者に慣れたようで、とてもよくしてもらっている、感謝。今年は「サケのことを語り合いたい」とかで飲みにも行った。大してサケの話などしなかったが、漁師さんのプライベートの姿を見るのはちょっと不思議でもあり、呂律が回っていない姿を見ると面白くもありちょっとショックでもあり、でもまた少し距離が縮まったかなと嬉しく思う。

私がお世話になっているここ3年は、サケの水揚げは好調のようである。網を



引き揚げていく途中から大漁かどうかはなんとなくわかってくるのだが、大漁だと網を引くもの大変だし、その後の水揚げも大変だし、朝飯が11時くらいなんてことにもなり、不謹慎ではあるが「あちゃ〜」と思ってしまう。漁師さんの中にも私と顔を会わせてニヤッと笑い「今日はやばいよ!」なんて口に出して言う方もいるが、それでも大漁旗を掲げて帰港する時は誇らしげでとても満足に見える。この冬に帰帰したサケの年齢を調べたところ、来冬4年魚となり水揚げの多くを占めることになるはずの3年魚

が極端に少ない。来冬のサケの回帰がどうなるのか? 少し不安である。大漁だと肉体的にはきついですが、それでも漁師さんががっかりしている姿より誇らしげな姿を見たい。少しでも多くのサケが大槌湾に帰ってくるのを祈るのみである。

毎年少しずつメンバーが入れ替わっている。10年後この船のメンバーはどんな風に変わっているのだろうか? 大槌の街はどう変わっているのか? 時々考えることがある。そしてその時に自分の研究は何かの役に立っているのだろうか? 今はコツコツと成果を積み上げていくことにしようと思う。

ぴーちゃん日記

大変お世話になりました

国際沿岸海洋研究センター事務職員の「ぴーちゃん」です。6年前、岩手大学から出向で沿岸センターに着任し、大槌町で3年程過ごすも、震災によりふたたび岩大に異動。2年の時を経て2013年4月から戻ってきました、がまたお別れです。

早いもので、岩手大学から出向でふたたび沿岸センターに着任してから、あっという間に2年の月日が流れました。私事ですが、平成27年4月から岩手大学に戻ることとなりました。

平成25年4月に異動してきた当初は、在任中に新センター研究棟完成、とまでは行かなくとも、建設終盤で後任者にバトンを渡せるものと思っておりました。しかし被災地の復興は思ったようには進まず、前任者の東大職員である川辺さん

が2年前に大槌を離れて私がまた着任した時と状況に大差はないように感じます。大槌町民の多くは今なお仮設住宅で不便な生活を続け、新センター研究棟や災害公営住宅の建設はもう少し先になります。新センター研究棟完成どころか、建築着工、いやそれ以前の設計の前に異動とは残念でなりません。4月からは岩手大学で被災地への復興支援を続けたいと思います。

皆様におかれましても、引き続き大槌

町ならびに国際沿岸海洋研究センターの復興にご支援いただけますよう、よろしく願いいたします。

思えば震災前からの長い間、東京大学の皆様には大変お世話になりました。どうもありがとうございました。



「2年間お世話になりました」(ぴーちゃんこと、本名ピーター君からご挨拶)。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

あちこちそちこち
東京大学 第1回

本郷・駒場・柏以外の本学を現場の教職員が紹介

人文社会系研究科附属
北海文化研究常呂実習施設の巻 熊木俊朗

最北の東大は北方考古学の拠点



施設に併設された資料陳列館。

北海文化研究常呂実習施設は、北海道東部のオホーツク海に臨む北見市常呂町にあります。最近、カーリングでも注目された常呂町は北緯44°、冬は流氷が押し寄せる極寒の地ですが、豊かな海産食糧資源に支えられ、国内でも有数の大規模な先史文化の遺跡群が手付かずで遺されています。これらの遺跡の発掘調査を、文学部の考古学研究室は半世紀以上にわたって継続してきました。当施設は遺跡調査の拠点として、現在、教員二名が常駐し、発掘調査の実習など、北東アジア考古学を主なテーマとする教育研究に取り組んでいます。

発掘実習では、文学部で考古学を専修する学生が、施設に併設された学生宿舎に宿泊しながら、一ヶ月にわたって遺跡の発掘に携わります。タフさが求められますが、研究環境や設備が充実した実習として国内外から評価を得ており、近年では北京大学なども協力し、調査を共にしながら考古学を専攻する学生間の国際交流を図っています。

この恵まれた環境と研究の蓄積を活用し、最近では専修課程の枠を越えた体験型の教育プログラムにも積極的に取り組んでいます。学芸員養成課程の科目である博物館学実習や、英・セインズベリー日本藝術研究所と協力した文学部夏期特別プログラム、全学の学生を対象とした体験活動プログラムなど、先史文化の遺跡研究を体験できる場を用意していますので、北方の考古学、そして夏や冬の北海道に興味のある方、機会を見つけて一度遊びにきてください。



1.遺跡には1,000年前の竪穴住居跡が窪んだまま残ります。2.遺跡の発掘調査。新発見の驚きと喜びが。3.施設のロゴに採用された1,100年前の偶像。ヒグマです。4.学生宿舎での夕食。

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokoro/>
留学生さん
いらっしやい!

第22回



海を越えて東大に来た学生に聞きました。



ネパール

ウッタム・パウデル さん

Uttam Paudel

新領域創成科学研究科
自然環境学専攻 博士2年

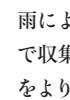
ネパール出身。家族が大切だと情熱的に語り、クリケットやカメラを愛するウッタムさん。困難も明るさと気力で乗り切る、「タフな」東大留学生です。

Q. どうして日本(東大)に来たの?



婚約者がMEXT奨学金で東大に来ることが決まっていたんです。だから彼女と結婚して、僕も一緒に日本に行こうと決心しました。いろんな大学の教授にメールを書いたんですが、やはり東大がいいなと。今の研究室を選んだのは英語の情報が充実していたからです。

Q. 博士課程で何を研究していますか?



雨による土砂崩れの予知です。衛星や飛行機で収集した画像やデータを分析して土砂崩れをよりピンポイントに予知することを目指しています。卒業後は母国で大学教員になりたいです。「まだ帰らないの?」が母の口癖で(笑)。



Q. 日本(東大)で困ったところは?



日本語は難しいです。それから、必要な書類提出があったり、提出期限が決まっているのに戸惑いました。日本にはロボットが溢れていると思って来たのですが、成田に着いてみたら普通の家があるんだ、と驚きました(笑)。

Q. 日本(東大)の好きなところは?



日本人の礼儀正しいところが好きです。書類がきちんとしているのも、今となっては納得です。柏キャンパスは施設が新しくいいですね。研究室で英語が話せるので助かります。



Q. ネパールのいいところは?



ブッダやエベレストだけじゃないんです!僕が育った西部ネパールガンジは平原なんで(笑)。ゾウに乗ってサファリもできますよ。



協力:国際センター本郷オフィス 制作:本部広報課

ワタシのオシゴト 第110回

RELAY COLUMN

国際部留学生・外国人研究者支援課
生活支援チーム主任

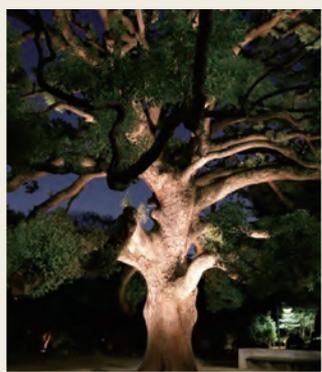
森 正之

留学生・外国人研究者の生活支援



職場屋上にて (撮影者・山形職員)。

生活支援チームでは、本学に在籍している約3千人の外国人留学生へ向けた、住居支援（一部、外国人研究者含む）・奨学金・在留資格・アルバイト求人票受付等の業務を担当しています。私が従事している住居支援業務では、本学保有の各インターナショナルロッジへの入居選考・JASSO東京国際交流館への入居・民間企業等からの借上契約物件への入退去・留学生が賃貸物件契約を結ぶ際の大学による連帯保証等を扱っています。新規渡日された留学生・外国人研究者の方々に少しでも早く日本に慣れていただくためにも住居は重要案件ですので、今後もサービス向上を目指していきたいと思います。趣味は、一昨年買った一眼レフカメラでの風景撮影ですが、なかなか満足できるものが撮れません。写真道は奥が深いです。本郷キャンパスは格闘技の聖地である後楽園ホールも近いので、年に数回プロレス観戦するのも楽しみです。昨今の「プ女子」増加も大歓迎でございます！



夜の安田講堂横のクスノキ (撮影者・森)。

得意ワザ：寝落ち

自分の性格：照れ屋

次回執筆のご指名：中川健太郎さん

次回執筆者との関係：東大採用時の先輩です

次回執筆者の紹介：マジメなだけじゃない！

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第113回

商標ってどんなもの？ (その4)

今回は、日本で登録される商標の種類と、東京大学の商標の一部をご紹介します。東京大学の商標としては、大学商標（大学法人等を示す商標）と部局商標（部局もしくはその内部組織を示す商標、または部局もしくはその内部組織がその業務に関して継続して使用する商標）があります。そのほかに、成果商標（研究成果について東京大学の業務に関連して教職員等が使用を希望する商標であり、個人の責任と費用負担のもと出願できる商標）もあります。

なお、大学商標の使用には、大学の信用を維持するために本部広報室の許可が必要です。

●文字商標：文字からなる商標。例えば、

東京大学

UTokyo

商標登録第4845999号他
(大学商標)商標登録第5623725号他
(大学商標)

●図形商標：写実的なものから図案化したもの、幾何学的模様等の図形から構成される商標。例えば、

商標登録第4871651号他
(登録商標：モノトーン)
(大学商標)商標登録第5100158号
(登録商標：モノトーン)
(理学系研究科 部局商標)

●記号商標：のれん記号・仮名記号・文字を輪郭で囲んだもの、文字を図案化して組み合わせた記号など。例えば、

商標登録第5609843号
(登録商標：モノトーン)
(総合研究博物館 部局商標)

●結合商標：文字、図形、記号、色の2つ以上を組み合わせた商標。例えば、

商標登録第5273672号
(医学部附属病院 部局商標)商標登録第5359380号
(工学系研究科 部局商標)

●立体商標：キャラクターの立体看板・文字やマーク付きの容器（容器自体を特殊な形状にしたもの）など。

また、今年4月1日からは、日本で登録される商標の種類として、動き商標、ホログラム商標、色彩のみからなる商標、音商標、位置商標が追加になります。

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・第93回 バイブル

情報学環 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

佐倉 統

機械と人間は共存するのか？

話題の映画《イミテーション・ゲーム》を見た。コンピュータの基礎になる計算理論を発展させ、計算機を作成したイギリスの数学者、アラン・チューリングの劇的な生涯を描いた名作だ。未見の方は、是非。

80年ほど前にチューリングが蒔いた種は大きく育ち、今や人工知能は人間の能力を凌駕しそうなところまでに成長した。何も指示していないのにネコの姿を認識できるようになったり、クイズ番組で優勝したり、チェスや将棋でチャンピオンを破ったり、人と機械の間の壁は次々と突破されている。人工知能といえばホラ吹きや代名詞みたいに思われていたが、ビッグデータ解析と深層学習という二枚看板を伴う今回の波は、さすがに今までとはちよつと違うような雰囲気が濃厚に漂っている。2045年には人工知能が人間の知性を凌駕する技術的特異点を迎えるという人もいるぐらいだ。

ブラックホールの理論などで画期的な業績をあげた「車椅子の天才」スティーヴン・ホーキング博士は、完全な人工知能は人類を破滅させるかもしれないと発言をして話題を呼んだ。彼の不安は、的中するのだろうか？

2045年かどうかはさておき、いずれ人工知能が人間の能力を上回る日が来るのはたしかだろう。しかし、それが直ちに人類の破滅につながるとも思えない。人間の多くはペットのように可愛がられるかもしれないし、その時点でも残るであろう機械の苦手な分野を引き続き人間が担当することもありそうだ。

大事なことは、今から来るべき日々について、あれこれ考えておくことだろう。自動車が発明されて人より早く動けるようになったことや、飛行機で空が飛べるようになったことと、人工知能が人間より頭が良くなることは、何が同じで何が違うのか？ あるいは、家畜動物と人間はどのような関係を築いてきたのか？

そもそも、機械や人工物について、人間はどのような関係をもってきたのか？

科学と社会と文化と人間とが、どのような関係を築いてきたのか、これからしていくのか。科学コミュニケーションにとっても、真価の間われるシミュレーション作業になるだろう。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

救援・復興支援室 より

第47回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(3月)

3月 福島県大熊町学習支援ボランティア、福島県相馬市「寺子屋」学習支援ボランティア、東日本大震災スタディツアー

ザシキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文：佐藤 克憲

以前本コラムにおいて、昨年度から「学習支援ボランティア」経験者により設立された学生団体UTVCが、同ボランティアへの学生派遣等の運営を大学と共同で行っていることを紹介しました。より学生の目線に立った形で運営が行われているものの、「未経験者がいきなり学習支援ボランティアに参加するのはハードルが高い」、「被災地の復興は進んでいて、もう支援の必要はない」、とと思っている学生も少なからずいるようで、運営サイドではボランティア活動とは別の形で、「震災を風化させず、学生が震災を考えるきっかけとする」企画を検討してきました。その結果、遠野市及び陸前高田市をフィールドとした「スタディツアー」を実施することとなり、遠野東大センターを拠点に本年2月27日から3月2日の3泊4日で、UTVCの学生3名を含む12名の学生の参加を得て実施されました。

私は初日の遠野市総務部防災危機管理課からの被災地後方支援に関する説明と、3日目の日中の活動(漁業体験、葡萄酒兼飲料工場及び自動車学校兼農園見学)に同行しました。被災地の現状を目の当たりにし、現地の方の生の声を聞いたことは、UTVCのブログに掲載されている感想を見ても、参加学生が被災地について考え、行動するためのモチベーションになったのではないかと思います。また、実際に毎日拠点に戻ってからの「振り返り」の意見交換は、白熱のあまり時間を忘れて明け方近くまで行われた日もあったようです。

現時点において次の開催は未定ですが、被災地でのボランティア活動などに関心がありつつも一歩を踏み出せない学生の方には、次の機会には是非参加してみることをオススメします！

今回もお読みいただき「オアリガトガンス！」。



(左)遠野市総務部長(当時)による、後方支援活動の説明。
(右)漁業体験出発前に、港の被災状況の説明を受ける。

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html
Email : kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
内線 : 21750 (本部企画課)

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
3月13日	柏地区共通事務センター	柏キャンパスから東大の未来を考える ～東大を先導する実験キャンパス～シンポジウム開催	3月4日
3月18日	本部施設企画課	懐徳館庭園、国の名勝に指定される	3月10日
3月18日	医科学研究所	ノーベル賞受賞者リチャード・ロバーツ博士による特別講演が開催されました	3月2日
3月27日	本部総務課	平成 26 年度卒業式・学位記授与式を挙行	3月24日
3月30日	本部学生支援課	平成 26 年度 学生表彰「東京大学総長賞」授与式の挙行	3月23日
3月31日	教育学研究科・教育学部	教育学部グローバル・リーダー育成、スウェーデン研修プログラム	3月8日
4月2日	宇宙線研究所	宇宙・素粒子スプリングスクール 2015 が開催されました	3月3日
4月10日	カブリ数物連携宇宙研究機構	一般講演会「超新星から探る宇宙の姿と運命」を開催	3月29日
4月10日	カブリ数物連携宇宙研究機構	CERN が舞台のドキュメンタリー映画「Particle Fever」上映会を開催	4月5日
4月13日	産学連携本部	2014 年度 第 15 期 TLF 個別課題発表会	3月27日
4月13日	産学連携本部	2014 年度「第 15 期 TLF 修了式」	3月30日
4月13日	産学連携本部	東京大学産学連携協議会「アドバイザーボードミーティング」「年次総会」を開催	3月16日
4月15日	本部総務課	平成 27 年度入学式・大学院入学式を挙行	4月13日

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
4月1日	人材育成課	人事異動	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/ 人事異動
4月1日	広報室	五神真新総長が就任	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0508_00004.html
4月1日	広報室	部局長の交代のお知らせ	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0508_00005.html

部局長交代のお知らせ

2015年4月1日付で下記のとおり部局長の交代がありました。新部局長の略歴・前部局長の退任挨拶は上記「お知らせ」のURLをご覧ください。

	新部局長	前部局長		新部局長	前部局長
大学院医学系研究科長・医学部長	宮園 浩平	(再任)	医科学研究所長	村上 善則	清野 宏
大学院人文社会系研究科長・文学部長	熊野 純彦	小佐野 重利	地震研究所長	小原 一成	小屋口 剛博
大学院理学系研究科長・理学部長	福田 裕穂	五神 真	東洋文化研究所長	高見澤 磨	(再任)
大学院農学生命科学研究科長・農学部長	丹下 健	古谷 研	社会科学研究所長	大澤 眞理	石田 浩
大学院総合文化研究科長・教養学部長	小川 桂一郎	石井 洋二郎	生産技術研究所長	藤井 輝夫	中埜 良昭
大学院教育学研究科長・教育学部長	大桃 敏行	南風原 朝和	史料編纂所長	山家 浩樹	久留島 典子
大学院新領域創成科学研究科科長	味埜 俊	武田 展雄	分子細胞生物学研究所長	秋山 徹	(再任)
大学院情報理工学系研究科長	坂井 修一	(再任)	大気海洋研究所長	津田 敦	新野 宏
大学院情報学環長・学際情報学府長	佐倉 統	須藤 修	附属図書館長	久留島 典子	古田 元夫



CLOSE UP

「東京大学総長賞」授与式を挙 行 (本部学生支援課)



授与式受賞者集合写真。



世界選手権大会で部門優勝したダブルダッチのパフォーマンス。

平成26年度学生表彰「東京大学総長賞」授与式が、3月23日(月)午後5時から小柴ホールにおいて、実施されました。

今年度は、課外活動・社会活動等の分野では、震災復興支援のウェブサイト等で発信を続けた「おいしい三陸応援団」、『このミステリーがすごい!』大賞で優秀賞を受賞した 神部 あかねさん(法学部)、「超小型深宇宙探査機PROCYONプロジェクトチーム」、ダブルダッチ競技の世界選手権大会で部門優勝したチームである藤本 征史さん(理学系研究科修士課程)・角野 為耶さん(学際情報学府修士課程)・新井 俊樹さん(文学部卒)・田野崎 はるかさん(教育学部)・箕原 凜さん(工学部)・松崎 尚史さん(工学部)の4件が、学業分野からは、豊田 良順さん(理学部)、新津 健一郎さん(文学部)、足立 真輝さん(工学系研究科修士課程)、渡邊 要一郎さん(人文社会系研究科修士課程)、秋山 和徳さん(理学系研究科修士課程)、江崎 貴裕

さん(工学系研究科博士課程)、蔦谷 匠さん(新領域創成科学研究科博士課程)の7名が受賞しました。

また、本学の名誉を高め、学生の範となる功績が特に顕著であった団体・個人に授与される、「東京大学総長大賞」には、課外活動・社会活動等の分野で、発展途上国の社会問題を工学的に解決するため行動した 青木 翔平さん(工学系研究科博士課程)、学業分野では、免疫に関する機構を明らかにし高い評価を受けた 丹治 裕美さん(薬学系研究科修士課程)が受賞しました。

総長から表彰状と記念品、お祝いの言葉が贈られた後、各受賞者が今回の受賞内容に関するプレゼンテーションを行いました。式には約140名が参加し、それぞれの活躍と功績を讃えました。授与式の後、山上会館で懇談会が開催され、受賞者や本学役員、教職員が親しく交流し、互いに良い刺激となりました。受賞者のこれからのさらなる活躍が期待されます。



CLOSE UP

柏キャンパスから東大の未来を考えるシンポジウムを開催 (柏地区共通事務センター)



挨拶を述べる濱田総長。シンポジウムには約200名の参加がありました。

3月4日(水)、伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホールにおいて、「柏キャンパスから東大の未来を考える～東大を先導する実験キャンパス～」のシンポジウムが開催されました。大和裕幸副学長(柏地区整備推進担当)を座長とした「柏地区構想検討WG」が、「教育改革」、「卓越大学院」などをキーワードとして、東大の進むべき方向を考えて、柏キャンパスを実験的なキャンパスとして位置づけ、全学的な観点から議論をとりまとめたものを報告するものです。

濱田純一総長の挨拶の後、大和裕幸副学長から柏地区整備推進構想について報告があり、続

いて、瀧川仁物性研究所長から「卓越大学院の新たな展開」、堀田昌英教授(新領域創成科学研究科)から「新たな教育システムを目指す国際学生村」、雨宮慶幸柏図書館長から「リサーチ commons を目指す柏図書館」、保坂寛フューチャーセンター推進機構長から「社会連携ステーションの構築」、三牧浩也柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)副センター長から「地域でつくる国際キャンパスタウン」と、それぞれ報告が行われました。最後に、武田キャンパス計画室柏地区部会長(新領域創成科学研究科長)の閉会の挨拶をもって終了しました。



CLOSE UP

ノーベル賞受賞者ロバーツ博士の特別講演を開催 (医科学研究所)



リチャード・ロバーツ博士。

3月2日(月)、医科学研究所にて、1993年ノーベル医学生理学賞受賞者のリチャード・ロバーツ博士の講演会が開催されました。講演会では、「Bacterial Methyloymes」のタイトルで、バクテリアのDNAメチル化転移酵素に関する最新の研究成果についてご紹介いただきました。学生を交えたラウンドテーブルディスカッション

ンでは、研究内容にとどまらず、科学に興味を持った子供時代のお話、研究者としての姿勢や卒業後の進路のアドバイスなど、多岐に渡りお話をいただき、ノーベル賞受賞者に直接質問できるという学生にとってまたとない機会になりました。講演会には本学教員・研究員・大学院生を中心に115名の参加がありました。



第88回 五月祭開催のお知らせ

本郷・弥生キャンパスが舞台となる五月祭は、3・4年生が主体のため、研究展示が盛んでアカデミックな雰囲気が魅力。国際色豊かな模擬店にも注目です。秋の学園祭シーズンとは違う時期での開催ということもあって注目度が高く、参加団体は約500、昨年の来場者数は15万人超と、全国屈指の規模を誇ります。今年の開催は5月16日(土)～17日(日)。今

回のキャッチコピーは「知識の扉を、開ける夏」。テーマソングは今年も唱頂の大員の「五月の風」。公式マスコットのめいちゃんは、解雇されるかもしれないの穏やかならぬ噂が流れるなか、ぬいぐるみ(公式グッズ)になったり、キャンパスの名所を紹介する「めいさんぽ」というコラムをFacebookで連載したりと不憚に奮闘中。がんばれ、めいちゃん!





「国際化」は「英語化」にあらず

教養学部入学以来、私学に務めた5年間を除いてずっと東大で過ごしてきた。勤務部局も文、教養、教育の3つにわたる。東大とは34年の付き合いだ。東大に対する思いの深さは人後に落ちるものではないが、ここ数年の学内改革にはさすがに疲れた。

英語を専門にする者にとって困るのが、「国際化」や「グローバル化」を理念とするプログラムの増殖である。実際には大学を「英語化」せよということらしく、それらを中心になって運営する委員の多くが、ただでさえ忙しい駒場の英語教師たちだ。数年前までその職にあった私も、何かと駆り出される。昨年度はPEAKと「国際総合日本学教育プログラム」の合併授業を引き受けたが、英語化政策に対して懐疑的な私の授業が一番多くの留学生を集めていたというから（ちょっと自慢）、実に皮肉なものである。しかも、後者の学部横断型プログラムについては教育学部教員として協力したつもりが、授業の本体がPEAKであるために同学部の貢献と見なされていないらしい。何とも理不尽だ。

大学の真の国際化とは、学生、教職員がそれぞれの持ち場において世界に誇れる学問研究、教育行政を行うことであって、英語を使

う必然性もない部局に英語を多用せよと圧力をかけたところで、教育の非効率化と教職員の疲弊を招くだけである。一方で、本当に語学を必要とする学生に対する支援態勢すら体系的に整えられていない現実を考えると、部局間の連携を密にして、既存の語学プログラムの効率的な運用と充実を図るべきであろう。

たとえば、駒場の英語部会と言語情報科学専攻を運営母体とする「東京大学英語教育プログラム」(東大の博士の院生に大学英語教育の技術を仕込むための課程)の修了生を各部局の英語指導者として雇用する手もある。私の研究科の国際交流室では英語による学会発表の指導を行っているが、そのような指導に対する需要は全学的に大きいのではないかな。ゆくゆくは留学生への日本語指導も請け負う多言語対応の語学支援センターのようなものができればいいと思うが、うかつな提案をするとまた会議が増えるので、ここでこっそりつぶやくに留める。

斎藤兆史
(教育学研究科)